1950年6月13日～14日、日本人代表団が羽田―ジュネーブ間に搭乗したフィリピン航空所属ダグラスDC-6「ミンドロ」号（機体番号PI-C294）

1950年の世界一周

～知られざる日本人使節団派遣の大プロジェクト～

1950.6.12―1950.8.15

志野靖史

ネコ・パブリッシング

1950年の世界一周

～知られざる日本人使節団派遣の大プロジェクト～

1950.6.12—1950.8.15

志野靖史

〝私たちが出てくるとき、吉田茂が明治の初めの岩倉ミッションに比すべきものだ、とそう言って送り出したからね。
――そういう気概を持っていったよ我々は〟

中曽根康弘元総理
2004年6月8日インタビューより

はじめに

〝１９５０年の世界一周〟は元総理・中曽根康弘氏の昭和二十五（一九五〇）年の世界一周を描いた作品です。当時の日本のありようは今日と大きく異なります。日本は無条件降伏の結果、連合国軍によって占領され「オキュパイト・ジャパン」（占領された日本）と呼ばれていました。敗戦国・日本は独立を失い、国家そのものが封鎖され、国際社会から隔離された特殊な地域であり日本国民の海外渡航もほぼ不可能でした。

しかし、おどろくべきことにこのような状況下にもかかわらず、当時三十二歳だった中曽根氏は稀有の機会を得て世界に旅立ちます。この時期の日本人の海外渡航は、きわめてまれで中曽根氏は日本と戦後世界との邂逅の〝さきがけ〟といえます。旅はアジア、中東を経由してスイス、ドイツ、フランス、イギリスをめぐり、さらにアメリカに至ります。

〝１９５０年〟は第二次大戦直後の混乱がようやくおさまり、戦後世界がその姿をあらわし始める時間帯にあたりました。中曽根青年が訪れたドイツには大戦による焦土が残る一方で「鉄のカーテン」があらわれ、新しい対立「東西冷戦」の始まりを告げ、またフランスでは「欧州石炭鉄鋼共同体」（ＥＣＳＣ）構想が発表され、「欧州統合」への第一歩がしるされます。さらに英国では〝揺りかごから墓場まで〟の形容のもと広汎な社会保障制度の確立をめざして福祉国家の原型が築かれています。

大西洋をわたったアメリカではニューヨークの国際連合本部を舞台に米ソが朝鮮戦争問題をめぐって激しく応酬し、両国が戦後世界の主役であることを印象づけます。そのアメリカの国土には膨大な数の自動車が行き交い、商店には豊富な品物があふれ、家庭にはテレビに代表される各種の電化製品が登場して、アメリカの市民が世界に先駆けて現代的で豊かなライフスタイルを享受していることを物語っていました。

数ヵ月にわたり、身をもって戦後世界の新潮流を体験した中曽根青年は、現地からそれぞれの表情をみせる各国の印象を詳細に記録し、郷土の地元紙（群馬県・上毛新聞に「欧米たより」と題して掲載）に書き送っています。

この作品は当時の中曽根氏の手記、その他の関連資料をもとに〝1950年の世界一周〟を再現するものです。

中曽根氏にはインタビューにおいて半世紀前の世界旅行について語っていただき、さらに当時の貴重な資料を提供していただきました。厚く御礼申し上げます。またインタビューを取り計らってくださった中曽根事務所の田中茂氏、資料についてご教示くださった、井手廉子氏にも深く感謝いたします。

二〇〇四年　夏

志野靖史

装丁：フィールドワーク
本文デザイン：森岡智哉、高橋清香
校正：久高将武
写真：今岡秀幸（スタジオ・アウパ）

1950年の世界一周　目次

プロローグ ……9
オキュパイト・ジャパン ……15
世界一周出発まで ……25
羽田からスイスまで　6月12日〜6月14日 ……35
スイスにて　6月14日〜7月6日 ……45
ドイツにて　7月6日〜7月13日 ……65
フランスにて　7月13日〜7月16日 ……91

イギリスにて　7月16日〜7月22日 …… 103
ニューヨークにて　7月23日〜7月27日 …… 123
ワシントンにて　7月27日〜8月1日 …… 145
1950年から1983年
〝マッカーサーへの建白書〟をめぐるスケッチ …… 163
中曽根康弘
〝1950年〟を語る …… 175
付録・参加者リスト …… 189

昭和二十五(一九五〇)年六月、南の空を銀色に輝く機体がゆきます

飛行機はフィリピン航空に所属するダグラスDC−6〝ミンドロ号〟。

機内では夜半に羽田を発ち一夜を明かした約五〇名の乗客が、そろそろ起きだしています。乗客のほとんどが日本人でした。

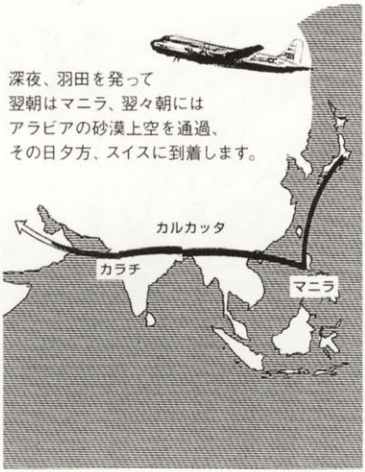
DC-6の胴体は約3.5m。ほぼ新幹線の横幅(3.38m)ぐらいのスペースに4列のシートが並びます。

かつて危険に満ち、乗り心地の点で搭乗者に忍耐を強いた〝空の旅〟も一九五〇年代になると安全性にすぐれた四発旅客機が登場し、現在の旅客輸送の原型が出来上がっています。

機内には機能的な旅客席に加え、談話室、温かい機内食を調理するキッチン、洗面室などが設けられ乗客の快適な空の旅を可能にします。

ダグラスDC-6

ミンドロ号に乗る一行の目的地はスイスでしたが、当時ソ連上空を通過しヨーロッパに向かうシベリアルートは開設されておらず、機はいったんフィリピン・マニラに向かいます。その後南シナ海を横断し、アジア、中東で給油を繰り返しながらヨーロッパに向かいます。



一行はスイスに三週間滞在―。

【スイス連邦】

首都　ベルン
面積　約4万㎢
（九州よりやや小さい）
人口　約445万人（1950年）

永世中立国として2つの大戦に巻き込まれることなく平和と繁栄を享受します。

次いでドイツに移動。

【ドイツ連邦共和国（西ドイツ）】

首都　ボン
面積　約25万㎢（日本の約⅔）
人口　約4730万人（1950年）

第2次大戦後、国土は連合国によって占領され、荒れ果てた焦土が広がります。

さらに
フランス、

【フランス共和国】

首都　パリ
面積　約55万km²
　（日本の約1.5倍）
人口　約3800万人（1950年）

ドイツによる占領から解放され戦勝国の一角を占めたフランスは、かつての華やぎを取り戻しつつあります。

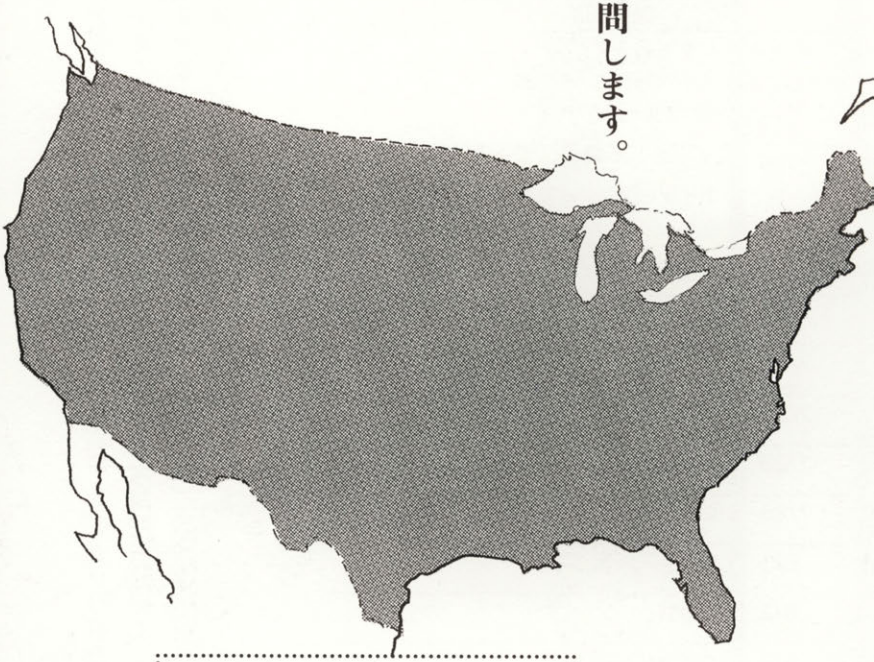
イギリスに渡り、

【イギリス（大ブリテンおよび北アイルランド連合王国）**】**

首都　ロンドン
面積　約24万km²（日本の約⅔）
人口　約4500万人（1950年）

第2次大戦には勝利したものの、巨大な戦費負担と植民地の喪失が、英国に経済危機をもたらしています。

最後にアメリカを訪問します。



【アメリカ合衆国】

首都　ワシントンD.C.
面積　約783万km²（日本の約25倍）
人口　約1億3200万人（1950年）

巨大な生産力で第2次大戦を連合国の勝利に導いたアメリカは圧倒的な経済力、軍事力で戦後世界の構築にのりだします。

羽田から西回りに世界を一周、約二カ月かけて欧米の主要都市をめぐるこの旅には国会議員・地方首長・実業界など各界の代表者約七〇名が参加し、戦後日本から初めての大規模な欧米視察旅行でした。

そしてミンドロ号搭乗客約五〇名の中にはすでに衆議院議員であった中曽根康弘（当時三十二歳）の姿もあります。

中曽根康弘 1950年の世界一周 旅程表

6/13	羽田からフィリピン航空機にて出発 マニラ－カルカッタ－カラチ
6/14	リダ－ローマ スイス・ジュネーブ到着 モントルー滞在
7/6	チューリッヒ出発 ドイツ・デュセルドルフ到着 ケルン－ボン－エッセン－ハンブルク－ ブレーメン－ハノーバー－ボン
7/13	フランクフルト出発 －フランス・パリ到着
7/16	パリ出発－イギリス・ロンドン到着
7/22	BOAC機にてロンドン出発
7/23	アメリカ・ニューヨーク到着
7/26	ニューヨーク－ワシントン
8/1	ワシントン
8/2	シカゴ
8/3	ロサンゼルス
	フィリピン航空機にてサンフランシスコ出発 ハワイ－ウェーキ－グアム－マニラ
8/15夜	羽田到着

オキュパイト・ジャパン

1945年8月末より連合軍の日本進駐が開始されます。マッカーサー元帥の指揮のもと米第8軍（アイケルバーガー中将）が東日本に、第6軍（クルーガー中将）が西日本に展開し、その規模は最大時40万人に達します。占領軍はその物量の豊富さ、生活水準の高さで日本人に大きな衝撃を与えます。

―オキュパイト・ジャパン―

（一九四五年九月二日～一九五二年四月二十七日）

日本が敗戦を迎えた昭和二十（一九四五）年から、独立を回復する昭和二十七年まで日本は世界から〝オキュパイト・ジャパン〟と呼ばれていました。

オキュパイ（OCCUPY）は「占領する」、「オキュパイト・ジャパン」で「占領された日本」を意味します。

占領時代、船積みされ細々と送り出された日本からの輸出品には“made in occupied Japan”の表記があります。

戦前、中国大陸への進出を推し進めた日本は昭和六（一九三一）年の満州事変を経て、昭和十二年には日中戦争に突入、軍事力によって広大な勢力圏を確保しようと試みます。

日本の行動は、アジア地域における権益の侵害を恐れる米・英との対立を引き起こします。

特に日米関係は急速に悪化し、昭和十六年秋、日本政府は最終的に米国との交渉を打ち切り、十二月、真珠湾攻撃をもって太平洋戦争が始まります。

戦争は三年八カ月に及び、開戦当初は日本側に有利に推移した戦局も物量に勝る米国の反攻の前に次第に悪化しました。

同盟国ドイツが敗北し、戦局が絶望的となった昭和二十年七月、連合国側は日本政府に向けてポツダム宣言を発表します。

ポツダム宣言はドイツ・ポツダムに参集した米・英・ソ連の首脳が対日処理について討議し、とりまとめた文書です。宣言は十三項からなる簡単なものでした。

「日本国に対し最後的打撃を加える態勢を整えた」連合国の「軍事力の最高度の使用は日本軍隊の不可避かつ完全な壊滅を意味すべく、また同様必然的に日本国本土の完全な破壊を意味するであろう」

宣言の前半はなお抗戦する日本に対する警告が示されています。

五項以降では降伏後に日本が置かれるであろう基本的条件が列挙されていました。

降伏後の日本は、連合国軍によって占領されます。また戦前に獲得した南樺太・朝鮮半島・台湾といった領土を失い、日本の領土は北海道・本州・四国・九州とその周辺の島嶼に限られることになります。

日本の国家主権は連合国の任命する最高司令官のもとに従属し、その指令のもと「日本国民を欺瞞(ぎまん)し」「世界征服戦争に」導いた軍国主義勢力は永久に除去されます。

「日本人の自由意思に」基づいた民主的で平和的な政府が樹立されたとき、連合国軍は撤退するものとされました。

宣言は降伏後の外地に展開する日本将兵のすみやかな帰還を保証し、日本にも最低限の経済力の維持を許されることが明記され、連合国の目的が日本国家の抹殺や日本民族の奴隷化ではないことも示されています。

日本政府部内でもポツダム宣言の評価は分かれましたが、昭和天皇の決断により宣言を受諾します。

ダグラス・マッカーサー
(1880～1964)
「歴史上いかなる植民地総督も、征服者、総司令官も、日本国民に対してもったほどの権力をもったことはなかった。私の権力は至上のものであった」
(「マッカーサー回想記」下より)

占領体制

日本占領の最高司令官に任ぜられたのが、ダグラス・マッカーサー米国陸軍元帥でした。

「連合国軍による占領」という表現は多国籍の軍隊の駐留を連想させますが、占領部隊はほぼ米軍によって編成されました。これは太平洋戦線においては米軍が主力であったこと、米国以外に大規模な部隊を派遣できる余力がなかったことによります。

最高司令官に助言するため、各国代表から構成される理事会がもうけられましたが、最高司令官に勧告する諮問機関にすぎなかったため、マッカーサーはこれらの理事会に制約されることなく占領統治を推し進めます。

さらに米国の公務員であるマッカーサーに

命令する立場にあるはずの国防総省も、陸軍の現役最先任の大先輩に軽々しく命令できない雰囲気があり、日本占領はマッカーサーに〝白紙委任〟というのが実情でした。

こうしてマッカーサーは自身の指令がそのまま法令となるという超法規的権能を持って、八〇〇〇万の人口を持つ近代国家を支配することになります。

マッカーサーはその付与された帝王のような絶対的権力、超然とした高踏的な振る舞い、端正な風貌もあいまって、〝太平洋の*シーザー〟と呼ばれました。

*シーザー（ユリウス・カエサル）（前一〇〇頃～前四四）　古代ローマの将軍。ガリア（現フランス）を平定。外征部隊を率いてローマに進駐、共和制を廃し独裁体制を敷きますが、反対派に暗殺されます。このときの「ブルータス、おまえもか」の言葉は有名です。

ダグラス・マッカーサー

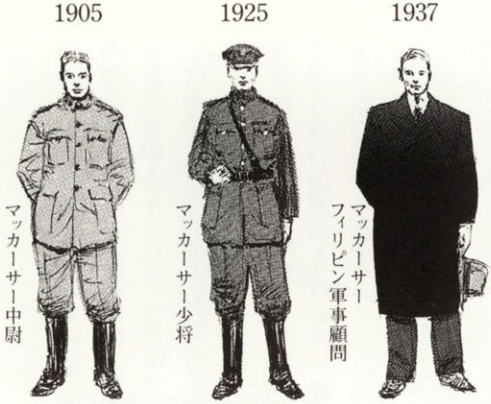
ダグラス・マッカーサーは父も米国陸軍中将という名門に生まれ、陸軍士官学校を異例の高成績で卒業しています。優秀な士官として昇進を続けたマッカーサーは第一次大戦で米軍部隊を率いて活躍します。そして昭和五（一九三〇）年、陸軍参謀総長に就任します。軍人最高位の参謀総長の任期を終えた昭和十年、米領フィリピンに軍事顧問として赴任しました。

フィリピンでの任務は現地軍を創設し、日本からの攻撃に備えることでしたが、太平洋戦争の緒戦では日本軍の前に敗退します。

オーストラリアに脱出したマッカーサーは、昭和十九年、大部隊を率いてフィリピンを奪回し、次いで日本占領の司令官となりました。

知日派？ マッカーサー

マッカーサーは当時の欧米人には珍しく戦前、三度にわたって日本を訪れたことがあり、マッカーサーはこの経験をもとに自らを陸軍有数の日本通と自負していました。



マッカーサーは1905年、極東視察に向かう父アーサーの副官として来日、日露戦争に勝利した「大山、黒木、乃木、東郷など日本軍の偉大な司令官たち」と面会したといわれます。さらに、25年には金沢の陸軍第9師団司令部を訪問しています。また37年にはフィリピン・ケソン大統領に同行して東京に滞在しています。

敗戦時の日本についてマッカーサーは語っています。

「日本は二十世紀文明の国とはいうものの、実態は西欧諸国がすでに四世紀も前に脱ぎすてた封建社会に近いものであった。日本人の生活のある面は、それよりもっと古風なものだった。

神人融合の政治形態は西欧社会では三千年の進歩の間にすっかり信用されなくなったものだが、日本ではまだそれが存在していた。天皇は神とみなされ、一般の日本国民はまともに天皇を見つめることすらはばかっていた」

「まことにアメリカ人から見れば、日本は近代国家というよりは古代スパルタに近い存在であった」（「マッカーサー回想記」下より）

マッカーサーの日本観は、例えば—天皇が

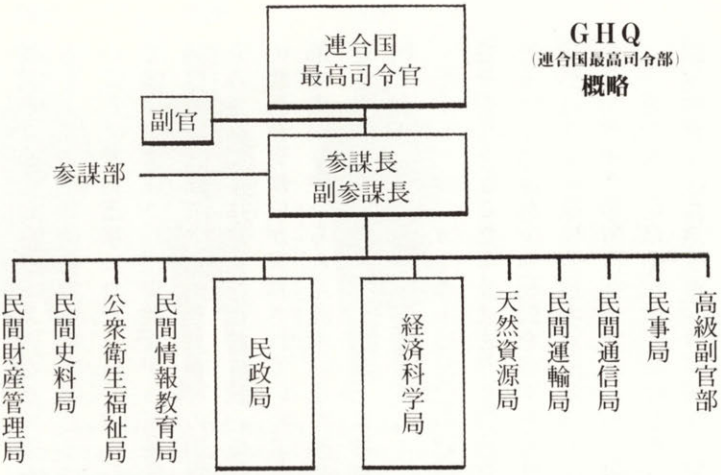
慣例と諸勢力のバランスのなかで振る舞わざるをえず、絶対的権力を行使したとはいえないこと／普通選挙（ただし男子のみ）によって議会が構成され、少数ながら左翼系政党も議席を保持していたこと／当時の国際水準からみてかなり高度で全国的に統一された規格の義務教育制度が実施されていたこと／都市部で広がりがみられた欧米的な大衆文化―などを考えれば、日本を実際以上に野蛮な後進国ととらえていた印象があります。

しかし、マッカーサーは自己の認識の妥当性を疑うことはありません。その絶対的権力をもって後進的で専制的な日本を近代的で民主的な国家に生まれ変わらせるべく、急進的な社会改革を指令します。

一連の改革には憲法改正をはじめ、女性参政権の付与、農地改革、財閥解体、新教育制度の確立などがあり、戦後日本の基本を形づくります。

「連合国軍総司令部の関心は、いかにして日本人を押さえつけておくかということではなく、どうすれば再び日本人を立上がらせることができるか、ということにある」（前掲書より）

マッカーサーが高い理想と、強烈な使命感を抱いて占領統治にあたったことは疑いえない事実で、自身のもつ権力のあからさまな行使には慎重で抑制的でした。さらにマッカーサーは頻繁に声明を発表し、日本国民を励まし、鼓舞します。この教育者的態度に加え米国による大規模な食糧援助が始まると、マッカーサーは慈悲深い〝護民官〟という色彩を帯び日本国民の畏敬を集めます。



占領時代、GHQの略称で呼ばれた連合国最高司令部は、日本政府の上に立つ真の政府でした。とくに憲法改正をはじめとする政治改革を指導した民政局（GS）、経済政策を担当した経済科学局（ESS）はマッカーサーの有力な部下が局長に就任し、強力な権限を持ちました。

しかし表面上、寛大なマッカーサーの日本占領にも巧妙な思想統制があり、水面下では強圧的な側面もありました。

占領軍は周到な検閲を実施し、反米感情につながる情報は報道されることはありません。占領法規の違反者は軍事法廷で裁かれました。

水面下で行われるGHQの内面指導は絶対で、日本の実情にそぐわない指令も強行されました。

さらに莫大な占領軍経費は日本側の負担となり、最大時国家予算の三割にも達しました。この事態に抗議した当時の*石橋蔵相は追放処分となります。

独立を失い、何事も自ら決することのできない「オキュパイト・ジャパン」という時代は日本人にとってつらく忍耐を要するものでした。

*石橋湛山（1884～1973）　経済評論家から政治家。1946年第1次吉田内閣で蔵相。在任中、日本側が負担する占領経費の削減を要求。これが原因となり、47年公職追放処分に。1956～57年首相。

占領下の日本経済

太平洋戦争は日本に大きな惨禍をもたらしました。占領中の昭和二十四年、経済安定本部（経済企画庁の前身）が一応の推計として死亡者一八五万人、行方不明者六八万人という数字を発表しています。独立後、犠牲者の数はさらに多数と推定されるようになり、現在では二七〇万人以上の死亡者があったとされています。

占領時代、日本国民は戦争による被害の全容を把握することさえできなかったといえます。

経済的打撃も大きなものでした。まず、敗戦の秋には食糧危機が深刻化します。当時の日本は約五〇〇〇万～六〇〇〇万石が平年作といわれました。しかし、戦争による人手不足、化学肥料不足から昭和二十年の収量は約三九〇〇万石（平年比六割）という減収ぶりでした。深刻な食糧不足は二十五年頃まで続きます。

昭和10～20年代の日本には約300万町歩の水田があり、年5000万～6000万石前後の収量がありました。300万町歩は約300万haに相当し、当時の水田を合計すると、北海道の約4割の面積に相当します。

鉱工業生産の落ち込みにも大きなものがありました。当時、復帰すべき水準とされた昭和九―十一年を一〇〇として、二十一年の鉱工業生産の指数値は三〇程度まで低下していました。石炭や原料の不足による基礎産業の停滞は生活物資の窮乏をもたらし、激しいインフレーションを巻き起こしました。

戦争による打撃をこうむる以前でも日本は欧米よりはるかに貧困でした。

開戦直前、日本の一人当たり国民所得は米国の五分の一程度と推定されています。太平洋戦争後になると、さらに格差は広がり、約十四分の一となります。あらゆる面で戦前よりはるかに後退した現実に〝四等国〟という言葉が実感を込めて語られました。

しかし、敗戦と占領の混乱のなかにありながらも、日本が破滅的な無政府状態に陥ることはありませんでした。大量餓死は寸前で回避され、一般国民が暴徒と化して政府の食糧倉庫を襲撃することはありませんでした。

経済は激しいインフレーションにさいなまれましたが、通貨制度の崩壊という破局には至りませんでした。

そして丹念に見回すと、敗戦にうちひしがれる占領下の日本にも、のちの成長を予感させる要素があります。

敗戦はつねに国民経済を圧迫した軍事的負担を取り去りました。民主的改革は貧富の差を縮め、のちの高度成長を支える大衆消費市場を準備します。残存した製造業には光学機器や造船といった、すでに世界水準に近い業種がありました。

苦しい環境にもかかわらず、新教育制度が実施され、さらにのちに〝団塊の世代〟と呼ばれ戦後を支えることになる世代がこの世に生をうけています。

〝オキュパイト・ジャパン〟という時代は敗戦の衝撃と混乱のなかにも、徐々に回復とのちの成長の条件が形づくられていく、そのような時代でした。

世界一周出発まで

日比谷にあった進駐軍向けのチケット・オフィス。
「そこの入口の壁に大きな字で『上海へ六時間、サンフランシスコへ四十二時間』と書いてある」「その様に我々が六時間かゝつて東京から静岡の邊へ行く間に世界の人は上海まで行つてゐる、我々が九州迄行く間に太平洋の向こう岸まで行つてゐる。これが今の世界の標準スピードである」(中曽根康弘「青年の理想」より)
占領下、中曽根は壁面の文字を見上げ、世界の動きから取り残されていく祖国の運命に焦慮の思いを抱きます。

中曽根康弘・学生時代

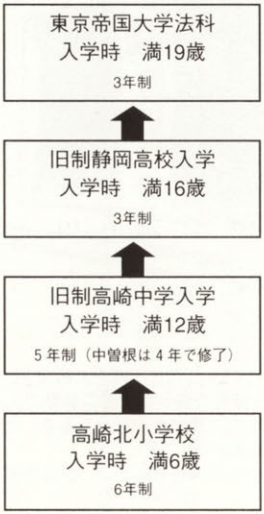
中曽根康弘は、大正七（一九一八）年*五月二十七日、群馬県高崎市で父・松五郎、母・ゆくの次男として生まれました。生家は「古久松」という材木問屋で、製材工場も備えた大きな商家でした。

中学まで高崎で過ごした中曽根は高校時代を静岡で送ります。

当時の旧制中学の修業年限は五年でしたが、四年次から高校受験資格があり、受験にあたっては、四年次に腕試しをして五年次に本番という感覚がありました。

四年次で静岡高校に合格した中曽根は一年待っての東京・一高（現・東大教養部）受験も検討しましたが、静高に進んだ本家の親戚から、静岡が「群馬にはない海とミカンとイチゴがあり、カラッ風の上州から見れば、天国のようなところだ」（中曽根康弘「政治と人生」より）とすすめられ、静高に進学します。

明治から終戦直後まで存続した旧制高等学校は、現行の教育制度には相当するものがない独特な存在でした。国家有為のエリート育成を目的としながらも、その講義内容は広汎なもので実学的なものばかりではなく、文学・哲学といった人文系の内容も盛り込まれ「全人」教育が標榜されていました。



*中曽根康弘の誕生日である5月27日は日本海海戦の勝利を記念した旧海軍記念日。
誕生花は"ひなぎく"、花占いは"純粋で無邪気。青春そのもののような人。そして平和主義者"。
（「366日　誕生花の本」　日本ヴォーグ社より）

生徒は学生寮に住み、学生による自治が行われます。寮内で培われた連帯感は卒業後も持続され、出身校ごとに人脈を形づくります。

学生のあいだでは露骨に「立身出世」を語る者、試験勉強に汲々とするガリ勉型は敬遠され、功利に満ちた世俗を軽蔑し、超然と構えてみせる〝バンカラ〟が理想とされました。

破衣破帽の学生たちは時に高歌放吟、街にくりだし、また思いをめぐらせながら山野を彷徨し、青春の日々を送ります。

静岡高校時代、中曽根は秋の伊豆・修禅寺から"天城越え"をして大島へと印象深い旅をしています。

昭和十三（一九三八）年、静岡高校を卒業した中曽根は東京帝国大学に入学します。

前年に日中戦争が勃発、学内にも戦時色が強く、在学中には*河合事件が起きます。共産主義思想はむろんのこと、自由主義的思想さえ批判され、ナチス・ドイツが礼賛されました。しかし中曽根は「我が闘争」を読んで人種差別を揚言する独善的な世界観に「ヒトラーとはけしからん、ひじょうにあぶない男」（中曽根康弘「天地有情」より）と感じます。そして、しかつめらしいドイツよりも洒脱で、繊細なフランス映画を愛好し、シャンソンを口ずさむ青年となります。

官吏を志望する中曽根は昭和十五（一九四〇）年、高等文官試験を受け合格、翌年四月、内務省に入省します。将来は府県知事というエリートコースでしたが、時代の流れは中曽根の進路にも大きな変化をもたらします。

*社会政策学の河合栄治郎教授（1891～1944）の著作が発売禁止となり、東大を追放された事件。河合は英国労働運動の研究者。共産主義者ではない自由主義的な立場の河合に対する弾圧は言論界に衝撃を与えました。中曽根は当時よく河合栄治郎の著作を読んだと回想しています。

中曽根康弘・敗戦前後

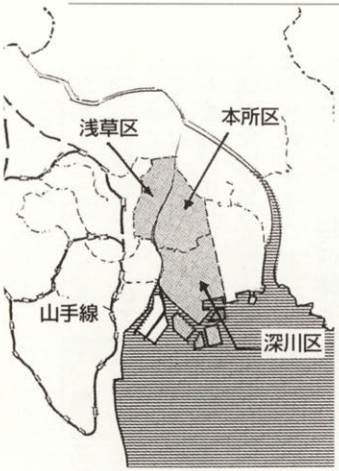
いったん内務省に入省した中曽根は、わずか二週間で海軍経理学校に入学し、訓練を経て海軍士官として出征することになります。開戦直前の十月、艦隊勤務につき、開戦後は前線を転々とします。

終戦時・海軍少佐

濃紺の詰め襟に日本刀の和洋折衷スタイル。中曽根は巡洋艦「青葉」に乗り組んだのち、フィリピン、台湾に向かい、東京の海軍省に勤務、香川県高松市で敗戦を迎えます。

中曽根は昭和二十（一九四五）年八月、海軍の運輸部隊が置かれていた香川県高松市で敗戦を迎え、残務処理を終えた十月に帰京し、いったん内務省に復帰しました。

東京では占領が本格化する一方、焦土に暮らす国民に食糧危機が迫ります。多くの戦友を失った中曽根は自分の生き残った意味を考えるようになります。ほどなく国民に直結した明朗な政治によって日本を再建することが自分の使命と強く感じるようになりました。



内務省に復帰した中曽根は警視庁監察官（警察行政を監督）として、第6区（本所・深川・浅草）を担当します。広がっていたのは一面の焦土でした。

「今度といふ今度は私の一生の大事です　高文を苦労して八番で通り　居心地の良い権力の椅子を好んで離れようというのですから余程の決心なくしてこのことは出来ません一生の大事なればこそ真剣に考へ、かうだと決心したのです」（中曽根が父に宛てた手紙「政治と人生」より）

中曽根は復帰後ほどなく内務省を退官し、〝このこと〟、つまり代議士となり政治の道へ進むことを決意し、昭和二十二（一九四七）年四月、新憲法下で初めての*衆議院総選挙に郷里・高崎から出馬します。

「政治家の街頭演説の必需品になっている白手袋も、首相（中曽根）が先鞭をつけた、といわれている」
（週刊朝日1985年10月25日号）

〝白手袋で有権者に訴える〟。今日、選挙の定番となったこのスタイルの先駆けが中曽根といわれます。

かつて海軍士官の濃紺の詰め襟に映えた白手袋は、士官のりりしさを際立たせるアクセントでした。

足かけ五年にわたる士官生活を送った中曽根は両手にその名残を残しながら、選挙民に所信を訴えます。

群馬第3区（定員4名）
有権者350,320名
1位　中曽根康弘（民主・新・30歳）
65,484票

小峰柳多（自由・前・40歳）38,446票
武藤運十郎（社会・前・46歳）37,822票
最上英子（民主・前・46歳）21,375票
（朝日新聞社　新國会「選挙大観」1947より、年齢表記は数え年）

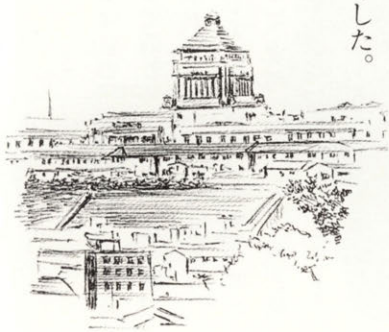
*戦後2回目、新憲法下では最初の総選挙で中曽根のほかに、吉田茂総理（高知全県区）、田中角栄（新潟3区）、鈴木善幸（岩手県1区）、石橋湛山（静岡2区）（いずれものちに総理）らが初当選しています。

一九五〇年、世界一周出発まで

昭和二十五（一九五〇）年、初当選より三年を経た中曽根は国民民主党政調副会長に就任し政策立案の責任者となっています。当時の政権与党は吉田茂率いる民主自由党で国民民主党は同じ保守系ながら吉田政権と対決しています。

〝政調副会長〟、役職名はいかめしくとも中曽根代議士の生活は当時の日本を反映し、素朴でつましいものでした。

国会議事堂の裏手にあった衆議院議員第１会館は兵舎のようなかなり粗末なものでしたが、中曽根は週末、選挙区高崎に帰る以外ここで自炊生活を送ります。



*壽屋は現サントリー

占領開始とともに日本人の海外渡航はほぼ不可能となります。さらにさかのぼれば太平洋戦争以来、日本は世界から孤立していました。

戦後大きく変貌した世界各国の様相を、日本人はごく限られた報道から思い描くしかありません。当時の中曽根はなんとか各国を訪れ、実際に戦後世界を見聞することを切望しています。

依然として日本人の海外渡航が難しい昭和二十四（一九四九）年、ＧＨＱの許可を受けた片山哲元首相と夫人らが二カ月半にわたって欧米を視察します。

片山哲（1887～1978）
弁護士を経て衆議院議員。1947～48年、委員長を務める日本社会党が第一党となり、民主、国民協同党との連立のもと片山内閣が成立。日本初の革新政権と呼ばれましたが、社会党内の路線対立がもとで退陣。

*この視察旅行はＭＲＡ（道徳復興運動）の招待によるものでした。ＭＲＡは米国出身で、英国オックスフォード大学を中心に活動したフランク・ブックマン博士の提唱による道徳運動です。この運動は戦後、欧米に多くの支持者を獲得し、米国の有力者にも支持者が多く、そのためＧＨＱによる渡航許可も出やすかったと思われます。

片山はＭＲＡ本部のあるスイスを皮切りにドイツ・フランス・英国・アメリカを訪問しています。翌昭和二十五年、ＭＲＡが担当者を派遣し、再び大会と欧米視察に参加する日本代表を募集します。この絶好の機会に「なんとか外国を見たいと念願していた私は、勧誘にあって待ってましたとばかりに一員に加えてもらった」（前掲書より）。中曽根はそう回想します。

*視察旅行の費用については航空運賃72万円を参加者が負担し、旅行中の滞在費はMRA側が負担しました。当時、中曽根の収入は「歳費が月に二万八千円」。（週刊朝日 昭和25年 5月21日号）

吉田茂と中曽根康弘

MRA日本代表の出発は六月十二日でした。当日、中曽根は代表のうち十数名とともに首相官邸を訪問し吉田総理主催の午餐会に出席します。

官邸の主、吉田総理の着こなしは当時の人から見てさえも、すでに恐ろしくクラシカルで、ビクトリア朝時代の英国紳士を彷彿とさせるものがあり、吉田の経歴をよく示しています。

1950年2月、この代表団編成のため来日したMRAのバーゼル・エントウィッセルは吉田首相と面会し、「黒い上着、細縞のズボン、白のウイングカラーに鼻眼鏡をかけ、ディケンズの小説から出てきたかのようであった」(バーゼル・エントウィッセル「日本の進路を決めた10年」より)と印象を書き残しています。チャールズ・ディケンズ(1812-70)は"クリスマス・キャロル"で知られるビクトリア朝期の作家。

外交官だった吉田にとって欧米はゆかり深く、とりわけ、ロンドンは二度勤務した思い出深い任地でした。吉田は自分にとって懐かしい土地に旅立つ中曽根を迎えます。

当選こそ同期の二人でしたが、当時七十二歳の吉田と三十二歳になったばかりの中曽根では親子以上に歳の差があり、さすがに中曽根も

と、いうわけにはいきません。

「明日立ちます。今日はご馳走になります」

送られる中曽根が礼儀正しく出発を報告すると見送る吉田は皮肉まじりに言います。

「お陰で臨時国会は静かですな」

中曽根も冗談まじりに応じます。

「椎熊氏が米国から帰ったら帳消しですよ」

「成る程。それはまたうるさい」

二人はうちとけたような、そうでもないような言葉をかわしています。

「明治維新の発展は岩倉卿以下の欧米視察に始まった今度も成功を希望する」

中曽根らを前に吉田は明治四（一八七一）年、岩倉具視らの遣欧米使節団を先例にあげ歓送の言葉としています。

吉田、中曽根の会話は上毛新聞、一九五〇年六月二十五日付記事より。椎熊は椎熊三郎。北海道選出の民主党・衆議院議員。

外交官出身で職業政治家ではなかった吉田は1946年、旧憲法下で成立した幣原内閣（吉田は外相として入閣）のあとを受けて第１次吉田内閣を組閣、1947年より新憲法施行にともなって衆議院議員であることが総理の要件となったため、父の郷里・高知より出馬し、初当選します。

首相官邸をあとにした中曽根は財界主催の送別会にも出席します。その後集合した代表一行はバスで羽田空港に向かいます。

メンバーは、一行を引率するMRAの日本側委員に相馬雪香（尾崎行雄三女）、代表団は団長に石坂泰三（東芝社長）、衆議院から福田篤泰（自由党）、川島金次（社会党）、ほかに後に合流する北村徳太郎（国民民主党・元蔵相）、地方首長では林虎雄長野県知事、浜井信三広島市長らがおり、合計約五〇名でした（後発の参加者を加えると約七〇名）。

都心を出たバスは京浜国道を品川、大森、蒲田と下り海老取川にかかる稲荷橋を渡ると眼前に羽田空港が広がります。

羽田空港は1931年東京湾の埋め立て地に造成された逓信省羽田飛行場を拡大したもの。50年当時には、2150mと1676mのアスファルト滑走路がX型に配置されています。

羽田からスイスまで

6月12日〜6月14日

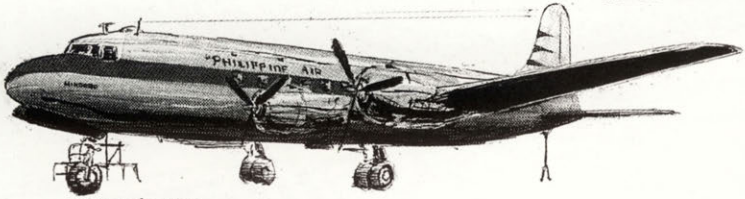
これ以降の旅行記部分の**太字表記**は「上毛新聞」（群馬県）に掲載された中曽根の寄稿記事「欧米たより」よりの引用です。「欧米たより」は中曽根の欧米視察の現地報告で、1950年6月25日から8月15日にかけて、5信18回にわたって不定期に掲載されました。なお記事の文章は読者の便宜をはかるため旧字体、送り仮名等をごく一部改めました。

羽田空港

六月十二日深夜、代表団は羽田空港に到着します。羽田空港はＡＴＣ（軍航空輸送隊）が駐屯し民間空港というより、空軍基地といった趣です。

敗戦後日本人による航空機製造、使用は禁止され、日本の航空会社は存在しませんでした。おもに占領軍の関係者、外国人バイヤーのためにパンアメリカン航空（ＰＡＡ）、ノースウエスト航空、フィリピン航空（ＰＡＬ）などの海外航空会社が羽田に乗り入れ、世界の路線と接続していました。

税関の係官は日本人が担当しており、一行の荷物を検査します。やや手間取った通関検査が終わると、一行は手荷物以外の荷物を預け、エプロン（滑走路脇の駐機スペース）に待機するＤＣ－６まで歩き、タラップを登っていきます。



PALのカラーリングはジュラルミン地肌の銀の機体に胴体をブルーのストライプがはしり、尾翼にはフィリピン国旗がペイントされています。同社は資本の3割を外資が占め、整備等でPAA（パンナム）の協力を受けますが、当時、極東最大の航空会社でした。青いストライプのカラーリングもPAAに似ています。

当時、DC−6は巨人機と形容されましたが全長は約三〇mで現在のジャンボ（ボーイング747）の約半分、速度も時速約五五〇キロでジャンボの時速約九九〇キロの約半分、搭乗人数は内装により多少違いがありますが、五〇人前後が一般的です。

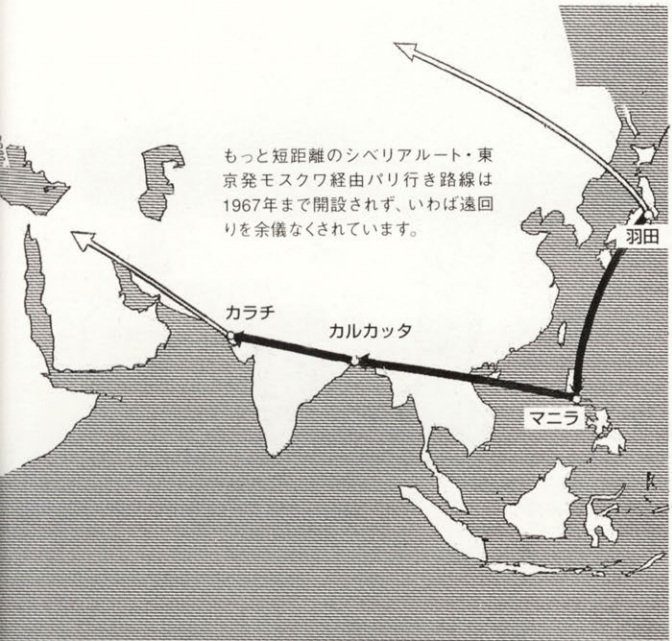
ダグラスDC−6
全幅　35.81m
全長　30.66m
航続距離　6.100km
巡航速度　約500km/h
乗客数　52〜86人

ボーイング747-100
全幅　59.6m
全長　70.5m
航続距離　7.900km
巡航速度　約900km/h
乗客数　400人

日付が変わって六月十三日午前零時五分、代表を乗せたPAL機は羽田を離陸し、フィリピン・マニラに向かいます。

代表団の目的地はスイスでしたが、当時ソ連上空を通過してヨーロッパに向かう航空路が開設されていないため、西回りでヨーロッパに向かうには、いったんマニラやバンコクなどに南下します。

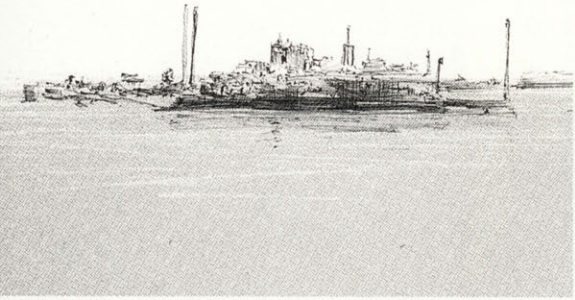
その後インドシナ半島・インド・中東を経由してヨーロッパに入る「近東経由欧州行き」と呼ばれた飛行コースをとります。



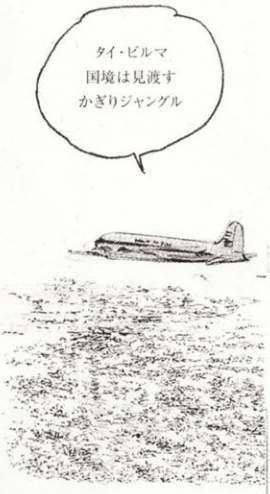
夜を徹して太平洋を南下した機は十三日の午前七時頃フィリピン北端にさしかかり、午前八時、マニラ空港に到着します。

フィリピンは太平洋戦争の激戦地で、マニラ湾には日本の艦船が点々と座礁し放棄されています。

美しい夕景で知られるマニラ湾には軽巡「木曾」をはじめ20隻以上の日本船が沈没・擱坐し、その姿はマニラ国際空港に進入する飛行機から視認できました。



二時間休憩ののち、機はマニラを飛び立ちます。南シナ海を横断するとインドシナ半島上空に到達し、ベトナムからジャングルが広がるタイ・ビルマの上空を越えて、インド領に入り、夕方、カルカッタに到着します。



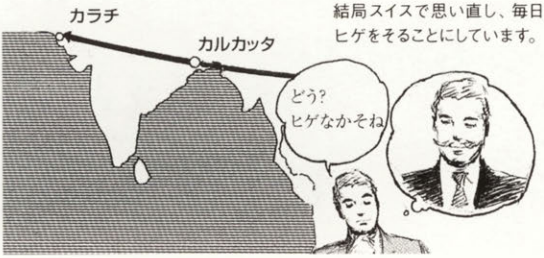
南シナ海上で最初の昼食。「紙製の膳と食器のうえに一通りの西洋料理がそろう、美味い」

日本茶に和菓子まで準備されていたことに中曽根は大いに感心しています。

カルカッタの飛行場で中曽根は食堂のインド人給仕が十八、九歳に見える若者でも美髯をたくわえていることにいたく感心します。

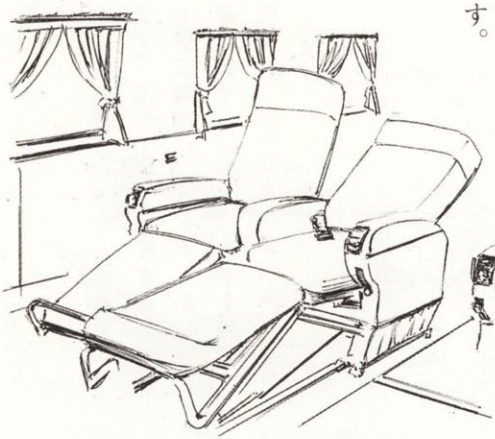
インド人の美髯におおいに感心した中曽根でしたが出国前、叔父からヒゲをたくわえる（おそらくカンロクをつけるため）ようすすめられており、多少心が動いたようですが結局スイスで思い直し、毎日ヒゲをそることにしています。

カルカッタを飛び立った機はインドを横断、午後十時、パキスタン・カラチに到着します。給油に一時間を費やし再び飛び立ち中東に入りました。



一行はスイス到着まで羽田―マニラ間、カラチ―リダ（イスラエル）間の二晩を飛行機で過ごします。

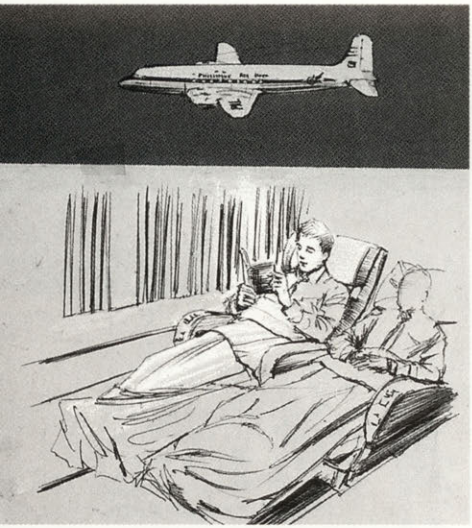
DC-6の座席はすでにリクライニングシートが装備され（これを見た当時の日本人は一様に理髪店の椅子を連想します）、乗客は水平近くまで倒したシートで眠りにつきます。



リクライニングシートは1950年春、国鉄特急「つばめ」に登場し、ようやく日本人にも一般的なものとなります。

DC−6の機内は与圧構造のため気圧は地上とほぼ等しく保たれています。上空は寒冷ですが機内には外気を取り込んでヒーターで加熱した暖気が送り込まれ、快適な室温を保ちます。

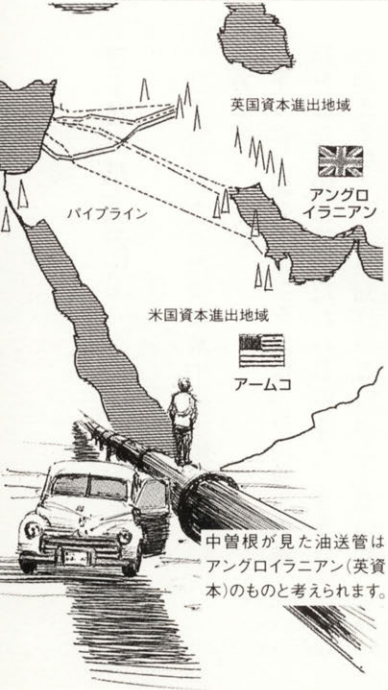
通路上の主電灯が消された機内は各座席の手元灯がまばらに光り、夜は静かに過ぎていきます。



中東上空にて

夜が明けて六月十四日の朝を迎えると、機はサウジアラビア・ネフド砂漠「ぼう莫（ママ）たる砂漠」の上空を飛行しています。

起床した中曽根が窓から外を見ると「エンエンたる黒一線が」見渡す限りの「砂漠の上に黒一直線に北西から南東に伸びている」のを見つけます。延々と続く直線は「有名なアラビヤを貫く石油の輸送管」でした。



中曽根が見た油送管はアングロイラニアン（英資本）のものと考えられます。

ヨルダンを過ぎ、イスラエルに近づくと大地は徐々に緑色を帯びます。眼下にヨルダンの死海を見てほどなく機はイスラエル領に入り、エルサレム南方にあるリダ空港に着陸します。イスラエルは地中海を挟んでヨーロッパの対岸であり、よく整備された飛行場にはすでにヨーロッパ的な雰囲気が漂います。

白パン・コーンフレーク・目玉焼き・肉・オレンジジュース・コーヒー・さくらんぼう——リダ空港での朝食はなかなかのボリューム。

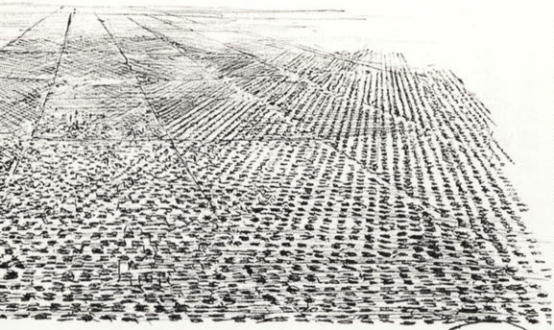
ヨーロッパ上空にて

リダを飛び立った機は地中海に出て北西に進みます。

ギリシャ周辺のエーゲ海は〝多島海〟の通称どおり「**脱ぎ捨てたわらじの如く、さそりの這える如く**」、「**日向ぼっこの天とう蟲の如く**」さまざまな島が浮かびます。

正午過ぎにイタリア半島の先端〝ブーツ〟のつまさきにさしかかり、午後一時、ローマに到着します。

ヨーロッパに到着した中曽根の目にまず映ったのが飛行場の滑走路に敷きつめられた、米国供与の補強用鉄板でした。



大戦中、米軍は予定地をブルドーザーで荒造成し、鉄板を敷いて1週間ほどで滑走路を完成しました。反対に日本は人海戦術で半年ほどかかりました。中曽根は海軍時代、フィリピン・ダバオで飛行場建設の経験があります。

飛行場には米軍の輸送機が駐機し米軍人がごく当たり前に食事をしています。第二次大戦では日本・ドイツとともに敗北したイタリアでしたが、すでに昭和二十二（一九四七）年、独立を回復していました。しかし要所には米軍が駐留し、基地を使用しています。

中曽根は初めて訪れたヨーロッパに「**地球をとりまく大きな力**」、つまり超大国となったアメリカの力が及んでいることを感じます。

イタリアは敗戦後、日独と同じように連合軍による占領を受けましたが降伏が1943年と早く、そのため日独より一足先の47年に独立を回復します。しかし旧植民地、属領は放棄し、要地にはNATO条約に基づき米軍が駐留します。

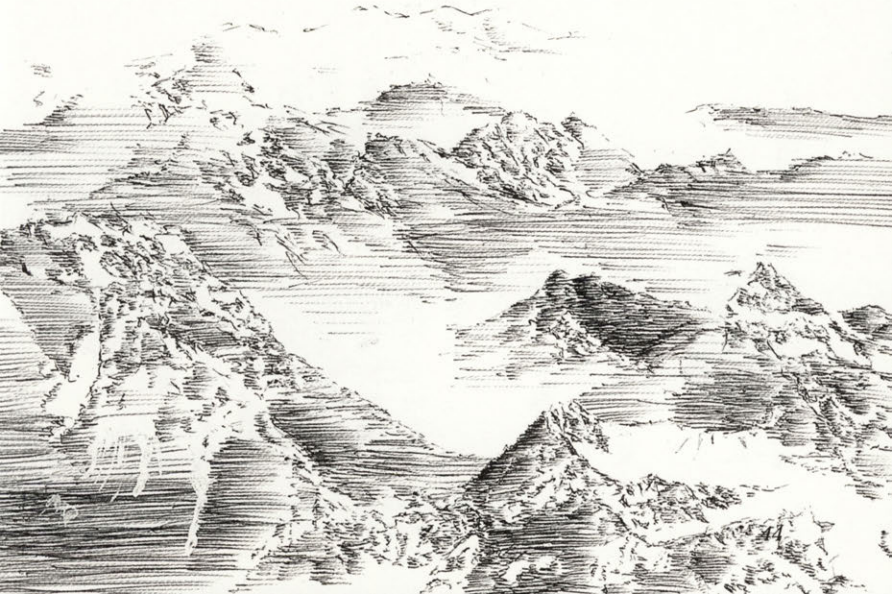
時計を二時間遅らせて午後十二時半、機はローマを飛び立ちスイスに向けてのフライトに臨みます。北西に進み、やがて北部イタリアの穀倉ロンバルディア平原上空に至り、平原を過ぎると眼下はしだいに隆起し、山がちとなりついに峻険なアルプスとなります。

「高度八千、一面の雲と霧」、時折**「アルプスの頂上が見える」**切り立った山稜を下に見てスイス領内に入ります。

機が降下を開始すると、雲の切れ目から三日月型の湖水、レマン湖が見えます。

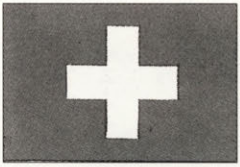
座席ベルトを着用した中曽根は**「耳がじん〳〵鳴り出し」「奥底がビリビリ」**する痛みに耐えながら着陸を待ちます。

機は徐々に降下し、山あいに開けたジュネーブ・コアントラン空港に着陸します。現地時間六月十四日午後三時でした。



スイスにて

6月14日〜7月6日



コアントラン空港
「ここの建物は今までの中で最も立派」、コアントラン空港はチューリッヒ空港とともにスイス国内でもっとも整備された国際空港。敷地の一部はフランス領にかかり、空港からフランス側にも出国できます。

ジュネーブからコーまで

羽田を出発して約四十二時間、ジュネーブに到着した一行は疲労困憊(こんぱい)していましたが、もう一息、レマン湖を右回りに半周してMRA本部のあるモントルー市・コーに向かいます。

レマン湖はスイス・フランス国境に位置する三日月型の湖で、面積は琵琶湖とほぼ同じ。
ジュネーブはレマン湖がローヌ河となってそそぎ出す出口に位置しています。

ジュネーブ―モントルー間は湖岸を鉄道が走りますが、代表団はMRAが用意したバスで湖岸道路を行きます。

「ここのバスは周囲のガラス窓が馬鹿に大きい」――空港で一行を待っていたのは天井までガラス張りの遊覧バスで日本人を驚かせます。ドイツやスイスでは戦前よりガラス張りの遊覧バスがありました。

日本代表を乗せた三台の遊覧バスはレマン湖を右手に見て湖岸道路をなめらかに走ります。時速五〇キロ、当時の日本の感覚でいえば相当な高速でしたが、代表たちはバスが疾走しても土ぼこりのたたない、舗装された道路の乗り心地のよさに感心します。

モントルー周辺はスイス有数の保養地でチャップリンやオードリー・ヘップバーンが晩年を過ごしました。

「公園の中に街があるようなものである」

「路も家も花で埋まっている」

丘に広がるブドウ畑の緑、点在する農家は小作りながら軽井沢にある外国人別荘のように趣味がよく、レマン湖畔の景観は中曽根の目を楽しませます。バスは落ち着いたたたずまいのローザンヌ市街を抜け、ジュネーブを出て二時間半、モントルーに到着します。

マウンテン・ハウス

モントルーに到着するとバスはつづら折りの山道をたどってコーの丘を登り、いくつもの尖塔がそびえる宏壮な建物に到着します。もともと〝コーの宮殿〟と呼ばれる高級ホテルだったこの建物がMRA本部で、マウンテン・ハウスと呼ばれます。五棟二〇〇〇名以上を収容できるハウスでは一〇〇〇名を超す各国代表が集います。

エントランスのポールに掲げられた日章旗と日本語による歓迎の歌に思わず感慨をおぼえた一行は簡素ながら盛大な晩餐会に臨みます。

標高900m、レマン湖を望む通称“マウンテン・ハウス”、MRA本部。

「本部は元ホテルで、戦時中客がなくて荒れはてたまま銀行の担保に入っていたのを、MRAが買い取って改修したという話だが、凄く豪奢なものである」(大宅壮一「世界の裏街道をいく」より／評論家・大宅壮一は1954年に取材のためMRA本部を訪れています)。建物はクリーム色の壮麗なもの。

MRA（道徳復興運動）

MRA（Moral Re Armamentの頭文字、直訳は「道徳再武装」となり、日本では「道徳復興運動」と表記されることが多かった）は、ルーテル派の神学を学んだフランク・ブックマン博士の提唱による道徳運動で、従来の宗教活動や政治運動とは一線を画し、絶対の「正直、純潔、無私、愛」の四つの徳を再認識し行動の規範として、ひとりひとりの実践を通じ社会の改良をめざす運動でした。

フランク・ブックマン
（1878〜1961）
アメリカ・ペンシルベニア州出身。1921年、英国・オックスフォード大学を中心に絶対無私と愛を基本とする精神運動を創設し、MRA（道徳復興運動）に発展させます。戦後スイス・コーに西独・アデナウアー首相、仏・シューマン外相を招き独仏和解に尽力します。

大戦による惨禍と原爆登場による人類滅亡の恐怖が連想される不安な時代状況のなかMRAは新しい人間革新の道として多くの賛同者を獲得します。トルーマン米大統領、シューマン仏外相、アデナウアー西独首相ら各国有力者の理解と応援を受けたといわれています。

中曽根は「現地では、MRAの運動を推進している人々の信念と、徹底的に他人に奉仕する精神に感銘した。しかし、私は〝絶対の〟という言葉にこだわってしまい、政治家ではとてもこれを貫き通すことはできないし、できると言えばそれは人を欺くことになると思って、この運動に飛びこんでいくことはできなかった」（「政治と人生」より）そう回顧します。中曽根は政治の道を歩みますが、戦後まもない時期にMRAによってさまざまな人々が交流し、欧米視察の機会を得たことは意義深いことでした。

マウンテン・ハウスの三週間

マウンテン・ハウスに滞在した日本代表は各国代表に交じって討議や発表に参加し、さらに人間改革をテーマとした芝居を観賞します。

代表の出身地も思想的な立場も多様で、いわばコーに小さな国際社会が出来上がります。

中曽根は米国、カナダ、英国、ドイツ、チェコ、ポーランドなど欧米各国代表や、遠方からやってきたインドネシアなどのアジア代表とも交流しています。

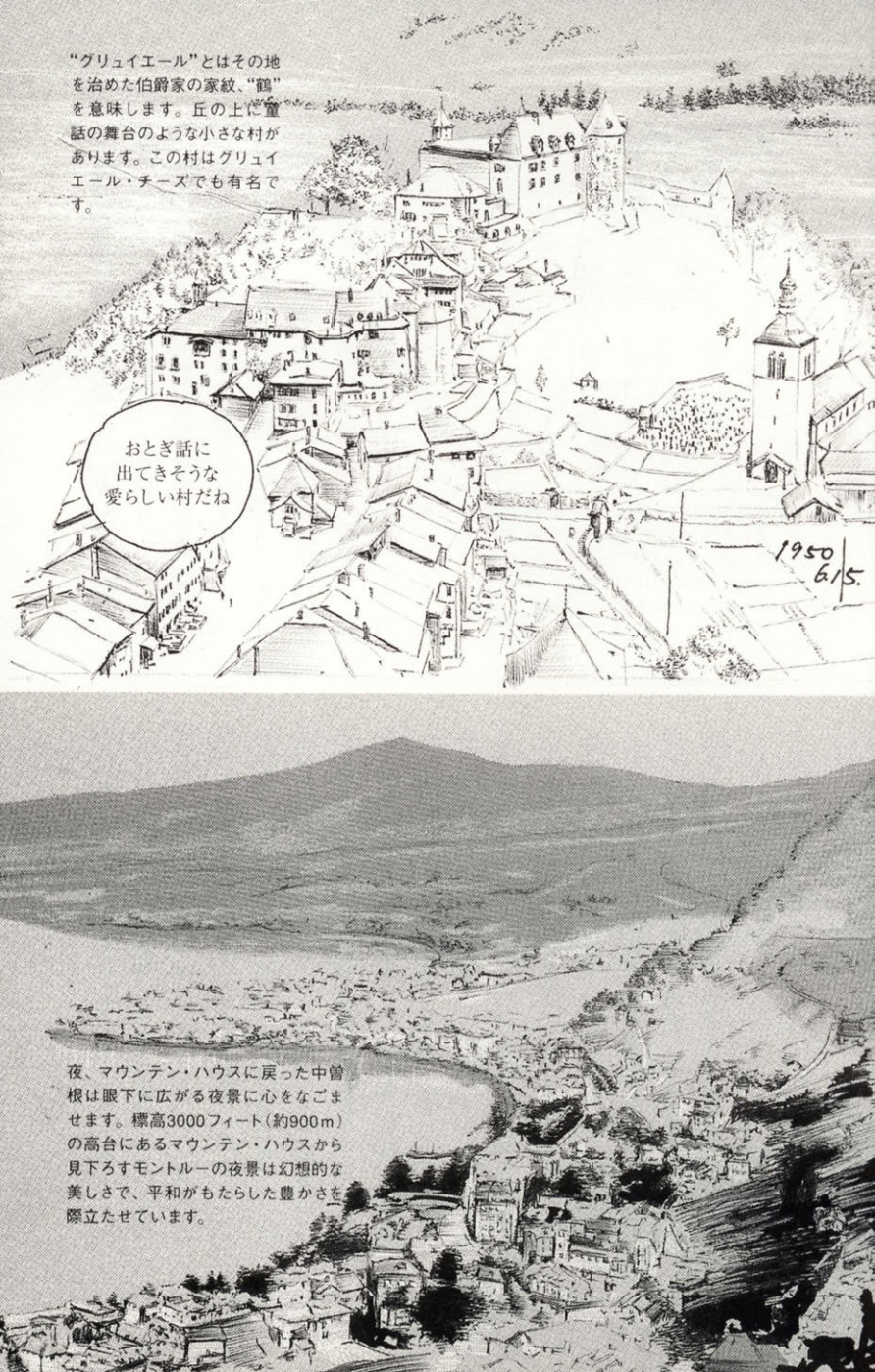
マウンテン・ハウスでは各国代表が当番制で炊事、洗濯、掃除などを担当します。中曽根もフェミニンなエプロンでペティナイフをふるいます。

スイス到着から一夜明けた十五日、中曽根は午前中「**脚が重く、体が熱っぽ**」く体調の不良に悩まされます。

到着後、日本代表は軽井沢のような冷涼な気候に多くが体調不良に陥りました。

しかし食事をとり午後になると回復したのか、コーから約四十五キロの所にあるグリュイエール村まで出かけていきます。

発熱した相部屋の川島金次代議士（社会党・埼玉1区）



“グリュイエール”とはその地を治めた伯爵家の家紋、“鶴”を意味します。丘の上に童話の舞台のような小さな村があります。この村はグリュイエール・チーズでも有名です。

夜、マウンテン・ハウスに戻った中曽根は眼下に広がる夜景に心をなごませます。標高3000フィート（約900m）の高台にあるマウンテン・ハウスから見下ろすモントルーの夜景は幻想的な美しさで、平和がもたらした豊かさを際立たせています。

日本とスイス　マッカーサーと中曽根

戦後の一時期〝永世中立国スイス〟は日本人にとって深い憧憬の対象となります。

〝日本よ東洋のスイスたれ〟昭和二十二（一九四七）年、マッカーサーは就任挨拶にGHQを訪問した片山新首相にこの言葉を送りました。

終戦直後のマッカーサーの言動は理想主義的な色彩が強く、日本が世界に先んじて一切の武装を捨て、平和主義に徹するよう求めます。しかし、朝鮮戦争以後なし崩しに日本の再軍備を開始せざるをえなくなります。

敗戦直後の戦争の惨禍に苦しむ日本人にこの言葉は広く浸透し、二度の大戦にも中立を保ち、平和と繁栄を謳歌するスイスは日本にとって目指すべき国家モデルに映ります。

世界に先駆けて一切の武装を放棄した平和国家として歩むことこそ、新生日本の崇高な使命であるという言説も盛んになされました。

しかしスイスは国民皆兵制をとり強力な自衛力を持つ武装中立国家であり、マッカーサーが想定した〝非武装中立〟国家ではありません。

スイスでも青年代議士の姿は目立ち、中曽根は現地の報道陣に記者会見を申し込まれ応じています。会見の中で中曽根は「**われわれの理想はスイスだが、現実はドイツだ**」と説明しマッカーサーの名句を否定しています。

スイスの中立が維持されたのは各国がその決意に感じ入ったからではありません。スイスは西ヨーロッパのはずれに位置し、国土は狭隘（きょうあい）で占領しても大きなメリットはありません。列強はスイスへの侵攻を控え、むしろ外交ルートとして活用することを考え、このような力学のもとでスイスの中立は承認されてきました。日本やドイツのように人口も多く、戦略的に重要な位置にある国家はそれ自体が争奪の対象であり、中立を維持するのは至難です。

当時ソ連・中国という広大な共産圏に隣り合わせる日本が非武装中立政策をとれば、徐々に共産圏の干渉を受け、いずれ属国化するであろうという強い懸念がありました。

スイスと同様、中立を宣言したベルギーはドイツのフランス侵攻の進撃路にあたり、両大戦中ともにドイツ軍によって占領されています。

また占領下の日本で非武装中立論が強まると、占領の長期化をもたらしかねませんでした。日本が独立後中立政策をとると予想されると、米国はやがて共産圏に従属すると懸念される日本にそもそも独立を与えない、つまり占領の固定化をもたらすと考えられたからです。

気高く響く、マッカーサーの言葉でしたが、日本の現状を冷静に分析するとその現実性はあやふやなものでした。結局日本は中立政策はとらず吉田首相の決断により日米安全保障条約を締結、西側陣営の一員として独立します。「日本よ東洋のスイスたれ」、「**われわれの理想はスイスだが、現実はドイツだ**」。マッカーサーの感傷的な言葉と中曽根の冷静な指摘は二人の立脚点の違いを際立たせています。

朝鮮戦争の勃発

六月二十六日、中曽根はマウンテン・ハウスのふもとに降りて理髪店に向かいます。

上品で清潔な理髪店に満足した中曽根でしたが、料金の高いことには閉口しています。

散髪中、コーで知り合ったドイツ人がやってきて、朝鮮戦争勃発を伝える新聞を中曽根に示します。六月二十五日、北朝鮮軍が韓国領に侵攻しますが、スイスでは二十六日の第一報で早くもソウル陥落と報道されました。

事態の推移によっては帰国も難しくなると懸念され、この後日本代表は朝鮮情勢を気にかけながらの行程となります。

中曽根は「七、八分裾を刈って、二フラン（200円）」とられます。およそ日本の2倍でした。

この6月26日、中曽根はコーからふもとのモントルーに降りて、シオンの古城を訪れます。バイロンの詩で知られるシオン城は見る者の憂いを誘います。

ユングフラウ登山の基点インターラーケンから南南東をのぞむとスイス・アルプスの最高峰ユングフラウ（4158m）がそびえます。

スイス各地

コー、マウンテン・ハウスでの日程が終わると中曽根はスイス各地を訪れます。

六月二十七日、モントルーを出て電車でチューリッヒに向かいます。途中、ベルン・アルプス山麓のインターラーケンに向かい名峰ユングフラウを望見します。当時すでに三三〇〇m付近まで観光客を運びあげる登山電車があり、手軽に美しいユングフラウ三峰を眺めることができました。

スイス国鉄は安全、正確、小粒ながらも、伝統的にヨーロッパで高い評価を得ています。

ユングフラウの景観を見た中曽根はインターラーケンから鉄道でスイスの商工業の中心都市チューリッヒに向かいます。山がちの国土の水系を利用した水力発電が盛んで、電力豊富なスイスではすでに鉄道はほぼ電化され、蒸気機関車はごくまれでした。

チューリッヒは多くの銀行が集中したスイスの商業の中心都市。チューリッヒ湖に面しドイツ風の街並みが落ち着いたたたずまいをみせます。

六月二十九日、中曽根はチューリッヒ市内を散策し、市内のデパート（イエルモリ百貨店ではないかと思われます）を訪れ、スイス経済の実情観察に努めます。

市内で中曽根が第一に感じたことは、商品の値段の高いことでした。当時から欧州の中でもスイスは人件費が高く物価全体を押し上げています。

同時に商品の陳列の巧みなことにも感心します。バーンホーフ通りの時計商店や服飾店はパリ、ロンドンにもひけをとらない洗練された商品を陳列しています。

スイスの高級時計

「時計技術の発達は世界にその比を見ない」。中曽根はスイスの時計産業を高く評価します。チューリッヒ、ジュネーブといったスイスの主だった街には多くの時計店があり、ホテルのロビーでも有名ブランドの高級時計を販売しています。また当時としては抜群に行き届いたアフターサービスも実施し、外国人旅行者を驚かせました。

当時のスイスにはロレックス、オメガ、ロンジン、ユニバーサル、DOXAなど優秀な時計メーカーが存在し、年間、約3400万個（1951）の時計を生産します。（日本の生産は約230万個【1950】）

「冬が長く忍耐力にとむ」性格と、「眼が利いて器用」というスイス人の特長が時計産業の発展をもたらした、中曽根は現地でそう分析します。

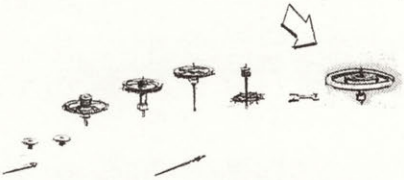
そもそもスイスの時計工業は長い冬場の家内工業として発達します。小さな納屋のような家内工場で製作された部品は、ふもとのメーカーに集められ完成品となります。家内の工場での微小な部品の製作は代々受け継がれた職人芸によって生み出されてきましたが、スイスはさらに公立の時計学校を設け、職人の養成にも力を注ぎます。

高級時計の付加価値の高さには絶大なものがあります。スイスは鉄鉱石も産出せず時計用のゼンマイは輸入したスウェーデン鋼から加工されました。

当時のスウェーデン鋼の価格は一ポンドあたり五ドルといいます。

それがスイスでゼンマイに加工されると、ゼンマイ一ポンドは五〇〇〇ドルになるといわれました。つまり原料が製品に加工されるとはるかに高い価値が加わるわけです。

高級時計の材料も量的には僅かなものです。



ヒゲゼンマイ――歯車を通じて、長針、短針、秒針を制御し時計をコントロールします。時計を構成する多くの微小品のなかでも繊細なヒゲゼンマイ、その調整には高度な加工技術を要します。

僅かな材料を輸入し高い技術によって高価な時計へと製品化して輸出する。完成品価格から原料費を差し引けば、時計の輸出がスイスに大きな外貨をもたらすことが理解できます。

スイスは工業原料や燃料も輸入し、農地も少ないため、食糧も国外に依存します。これらの輸入のためには当然、外貨が必要ですが、スイスは海外からの観光客がもたらす外貨と時計をはじめとする製品輸出による外貨でまかない豊かな国民生活を実現していました。

1.2 で得た外貨によって、燃料、原料、食糧を輸入します。

日本もスイスと同様に近代工業の原・燃料には乏しく、食糧も大量に輸入します。輸出によって外貨の獲得できる製造業をぜひとも必要とした当時の日本にとって、競争力のあるスイスの優れた時計産業は学ぶべき模範例でした。

週刊誌（1961年）の「けっこうイケマス『国産品』」のアンケートに答えて中曽根は「腕時計は『シチズン・アラーム』。目ざましがついていて旅行に至便。以前使っていたスイス製と甲乙なしというところ」と述べています。
（週刊朝日　昭和36年10月27日号）

まだ“舶来品”信仰の強かった1961年のアンケートで中曽根は腕時計―5、万年筆―3、カメラ―3、自動車―5、布地―4、ウイスキー―2と答えています。
（国産品を5点満点で採点）

チューリッヒ見物を終えると中曽根は鉄道で再びレマン湖畔のジュネーブに向かいます。

チューリッヒ中央駅

チューリッヒからジュネーブまで約227km
鉄道で約3時間半～4時間半

シチズン・アラームの発売は1958年、中曽根も少なくとも1958年まではスイス製腕時計を使っていたと推定されます。

国際都市ジュネーブ

午後五時半、中曽根はジュネーブに到着します。ドイツ風の落ち着いたチューリッヒに比べ、ほとんどフランスに接する位置にあるジュネーブはフランス風の華やかな街で、同時に各種の国際機関が所在する国際都市として知られます。

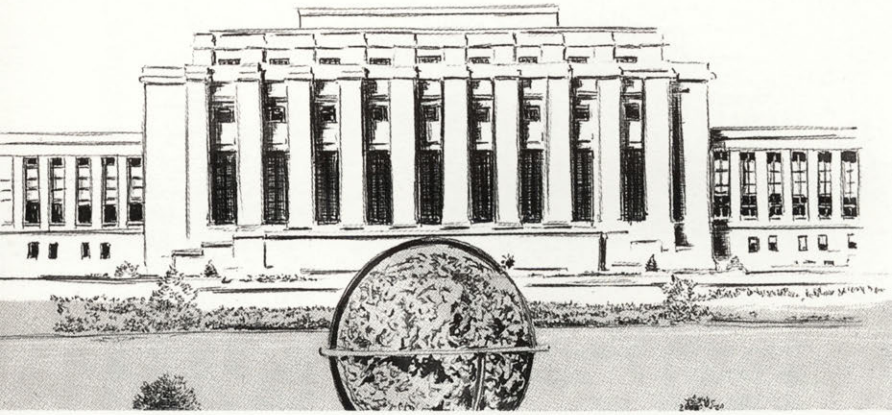
ジュネーブの大噴水
2基の大噴水は約160mの高さにまで水煙を吹き上げます。

ジュネーブカルナヴァン中央駅

中曽根は駅から国際赤十字本部に向かい、旧日本軍捕虜のシベリア抑留問題について話し合います。

シベリアには満州で敗戦を迎えた旧日本軍人・軍属が抑留され、その人数は最大時六〇万人にも達し、苛酷な労働を強いられていました。中曽根は捕虜の早期送還を定めたポツダム宣言にも違反するソ連の不法行為について訴え、抑留者の帰還への協力を申し入れます。

戦時の傷病者・捕虜の保護を目的とする赤十字は1864年、アンリ・デュナンの提唱によって設立され、ジュネーブに本部が置かれました。



中曽根は国際赤十字に続いて旧国際連盟本部に向かいます。

第一次大戦後成立した国際連盟に日本は常任理事国として参加しました。

その後、昭和六（一九三一）年、満州事変が勃発、翌年には日本の後ろ盾を受けた満州国が建国を宣言します。しかしジュネーブで開かれた連盟総会は満州国を否認します。これを不服とした日本全権・*松岡洋右は演説後議場を退場、日本は連盟を脱退します。松岡の劇的な退場は英米中心の国際政治に痛撃をくわえた壮挙として喝さいをあびましたが、この選択は日本を国際的孤立、戦争へと大きく傾斜させます。

その後国際連盟からドイツ、イタリアが脱退し世界は第二次大戦に突入します。大戦を防止できなかった連盟は国際連合発足の翌年、昭和二十一年に解散しています。

*松岡洋右（1880～1946）　外交官、国際連盟脱時首席全権。近衛内閣で外相となり、日独伊三国軍事同盟、日ソ中立条約を締結し対米英強硬外交を展開。1946年A級戦犯として裁判中に死去。

新設の国際連合本部はニューヨークに設けられ、旧連盟本部は国際連合欧州本部となりました。庁舎は見学者に開放され各国の観光客が訪れますが、〝昭和の激動〟の出発点となった旧連盟本部を日本人は誰しも深い感慨をもって見つめます。

国際連盟本部の前庭に据えられた天球儀。国際連盟の主唱者ウィルソン米大統領によって贈られたものでゆっくり回転します。

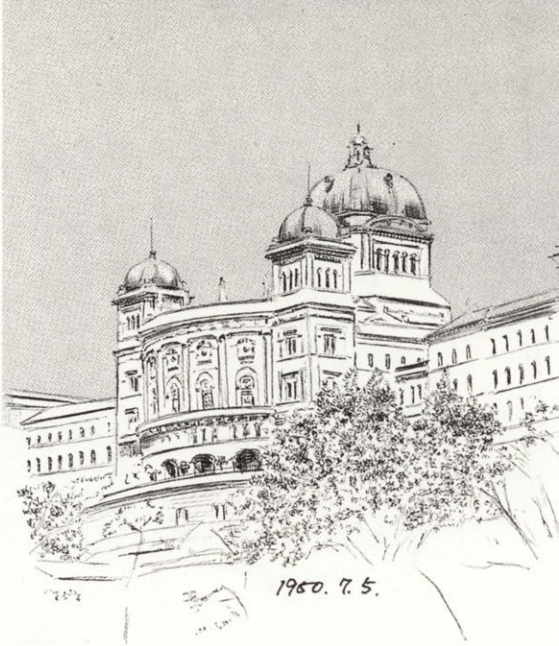
ウィルソン米大統領の提唱によって創設された国際連盟でしたが、米国は国際問題に巻き込まれることを懸念する議会の反対により参加できず、米国の不参加は連盟を弱体なものとします。

日本人一行は七月五日にマウンテン・ハウスを引き払って、ベルンに向かいます。

ベルンはスイスの首都で連邦議会の所在地ですが、人口は約十三万、チューリッヒやジュネーブよりも小さな都市です。

"ベルン"の名は"ベア(熊)"に由来します。市の紋章も熊。

モントルーからベルンまで約68km



ベルンに着いた一行は連邦議事堂を参観します。三つのドームが配された優美な議事堂は内部も丁寧な装飾がほどこされており、「**彫刻と絵が極めて美しい**」と中曽根を感心させます。

同日、中曽根はベルン西南にある山村・チニメルワルトを探訪します。

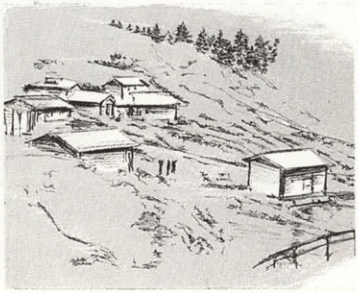
この村は第一次大戦中の大正四（一九一五）年、スイス亡命中のレーニンが各国の社会主義者といわゆる*チニメルワルト会議を開催した土地でした。

中曽根はレーニンらが集会所に用いたという粗末な小屋を見ていますが、〝ソ連邦の父〟もスイスとしては特に顕彰すべき人物ではなく、記念するような施設はなかったようです。

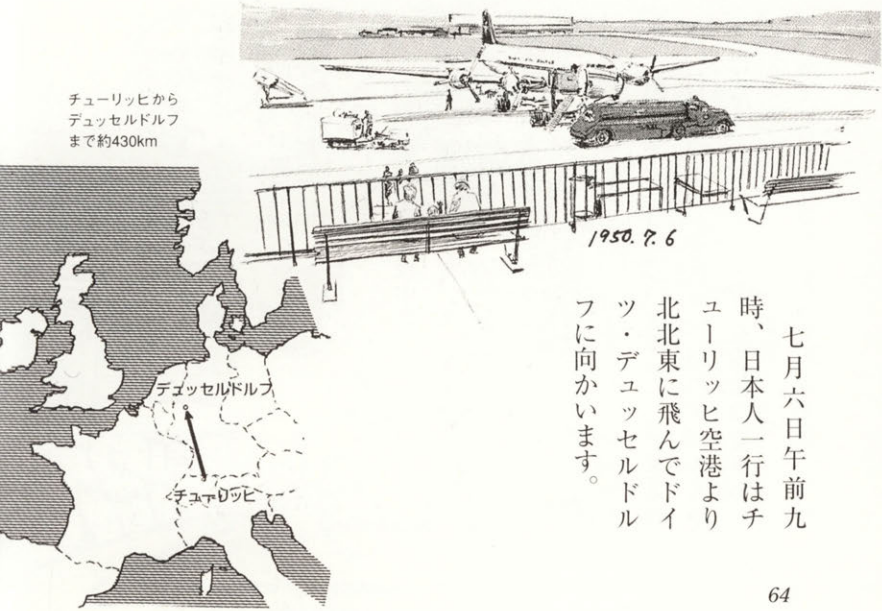
*チニメルワルト会議　第1次大戦下、各国の社会主義者が参加した会議。レーニンはこの会議で第3インターナショナル（コミンテルン）の創設を提唱しました。

さらに中曽根は同村の酪農家を訪れ本場のチーズを観察しています。

山地の多様な酪農家が送りだす各種の乳製品はスイス人の豊かな食生活を支えます。



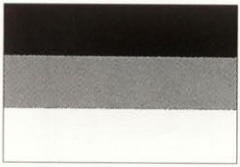
「二〇〇ポンドのチーズは大きさは自動車のタイヤ位」、値段は「五〇〇(スイス)フラン、一カ月の最低生活費」



七月六日午前九時、日本人一行はチューリッヒ空港より北北東に飛んでドイツ・デュッセルドルフに向かいます。

ドイツにて

7月6日〜7月13日



ドイツにて

七月六日、日本人一行はドイツ西部にあるデュッセルドルフに入ります。デュッセルドルフ一帯は英軍占領地域で中曽根は空港に翻るユニオン・ジャックを見やりつつ、敗戦ドイツに一歩をしるします。

石炭に恵まれ鉄鋼業が発達したライン河中流域には、デュッセルドルフ、エッセン、ドルトムントといった多数の工業都市があり、ルール工業地帯を形づくります。

大戦中、ルールは激しい爆撃を受けたため、中心都市デュッセルドルフも破壊の跡が色濃く残っていました。

ドイツは敗戦後、米・英・仏西側連合国とソ連によって分割占領され、首都ベルリンはソ連地区（東ベルリン）と米・英・仏地区（西ベルリン）に分割され、西ベルリンはソ連地区のなかに孤立しています。

昭和二十四（一九四九）年九月、米・英・仏地区を合わせてドイツ連邦共和国（西ドイツ）、同年十月、ソ連地区にドイツ民主共和国（東ドイツ）が成立し〝二つのドイツ〟時代が始まりました。

ドイツ東部が共産圏に去り西ドイツ領はおおまかにいうと太い〝く〟の字型にひしゃげて見えます。

〝く〟の字の真ん中にあたるライン河流域のノルトライン・ヴェストファーレン州が西ドイツの中心となり、西ドイツの重心はオランダ・ベルギー・フランス側に偏っています。

ローマと同様にデュッセルドルフ空港にも米軍の滑走路補強用の鉄板が敷き詰められているのを中曽根は目撃しています。

ドイツ民主共和国（東ドイツ）
人口約1830万人
面積　約11万km²
首都　東ベルリン
ノルト（北）
ラインヴェストファーレン州
ルール工業地帯
ハンブルグ
ブレーメン
西ベルリン
東ベルリン
ハノーバー
ドルトムント
デュッセルドルフ
ケルン
ボン
フランクフルト
ライン川
ミュンヘン
ドイツ連邦共和国（西ドイツ）
人口　約4730万人
面積　約25万km²
首都　ボン

デュセルドルフからボンまで約75km

デュッセルドルフ―ボン

中曽根、北村徳太郎、福田篤泰各代議士、林長野県知事ら約十名は代表団と別れ、デュッセルドルフからボンに向かいます。十名はハイヤーに分乗し、アウトバーンを時速一二〇キロで疾走します。

坦々と伸びる四車線道路は、ナチス政権が国家事業として整備したものでした。戦争によって被害を受け各所で補修作業が続けられていますが、大いにドイツの物流を支えています。

ボンに向かう途中、一行は廃墟にそびえるケルンの大聖堂を見ています。

アウトバーンの120km/hという速度は復活したばかりの国鉄特急「つばめ」(大阪ー東京平均69.6km/h)より速く、地上交通としては日本人にとってたいへんな高速でした。

午後四時、一行はボンに到着します。ボンはライン河畔にあり作曲家・ベートーベンの生誕地として知られる小さな文教都市です。

ボンは前年五月に開かれた憲法制定会議での決選投票で大都市・フランクフルトをわずかに制して首都に選定されました。ボンが選定されたのは将来ドイツの再統一が実現した際に首都がフランクフルトではベルリンへの復帰が難しくなると懸念したためといわれます。

臨時首都という意味合いで選ばれたボンでしたが、人口約十万の小都市に大国ドイツの政府機構を集中させることはいかにもてぜまで、平成三（一九九一）年のベルリン復帰まで西ドイツ政府関係者は不便を耐え忍ぶことになります。

コンラート・アデナウアー

ボンについた一行は官邸に向かいアデナウアー首相を訪問します。

アデナウアーは長くケルン市長を務めましたが、ナチス政権下では反体制的であるとして逮捕、秘密警察による暗殺まで計画されました。あやうく逃れたアデナウアーは僧院に潜伏し、終戦を迎えています。終戦直後創設されたCDU(キリスト教民主同盟)に参加し、すでに六十九歳で長老であったため総裁に就任、次いで西ドイツ初代首相となります。

アデナウアーはその後十四年間にわたって政権を担当します。外交では独仏の和解に努め西側の一員としてのドイツ再建を目指し、経済面では財政家・エアハルトを起用し〝ドイツの奇跡〟とよばれる経済成長をもたらしました。

コンラート・アデナウアー
(1876〜1967)
ケルン市長時代にナチスの鉤十字旗の掲揚を拒否し、アデナウアーを懐柔しようとしたヒトラーからの会見要請も拒否。大戦中反ナチス分子として逮捕投獄され、秘密警察による暗殺まで計画されましたが、これを逃れ僧院にかくまわれて終戦を迎えます。戦後の長期政権では飽き飽きされた反面、手堅い政治手法は信頼感を得て“der Alte”(ドイツ語定冠詞 der と英語の dear をかけて愛すべきご老体、ほどの意味)と呼ばれました。

ペーターズブルグにおけるアデナウアー

昭和二十四（一九四九）年九月、ドイツ連邦共和国（西ドイツ）が成立しアデナウアーは初代首相となります。しかし西ドイツ政府樹立によってドイツが独立を回復したわけではありません。占領軍による軍政は終結しましたが、占領体制は継続し、新たに管理機構として米・英・仏代表からなる高等弁務官府が設置されます。この高等弁務官が連合国の定める占領法規に基づき西ドイツ政府を監督します（西ドイツの独立回復はパリ条約発効の一九五五年）。

九月二十一日アデナウアーは数人の閣僚をともなってペーターズブルグ・ホテルにあった高等弁務官府に出向きます。新体制の発足にあたって弁務官側の訓辞を受けるためでした。

ペーターズブルグ・ホテルはライン河を挟んでボンの対岸の丘ケーニッヒ・ビンターにある高級ホテルで、ボンの連邦議会や首相官邸を見下ろす位置にあり、ドイツ占領軍司令官クレイ大将（米）の司令部が置かれ、軍政終了後、引き続き高等弁務官府となります。

アデナウアーが招じ入れられたホテルの広間には絨毯（じゅうたん）が敷かれ、三人の高等弁務官が立っています。弁務官が立つ絨毯は敗者と勝者を分かつ小道具でした。

「三高等弁務官が絨毯の上に立って私（アデナウアー）を閲見し、私は絨毯を踏んではならず」（「アデナウアー回顧録」より）新生西ドイツ首相は絨毯の前に立ちます。

しかし当番座長の仏代表フランソワ・ポンセが訓辞を与えるため、一歩を踏み出すとアデナウアーも「この機を逸することなく彼に歩みより、すぐ絨毯を」（前掲書より）踏みしめ、歩みを進めます。

ドイツ人の自尊心を示すため、敢えて歩みを進めたアデナウアーは、あたかも弁務官と対等であるかのように絨毯の上に立って訓辞を受けました。

アデナウアーと日本代表

日本代表とアデナウアーとの会見は中曽根をはじめ北村元蔵相、福田代議士、さらに林長野県知事によっても記録されています。総合して述べると、まず日本代表はアデナウアーと握手を交わし、吉田総理のメッセージを伝えています。

「それはあなたのお孫さんでしょう?」

北村が執務室の壁にかかっている少女の絵を指して問いかけます。

アデナウアーはうなずき、場はなごやかなものとなります。

アデナウアーはケルン市長時代に訪独した秩父宮について語ります。そしておだやかなかにも力強くドイツの再建・統一について語りました。

アデナウアーは中曽根が胸につけていた〝日の丸バッジ〟を見つめ、年齢をたずねます。

三十二歳という答えを聞いたアデナウアーは励ましの言葉を送ります。

「しっかりやってください。日本とドイツの再建は青年の力にかかります。お互いにやりましょう」

大正天皇の第2皇子、昭和天皇の弟宮・秩父宮(1902～53)は1936年、昭和天皇の御名代として英国皇帝ジョージ6世の戴冠式に参列、途中ドイツに立ち寄ります。

1950. 7. 6

会見は約三〇分、日本代表が辞去する際にアデナウアーは自ら、二階の執務室から玄関にまで代表たちを先導しました。

階段を降りるときにはアデナウアーと北村が先頭に並び、中曽根はかなり後方にいましたが、玄関口でアデナウアーはもう一度中曽根のもとに歩み寄り握手をしています。

中曽根はアデナウアーを知る人も少なくなった1985年5月、サミットでボンを訪れます。

エッセン・ギルセンキルヘン

アデナウアー訪問の翌日、中曽根はエッセン近郊、ギルセンキルヘンの炭鉱を視察します。

ボンからエッセン近郊まで約75km

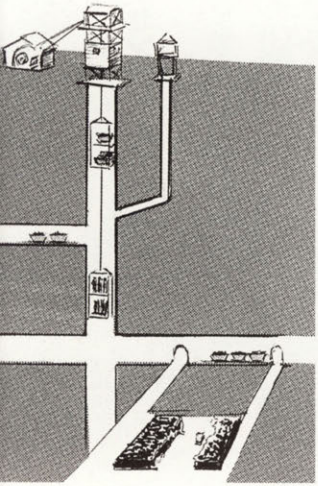
ルール工業地帯の中心にあるエッセンには多数の優良炭鉱があり、地下深くから採掘された石炭はドイツの産業の動力源となります。さらに石炭は乾溜されコークスとなり、鉄鋼業に投入されます。また寒冷なドイツでは暖房用の消費量も大きなものがあります。

前年のMRA大会に参加した片山元首相もエッセンを訪れ、「切羽」（坑道の奥にある石炭の切り出し現場）にもぐっています。

「真っ暗な石炭層の坂を若い総支配人と共に、三十分余にわたってすべるように下った」「まさに義経のひよどり越えである。途中で息が切れ動悸が高くなり、腰が痛みだし」「休息して息をしようと思えば霧のような石炭の粉が肺の中へ入ってくる。これはどえらいところへ来たと思ったが、もうおっつかない。」（片山哲「回顧と展望」より）

中曽根も地下深くの切羽に降りていきます。

ドイツは竪坑方式が一般的で、地下深く500～700mまでエレベーターで一気にもぐります。



苛酷な環境の採炭現場で中曽根は「坑夫と共に採炭作業をやって」「思い出にドリルで石炭を切って持って帰」ります。

坑内で従業員たちは安全を願って言葉をかわします。

当時の西ドイツには約51万人の炭鉱労働者、約33万人の坑内員がおり、同時期日本の約38万人の炭鉱労働者、約19万人の坑内員を大きく上回ります。（数値は吉田龍夫「石炭企業の分析」より）

地上に上がると、エッセン一帯の破壊も甚大でした。ドイツ最大の鉄鋼メーカー・クルップの製鋼所も空爆で破壊され、残存した設備も優秀なものは賠償として東欧諸国に移送されました。

製鉄原料の石炭にも大きな制約が課せられています。当時のドイツは年産約一億トンの石炭を産出します。その約四分の一は安値での輸出が義務づけられ（賠償的性格が強い）、さらに駐留する連合軍消費分として相当量が優先配分されます。

このためドイツは豊富な石炭資源を持ちながら高価な外国炭を輸入せざるをえませんでした。

鉄道や暖房用石炭は国民生活の維持のためどうしても一定量が必要で、いきおい鉄鋼生産にまわせる石炭の量は削減され、戦前、高品位の鉄鋼を誇ったドイツでも鋼材が不足しています。

当時の日本の石炭産出量は約3933万t（1950年）

エッセンからハンブルク

七月八日から一行はアウトバーンを利用してドイツ北部のハンブルク、次いでブレーメンを訪問します。

ハンブルクはドイツ第一の港湾都市で、日本人にとっては、戦前、日本郵船の欧州航路の最終寄港地、欧州の玄関口として親しまれました。

ボンからハンブルクまで約370km
ハンブルクからブレーメンまで約80km

ハンブルクは昭和十八（一九四三）年七月、連合軍の絨毯爆撃を受け、約六万人が犠牲となり、市街も約八割が焼失しました。市内には瓦礫（がれき）の山がうずたかく、その片付けには三〇年以上かかるという悲観的な観測もありました。

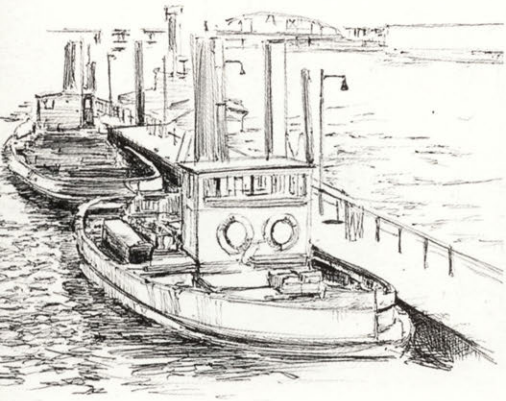
爆撃の被害をまぬがれたハンブルク市庁舎とアルスター湖

中曽根は二日間にわたって破壊されたハンブルクの市街と港湾部を歩きます。「**煉瓦造りのため取片づけも出来ず**」「**壁が風で崩れて通行が危ない**」。破壊のあとも甚だしい市街を歩いた中曽根は、自分が警視庁時代に見た「**昭和二十一年春ごろの東京の姿**」と感想を記します。

「壁が崩れて交通が危ない。子供が瓦礫の下でカクレンボーしているのが痛々しい」

市街地を抜けて、エルベ河に沿って岸壁を歩むと焼け落ちたままのクレーンや倉庫、ドックの残骸が見受けられ、戦時中Uボートが収容されたブンカー(格納庫)も爆破されて残骸をさらしています。

戦前、ニューヨークに次ぐ大商港といわれたハンブルクにかつての面影はありません。



ハンブルクの日独旗

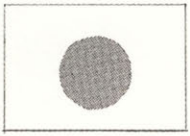
戦前、欧州海運の基点だったハンブルクには日本から多くの〝*マル・シップ〟が寄港し、日本商品が陸揚げされ、留学生や商社員が立ち寄りました。そのため日本とかかわりがあったドイツ人が多く、日本をしのんで一行を歓迎しています。

中曽根の滞在中、市長招待の歓迎会があり、さらに旧在日ドイツ人が一行を招いて朝食会を催します。会場には日の丸とドイツ国旗が壁にはられていました。当時は連合軍によって日独両国旗の掲揚が禁止されていました。

そしてドイツ人達は昔に変わらず、「日本のミカド」(天皇)のためにと乾杯の音頭をとります。

中曽根はドイツ人の気概に感激しました。

*日本の民間船舶のこと



ハンブルクで中曽根はドイツ東亜協会の招待をうけ挨拶しています。
「シベリヤの**独人捕虜は敗れてもドイツ軍人の品位を傷つけなかったと日本**(**帰還**)**捕虜から伝えてくれと伝言があったから謹んで伝える**」と挨拶を締めくくると聴衆は総立ちとなって握手を求めます。

「ハンブルクの町には十五階建て二五〇家族を収容するアパートが三つ完成していた」。中曽根はハンブルクでこう書きとめています。中曽根が見たのはハンブルク・グリテンベルクの高層アパートと思われます。この現代的なアパートはドイツが必要なものには重点的に投資する雄弁な実例です。

復興の槌音

ドイツの都市の惨状は戦災被害が甚だしかったためですが、ドイツ政府の方針にも原因があります。ドイツでは限られた資材を交通機関や工場、労働者用住宅など生産回復に関連する部門に重点的に配分しました。不要不急の建築はあとまわしとされ官庁なども仮住まいのままです。破壊された街区も取り壊しの費用や労力を節約するため倒壊の恐れのない場合放置されました。

中曽根が破壊された都市のあいだをアウトバーンを利用しスムーズに移動していることにもドイツの哲学が反映されています。

〝ドイツの復興は工場から、日本の復興は盛り場から〟。雄然とした日本の復興を戒め、整然たるドイツを範とすべきという主張は当時ひんぱんにいわれました。

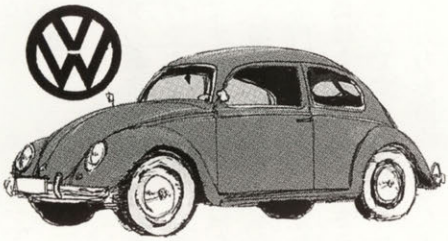
一行がハンブルクの次に訪れたブレーメンの港では巨大なクレーンが忙しく稼働し、さまざまな物資が陸揚げされていきます。

マーシャル・プラン
米国マーシャル国務長官が打ち出した欧州再建のための大規模な援助計画。約133億ドルの借款、物資が提供され西ヨーロッパ再建の基礎をつくります。

陸揚げされていく品々は米国のマーシャル・プランによる供与品で、この大規模援助によってドイツの産業は必要とする物資の供給を受け、生産回復のきっかけをつかみます。本来、競争力のあったドイツ製品は欧州市場の正常化にともなって輸出量が急増しドイツ経済を牽引します。

日本人一行の訪独時には廃虚のように見えたエッセンのクルップ工場でも機関車の生産が始まっており、ハンブルクでは造船が再開されます。さらに補修の進むアウトバーンには世界のベストセラーカーとなるフォルクスワーゲン・ビートルが走りはじめています。〝廃虚のなか再建の槌音が響く〟、中曽根の訪れたドイツはそのような時間帯にありました。

1948年生産開始、2003年までメキシコで生産。



「戦時中の製作という国民車、一名ヒトラー車と当時呼ばれていた小型自動車が盛んに走っている」「エンヂンが後方にあり、それが小型であるのが特色だ。製作費も安いし、ガソリンも余りいらぬという話だ」(前年ドイツを訪問した片山元総理の感想「民主政治の回顧と展望」より)

鉄のカーテン

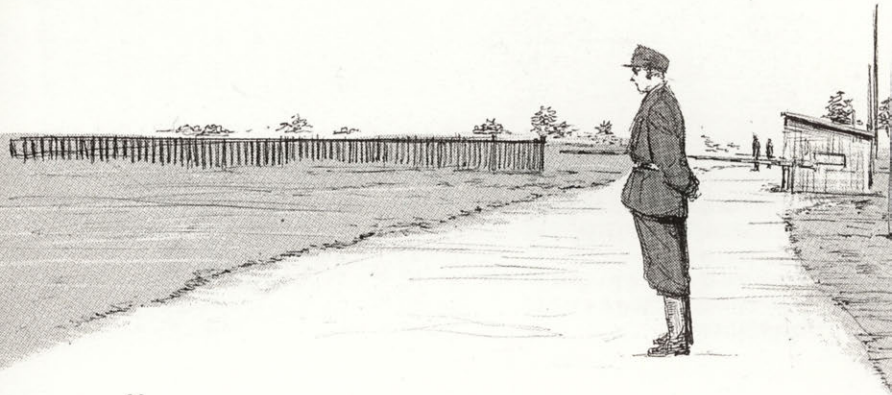
七月九日、日本人一行はハンブルク市のダービー（競馬）見物に出かけますが、中曽根は一行と別れ、ピーター青年（現地の青年）をともない東西ドイツの国境線を見に行きます。

ハンブルクから東に向かいリューベックを過ぎて自動車で十分間も進むと、東西ドイツの境界にさしかかります。

草原にときおり木立の見える国境地帯には境界にそって木柵が続き、検問所がもうけられ、両ドイツの警官隊が対峙していました。

中曽根はいあわせた西ドイツの警官隊としばらく言葉を交わし、周囲を歩きます。

東側の家屋には大きな赤旗が翻り、さらに木陰にはソ連兵の姿が確認できます。中曽根はその姿をカメラで撮影しています。



戦後、米国はすみやかな動員解除を行い兵力を縮小しています。対照的にソ連は強力な地上軍を維持したまま占領地の支配を強化します。

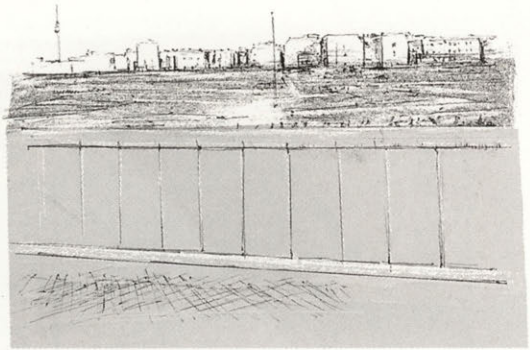
西側との「共存」か「対決」か、ソ連の戦略は謎に包まれていましたが――すでにソ連指導部は対決を決意しており、自軍の数的優位が確認されれば、躊躇なく西側に侵攻するであろう――という観測も有力でした。

朝鮮戦争の勃発によって観測が裏付けられたかたちとなり、西欧諸国の共同防衛体制の整備が急がれることになります。

中曽根がたどる東西ドイツの国境線はすでに連合国間の便宜的区分線ではなく、厳しい東西冷戦の最前線へと変化していました。

静かな草原の国境地帯をたどり、ソ連軍兵士の姿を見て中曽根は冷戦の兆候を感じ、日本の運命を考えました。

中曽根が帰国後、精力的に日本の防衛や自衛隊の創設を考えたのはこの時の衝撃が大きく影響していました。



その後も東西冷戦は厳しさを増し、相互に国境地帯の警戒は厳重となります。1961年には東ドイツによってベルリンに壁が構築され、89年の“ベルリンの壁崩壊”にいたるまで冷戦の象徴となります。

再びボンにて

ブレーメンを発った中曽根はハノーバーを経由してケルンに立ち寄って、再びボンを訪れます。

マックロイ高等弁務官の招待を受けて〝森の中の白亜館〟を訪ねます。

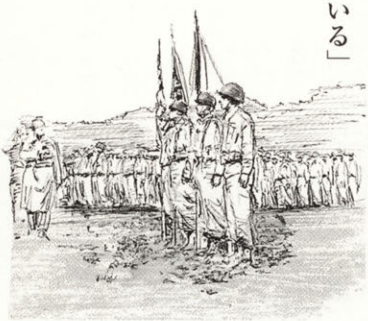
マックロイはアデナウアーが一歩を踏み出したとき、絨毯の反対側に立っていた一人です。（〝森の中の白亜館〟はベーターズブルグ・ホテルのことかもしれません）

ジョン・マックロイ
米国の実業家、政治家。大戦中陸軍次官（米国は民間人が就任）を務め、在任中、京都を爆撃目標から除外させます。戦後、高等弁務官としてドイツに赴任。マックロイは後年“アデナウアーから敗北の中で威厳を守ることを教えられた”と述べています。

マックロイはドイツにおいてアメリカを代表する最高責任者で「**西ドイツのマックアーサー元帥**」の位置にありますが、尊大なマッカーサーとは異なり、気さくな人柄でした。

大戦中、陸軍次官を務めたマックロイは当時の思い出を語り、中曽根を激励します。

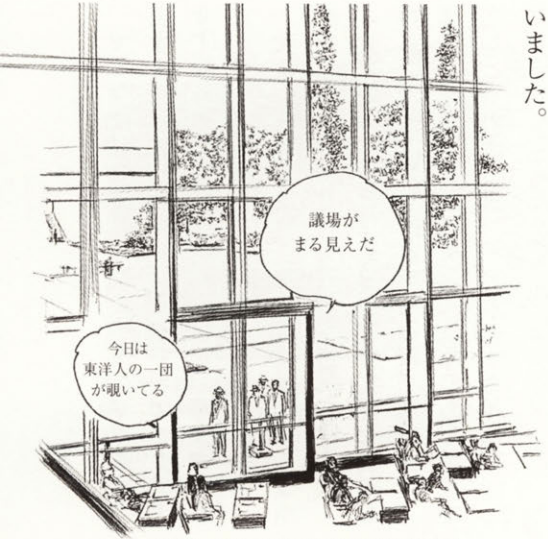
「大戦の時、自分は陸軍次官で猛烈な反対を押し切って二世部隊をつくった。この四二二部隊こそ米国で最も功労ある勲のある部隊である。その血の通っている日本青年に期待している」



日系422部隊は大きな犠牲を払いながらイタリア戦線で活躍します。1951年、“GO FOR BROKE！”（倒れるまでやれ！）として映画化され、米国社会で広く知られるようになります。

マックロイとの会見を終えた中曽根はブンデスハウス（連邦議事堂）を見学します。

ラインの河べりにある連邦議会は師範学校を転用したもので参観者は一様にその簡素なことに驚きます。簡素な議事堂は西ドイツがボンを仮の首都と考えていることを象徴していました。



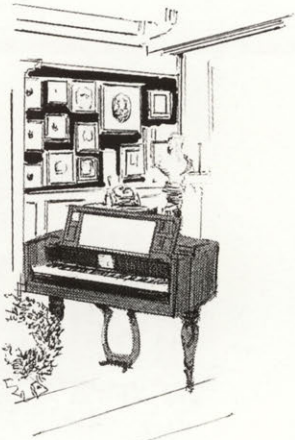
連邦議事堂のテラスから議事堂内部が覗けます。

ボン―フランクフルト

ドイツ滞在最終日の七月十三日、中曽根はボンのベートーベンの生家を訪ねます。ベートーベン・ハウスと呼ばれる楽聖の生家は細い街路に面して建ち、周囲の家並みと変わるところのない小さな家です。

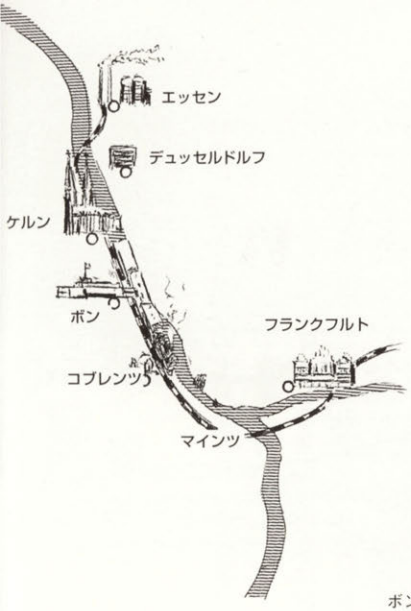
大戦中ボンも爆撃を受けますが、ベートーベン・ハウスは「管理人ヘッセルバッハ氏が屋根に落ちた3発の焼夷弾を消しとめ現在も昔のままの姿で残っている」（アサヒグラフ　1951/8/8）

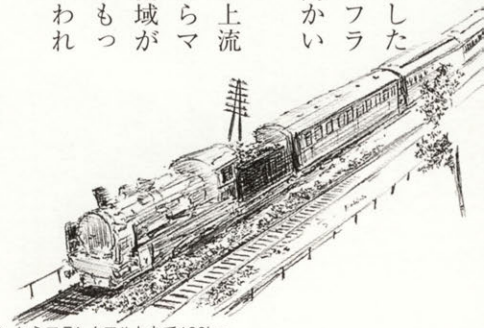
あやうく戦火をまぬがれたハウスにはベートーベンが「書きなぐった楽譜やピアノ」が展示されています。



ボンをあとにした中曽根は汽車でフランクフルトに向かいます。

ボンよりやや上流のコブレンツからマインツまでの流域がラインの風物がもっとも美しいといわれます。





ボンからフランクフルトまで189km
鉄道で約2時間半〜3時間

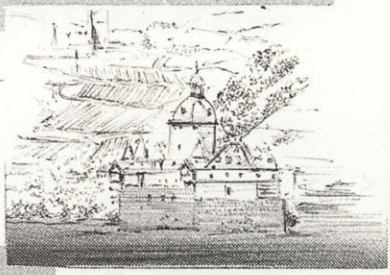
ラインの中下流は物流の大動脈でボンのあたりでもまだ河幅が広く、多くの運搬船やハシケが行き交います。

コブレンツを過ぎると河幅は狭まり、汽車は谷間を進むような風情となります。やがてハイネの詩でも知られる〝ローレライの巌〟が姿を現します。

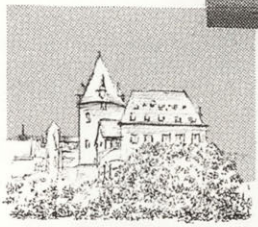
1985年5月、ボン・サミット出席のため西ドイツを公式訪問した中曽根首相はコール首相とともにライン河を下り、ともに船上より巌を見て、「ローレライ」を歌います。

「普通の巌で驚く程のものではない」中曽根は正直な感想を書き留めています。

しかしローレライのあとに現れる中世そのままの城砦、両岸の山肌に広がるブドウ畑は昔と変わらぬ古きラインの風情をたたえます。



ラインの中州に立つ
プファルツ城



バッハラッハの丘の上
シュターレック城

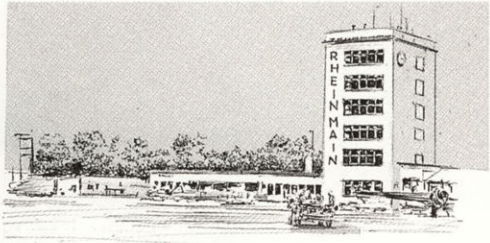
マインツのあたりでラインは二手に分かれ汽車は支流マイン河沿いを進み、ほどなくフランクフルトに至ります。

断崖にそびえる
ラインシュタイン城

フランクフルト市内に入ると、再び戦争の傷跡が色濃くなります。市の中心部はフランクフルト中央駅を残し破壊され、文豪ゲーテの生家も粉々に破壊されました。

フランクフルト周辺には米軍の大部隊が駐屯するため多くのGIが行き交い、いかにも敗戦国の風情が漂います。

かろうじて焼け残った中央駅のドームもガラスが焼け落ち黒ずんでいます。駅前にPX（米軍購買部）がありGIが行き交います。



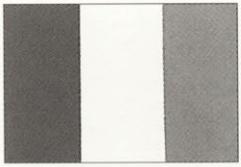
中曽根は郊外のフランクフルト・アム・ライン空港に向かいます。ドイツでも民間航空は禁止され、空港には米軍機が駐機し、海外の航空会社が乗り入れます。

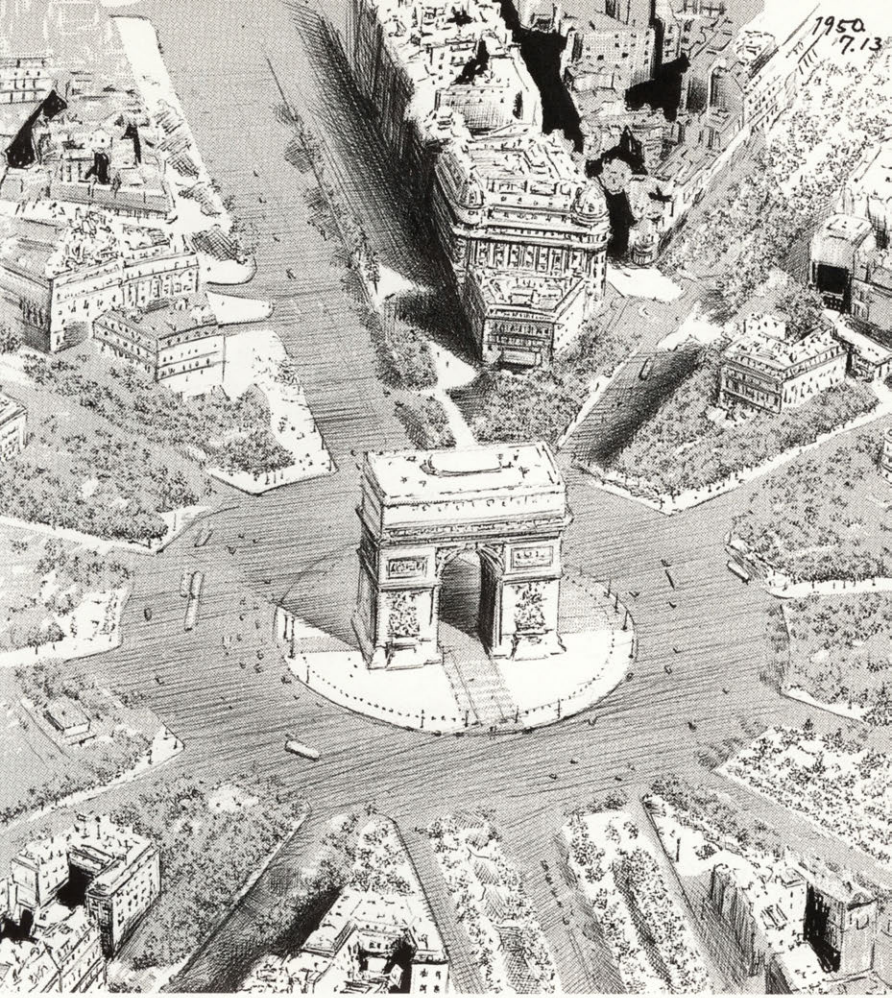
中曽根は日本代表と合流しフランス・パリに向かいます。

フランクフルトからパリまで約450km

フランスにて

7月13日〜7月16日





フランス

七月十三日、一行はオルリー空港に到着しパリ市内に入ります。

フランスは第二次大戦初期の昭和十五（一九四〇）年、ドイツに降伏し約四年間ドイツによる占領を受けました。昭和十九年の解放まで破壊をまぬがれ、戦後、かつての〝花の都〟の趣を取り戻しつつあります。

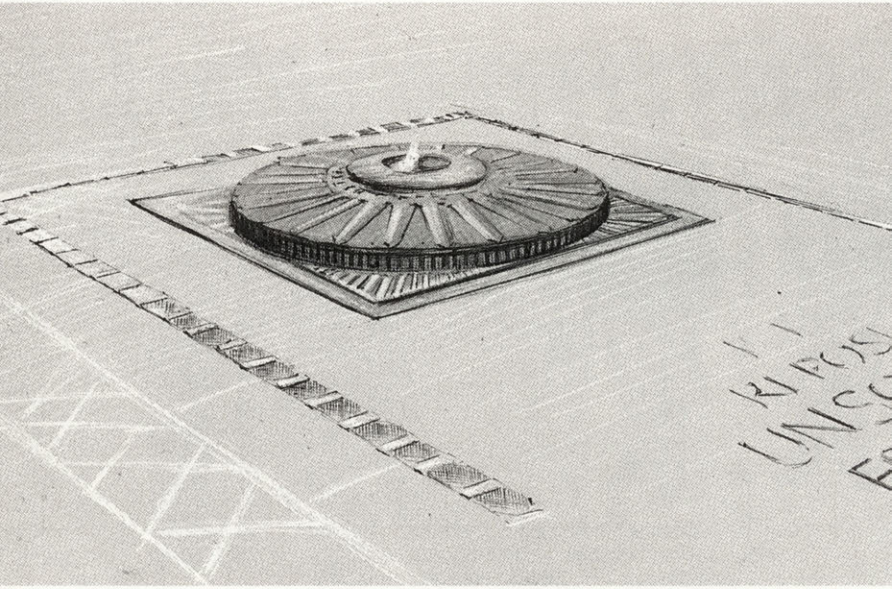
凱旋門を基点に12本の道が放射状に伸びていきます。この形状から凱旋門の一帯はエトワール（星）広場と呼ばれました。1970年、死去したシャルル・ド・ゴール元大統領を記念してド・ゴール広場と改称されました。

巴里祭

一行が到着した十三日の市内は〝巴里祭〟を翌日に控え、祝祭を前にすでににぎわいをみせています。

「巴里祭」という表現は日本特有の呼び方でフランスでは単に「七月十四日」〝カトール・ルイジェ〟と呼ばれます。祝祭はフランス全土で行なわれ、翌日からバカンス・シーズンが始まるため、フランス国民はいっそう浮き立ってこの日を迎えます。

パリ祭は一七八九年七月十四日、フランス革命の発端となった民衆による〝バスチーユ監獄襲撃〟を記念したもので、共和国守護に斃(たお)れた人々を顕彰し、追慕する意味もあります。この年のパリ祭もオリオール大統領による無名戦士の墓への献花をもって厳粛に始まりました。



エトワール広場(現ド・ゴール広場)の中央に建つ凱旋門。皇帝ナポレオンの命により、フランス軍の栄光をたたえるため建設がはじまり、ナポレオン没後の1836年に完成します。さらに1919年、そのふもとに第1次大戦の無名戦士の遺体1体が埋葬され「無名戦士の墓」が設けられます。午後6時半に「追悼の炎」が灯されます。

パリの日本人（一）

十四日の朝には凱旋門からコンコルド広場に続くシャンゼリゼ通りの両側は華やかな共和国軍のパレードを見物する人々で埋まります。

日本人一行はフランス側の好意により、オリオール大統領の特別席に招き入れられ、華やかなパレードを見物します。

「オリオール大統領の特別席」とは大人数が入れる大統領関係者の桟敷席に入れてもらって参観したという意味と思われます。ド・ゴールの第5共和制成立によって、大統領権力が強化されるまでは、大統領職は名誉職的色彩が強く、国家の最高権力者ではありませんでした。1985年7月14日、中曽根首相は国賓としてミッテラン大統領とともにコンコルド広場で行進を観閲します。

シャンゼリゼ通りを礼装の騎兵、ターバンやマントをまとった色彩豊かな植民地部隊などの行進が続き、やがて重装備の機械化部隊が現れます。

しかし、中曽根は目の前を進んでいく機械化部隊の戦車や牽引される重砲が米国製の供与品であることに気づきます。

中曽根は米国のお古で装備する〝大陸軍〟を見て「**地球をとりまく大きな流れに感傷を催**」します。

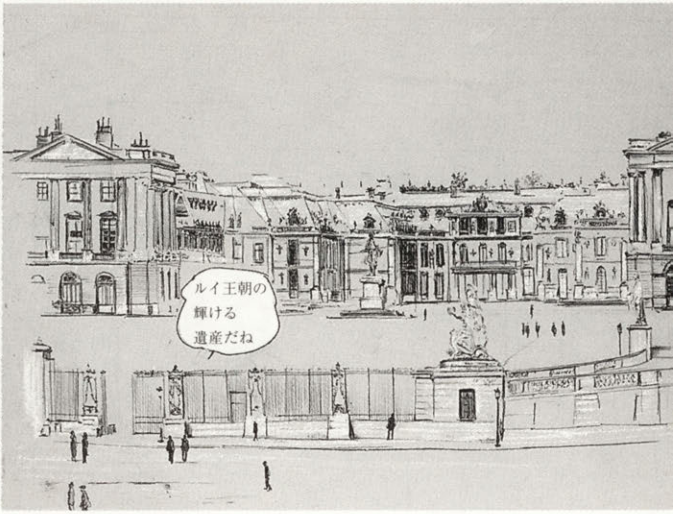
仏軍が装備した米国製M4シャーマン。自衛隊など自由世界の各国で使用された“自由世界の軍馬”。かつては米国がフランス製のルノー戦車を使用していました。

昼をすぎるとパリ市内の各所でダンスパーティーが催され、楽団が練り歩き、市民は歌い踊り、厳粛に始まった一日は祝祭らしい陽気な喧騒につつまれていきます。

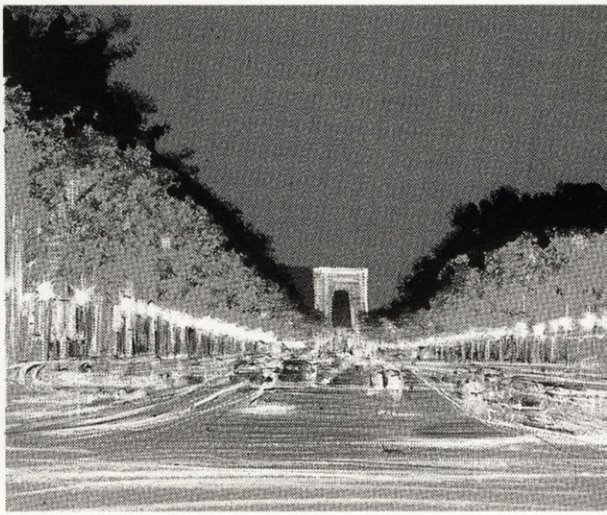
この日の中曽根は忙しく、パレード見学後、午後から開かれた一行の歓迎会に出席し、スピーチを担当します。会を終えるとパリ郊外にあるベルサイユ宮殿に向かいます。

1950. 7. 14

ベルサイユに着いたのは午後八時すぎ、日本の感覚では遅い時間でしたが、高緯度のため陽が残り、黄昏のベルサイユ散策となりました。



午後十時半になって、ようやく陽は沈み、人口六六五万人の大パリ市は「**イルミネーションで飾られ、街々では路上でパリー人は躍りに徹夜し**」ます。



当時、大パリ市の人口は665万人（世界第3位）（1950年、東京の人口は626万人で世界第4位）。パリには1948年に約200万人、49年には約300万人の外国人観光客が訪れています。

パリの日本人（二）

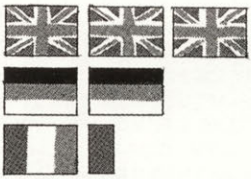
パリ祭の翌日十五日、中曽根は調髪に行きます。散髪のみ「マニキュアを断り、香料、香油を断り、マッサージを断ったが、チップをいれて五〇〇円とられた」。スイスでも調髪料の高さに驚きましたが、パリではさらなる高値に閉口します。

スイスでの散髪で2フランを支払った中曽根でしたが、パリでは5フラン（約500円、日本の散髪料の約5倍）を支払いました。

髪型をととのえた中曽根は日本代表とともに現地記者との会見に応じます。会見では朝鮮戦争、日本の経済状況、人口問題が話題となり、福田篤泰代議士が深刻な日本の人口問題について理解を求める発言をしています。

戦前より*「猫額の地に群居する」日本でしたが、戦後ベビーブームを迎え、急激な人口増加は深刻な問題でした。（この敗戦直後に誕生した世代がいわゆる「団塊の世代」）

対照的にフランスは出生率の低下に悩み、政府は出産時に母親に一時金を給付しています。中曽根はお国ぶりの違いに「**日本と較べ感無量である**」と書き留めます。



1830～1930年にかけて英国の人口は3倍、ドイツは2倍に増加したのに対し、フランスはわずか1.3倍で、出生率の低さは古くからフランスの悩みでした。

*外務省情報部監修「これからの日本」（日本週報社 1951）にある記述。

ロベール・シューマン

フランス滞在中、日本人一行はフランス外務省に外相ロベール・シューマンを訪ねます。

戦前から政変が多かったフランスでしたが、戦後も政局が安定せず、解放後暫定的に成立したド・ゴール政権から数えてこのときまでに十三回、政府首班が交代しています。

シューマンはパリ祭の前日、曲折のすえ成立したプレヴァン政権の外相に就任したばかりでした。

日本人一行を迎えてシューマンは五月に自身が発表し話題となった「欧州石炭鉄鋼共同体」案について述べ、さらにこれを踏み台とする「欧州統合」について語ります。この「欧州石炭鉄鋼共同体」（以後ECSCと表記）がEC（ヨーロッパ共同体）さらに現在のEUへと発展します。

ロベール・シューマン（1886〜1963）
ルクセンブルクに生まれ、ドイツに学び、第1次大戦ではドイツ軍の要塞守備隊で書記となります。戦後フランスに復帰したロレーヌより選出され代議士に。フランスがドイツに敗北した1940年の9月、危険人物としてゲシュタポによって逮捕されますが脱走、終戦まで逃走します。戦後、MRP（人民共和派）党首となり外交を中心に活躍。日本の独立を取り決めたサンフランシスコ講和会議ではフランス全権を務めています。

シューマンはロレーヌ出身の政治家でした。アルザスとあわせて、アルザス・ロレーヌと呼ばれるこの地方は独仏をつなぐ交通上の要衝であり、さらに地下には良質な石炭が埋蔵されその帰属をめぐって独仏が激しく争いました。

アルフォンス・ドーテの「最後の授業」は普仏戦争に敗れ、ドイツに割譲されたアルザス地方を舞台とした物語。

アルザス・ロレーヌは普仏戦争によってドイツに割譲され、第一次大戦後フランスに復帰、第二次大戦中ドイツ軍によって占領、連合軍によって再び解放されました。

めまぐるしい争奪は同地の人々を翻弄（ほんろう）しますが、シューマンも例外ではありませんでした。第一次大戦ではドイツ軍人として出征、第二次大戦中には敵性人物としてドイツに連行されます。仏独の狭間で深刻な体験をしたシューマンは両国の対立解消の重要性を深く感じ、仏独の融和、それに続くヨーロッパの統合こそ恒久平和への道と確信します。

ヨーロッパ統合論は第一次大戦以後盛んに唱えられるようになりましたが、国家主権を超えた政治統合（例えば欧州が単一の議会を持つというような）はあまりにも障害が多く空想の段階にとどまっていました。

シューマンは政治的統合より、まず経済的側面からの統合強化を優先し、昭和二十五（一九五〇）年五月、ＥＣＳＣ構想を発表します。この構想では今日よりはるかに重要度の高かった石炭・鉄鋼を欧州各国で共同管理することが提案されています。

ECSCの参加国は石炭・鉄鋼を無関税として単一市場を形成します。

参加国の産業は国内取引と変わりなく参加国の域内から安価で良質な石炭・鉄鋼が入手可能となり、ヨーロッパ経済の活性化・発展が期待されます。同時に石炭・鉄鋼を軸に各国の依存が深まり実質的なヨーロッパ統合に近づくことも期待されます。

しかし、優勝劣敗の単一市場では各国の石炭・鉄鋼産業のうちから衰退を余儀なくされるものもあらわれます。実際、ルール工業地帯をかかえるドイツの再建が進むと石炭・鉄鋼ともにヨーロッパ最強になると予想されていました。

一方イタリアは石炭資源に恵まれず、鉄鋼業も弱体であり、また元来農業国であるフランスの石炭・鉄鋼業もイタリアよりは大規模なものの、再建が進んだ将来のドイツには対抗できそうにはありませんでした。

強力なドイツと他の参加国の石炭・鉄鋼業のバランスある発展をはかるため、各国から選出され、各国政府を超える権限を持つ委員会が共同管理機構を通じ調整するとされました。

「われわれの経済の重要部分を放棄して、無国籍の勝手気ままな専門家の専制にまかせるものだ」(ド・ゴール派のスポークスマン・ジャック・スーステルの声明)。当時、野にあったド・ゴール派はシューマン・プランを強く批判します。

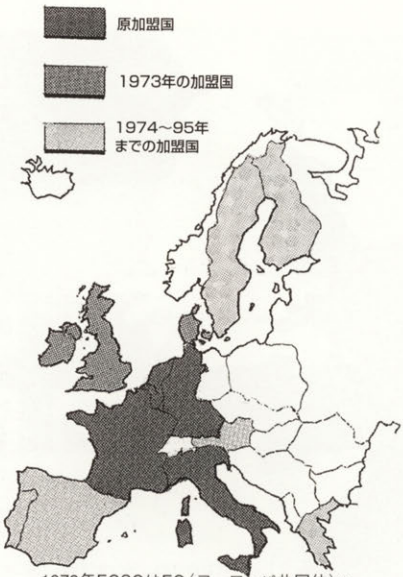
言い換えると、参加国は石炭・鉄鋼に関して誕生する超国家的新機関に一任し、手出しができなくなります。

この急進的な提案にフランスを含め、各国には参加を躊躇する声も起こります。しかしシューマンは粘り強く交渉し、昭和二十七（一九五二）年、六カ国の参加をもってECSCを発足させ、この共同体が源となってEC、さらに現在のEUに成長します。

1952年、フランス・西ドイツ・イタリア・オランダ・ベルギー・ルクセンブルクの6カ国をもってECSC（欧州石炭鉄鋼共同体）は発足します。

政情不安でめまぐるしく政権が入れ替わるフランス—その一方でシューマンという老練な政治家が数世代にわたって継続される大きなプランを準備していく、このあたりに独特の奥深さがあります。

今日シューマンは〝ヨーロッパ統合の父〟と称されます。



1973年ECSCはEC（ヨーロッパ共同体）へと発展し、アイルランド・デンマークとともに長年の懸案であった英国加盟が実現し、西ヨーロッパ全体を包含する統合体となり、95年までに15カ国が加盟しています。

パリの憂鬱

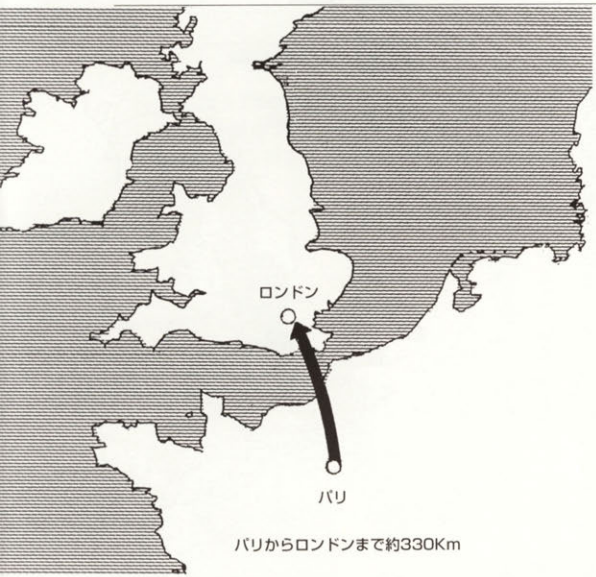
戦前、日本の各地で生産される生糸は世界的に評価が高く、ヨーロッパにも多く輸出されていました。中曽根の郷里・群馬県は長野県に次ぐ全国第二位の養蚕県で製糸産業の盛んな地域であり、群馬からみるとフランスは生糸の重要な輸出先でした。

桑の葉を食べた
オカイコが

マユ玉をつくりマユ玉から
糸をたぐりとります。

しかし中曽根のみるところモードの国フランスも戦後は経済力が弱体化し、戦前に比べ高級な生糸への需要は減少しています。日本の養蚕業が再建されても戦前のような需要は望めそうにはなく、群馬県人・中曽根としては憂慮を感じるところでした。

七月十六日、日本人一行は空路、ドーバー海峡を渡りイギリスに向かいます。



パリからロンドンまで約330Km

中曽根の父中曽根松五郎（二代）は“古久松”という材木問屋を営んでいますが、祖父松五郎（初代）の代には生糸も扱っていたといいます。（「サンデー毎日」昭和51年5月9日号より）

イギリスにて

7月16日〜7月22日

イギリスにて

パリよりロンドンまでは空路で約一時間半、「**埼玉県と群馬県**」ほどのもので国境を越える仰々しさはありません。

ロンドン市街に入った中曽根は「**ロンドンの爆撃の被害は大したことはない**」「**我々が日本で聞かされたのは軍部の宣伝が多い**」と感じます。

昭和十五（一九四〇）年八月、ドイツ空軍は南イングランド一帯に対し攻撃を開始し、ロンドンも激しい空襲にさらされます。しかしドイツ空軍を迎え撃った王立空軍は数こそ劣勢ながら果敢に反撃し熾烈な〝バトル・オブ・ブリテン〟が繰り広げられます。

ロンドン爆撃の模様は開戦直前の日本にも詳しく報道されました。同盟国ドイツ側に偏

中曽根が訪れた1950年の英国はジョージ6世が健在で、現女王エリザベス2世即位の2年前にあたります。したがって英国民がしゃべるのはキングス・イングリッシュです。

よった報道では、ロンドンは壊滅し、いかにも英国の崩壊が間近いという印象を与えました。すでにフランスは降伏し、米国はいまだ参戦しておらず、圧倒的なドイツの前に英国は孤立無援でした。それでも英国民は粘り強く、王室も政府もロンドンに踏みとどまり空襲を耐え抜きます。翌年五月、増加する被害にドイツ空軍はついにロンドン爆撃を中止します。英国攻略を困難と判断したヒトラーは突如方針を転換しソ連に侵攻を開始します。

1940年ドイツの勢力圏と同盟国

ドイツはヨーロッパをほぼ制覇し、英国の敗北は時間の問題と思われました。

日本人一行が訪れた当時もまだウエストミンスター宮殿の下院議場が修理中で、セント・ポール寺院の周囲には廃虚と爆弾孔が残っています。それでも日本やドイツの諸都市に行われた徹底的な爆撃と比べれば、その被害は軽微なものでした。

1940年12月29日、セント・ポール寺院周辺は猛爆撃を受け黒煙につつまれましたが、奇跡的に寺院はほぼ無傷で翌朝を迎え、その姿を見たロンドン市民に深い感銘を与えました。

一九五〇年・イギリス

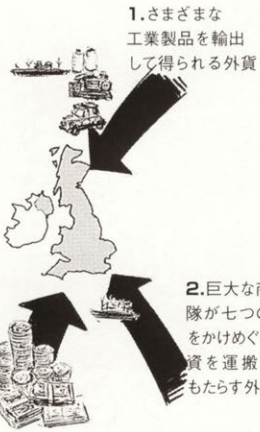
戦勝三大国の一角を占めた英国でしたが、戦後の地位は誇り高い英国民にとって、はなはだ不本意なものでした。

アメリカは戦争によって領土を得ることはありませんでしたが、潜在的な生産力が引き出され巨大な経済力を獲得します。ソ連は経済的に甚大な被害を蒙りますが、東欧とアジアに広大な勢力圏を確保します。

ひとり英国は経済力を低下させ、多くの植民地を失います。

かつてイギリスは〝世界の工場〟と呼ばれ多様な工業製品の輸出によって外貨を獲得しました。加えて英国の商船隊は世界の物流の大きなウエイトを占め、海運業によっても大きな外貨収入を得ます。さらに英国は長年蓄積してきた膨大な海外資産を所有しており、それらが生みだす収入も大きな外貨源でした。

これらの外貨収入が、資源的には恵まれない英本国が必要とする工業原料・燃料・食糧の輸入を支えました。



3つのルートで流れ込む外貨が"大英帝国"の繁栄を支えます。

しかし、戦争によって様相は一変します。産業は軍需に偏り、一般の工業製品の輸出は振るわず、戦前の約三分の一に落ち込みます。商船隊の多くも失われ弱体化しました。戦費調達のため海外資産も多く手放しています。

外貨の獲得源を失って英国は極端な外貨不足に陥り、ついに国民生活の維持に必要な物資の輸入さえ難しくなります。

外貨を稼ぐためには、輸出額が輸入額を上回らなくてはなりません。英国政府は経済の自立性を取り戻すため輸出振興を目指します。自動車は外貨獲得を目指し輸出に振り向けられ、国内には骨董的な年代物が走り回ります。

英国の誇るロールロイス“シルバードーン”は輸出に振り向けられ、国内にはずいぶんな年代物が走り回ります。

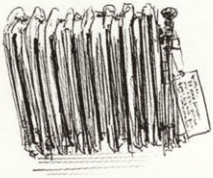
高級ウイスキーにも高い物品税をかけ国内での消費を抑制し、ほとんどが輸出に回され英国民ののどから遠ざかります。

輸入抑制のため食糧輸入は制限され配給制がとられます。葉巻きなどの嗜好品は言うに及ばず、食肉、バター、調味料なども不足し配給量は一時的に戦時中以下に落ち込みます。悪条件が重なってイギリス料理は一段と不味くなります。

英国の市民生活にすっかり馴染みとなった配給待ちの列“que”を見てチャーチルは“キュートピア”(行列天国)と嘆きます。

長きにわたって「世界の工場」を支えた英国の石炭産業は設備の多くが老朽化し効率が悪く、国内では石炭が不足します。しかし外貨が乏しく思うように輸入もできません。当時は石炭による火力発電が主流で石炭不足は電力不足に直結します。

官公庁では“出来ればエレベーターはご使用なさらないように”、ホテルの暖房も“もしあなたがご必要ならお点けします”といった慇懃にして、しみったれた申し出が目につきます。



「第二次大戦以来英国民は笑いを忘れた」—夜になると街は暗く、中曽根の訪れた当時はピカデリー広場のネオンサインも中止されていました。戦勝国ながら英国は〝耐乏〟のさなかにありました。

あぁピカデリーの灯も消えて…

1949年の大晦日には特別に点灯されたピカデリーのイルミネーションも再び消され、51年4月まで点灯制限が続きます。当時、世界最大の都市ロンドンの約870万市民は、耐乏生活のさなかにあります。

ロンドンにて

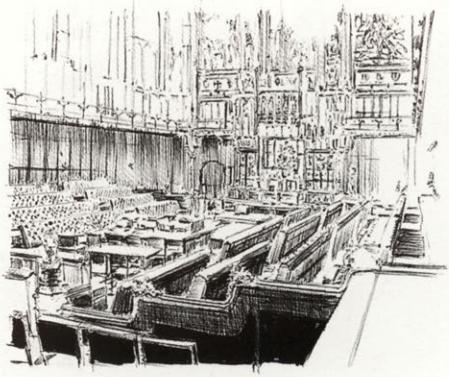
七月十八日、中曽根はテムズ河畔にある英国議会に向かいます。そそり立つ時計塔がトレードマークのウエストミンスター宮殿に英国議会の貴族院（上院）、庶民院（下院）があります。

英国議会にあるウエストミンスター宮殿。その時計塔は議員に無礼の振る舞いをした議員を幽閉する懲罰用の牢屋でしたが、1880年以降使用されていません。

下院が修理中のため議事は両院とも荘厳な装飾の上院で行なわれていました。

「議会内でも、非常に紳士的で反対党の意見も十分尊重し、反対せんための反対の野次など絶対にない」

〝議会政治の母国〟の議会を傍聴し、中曽根はそのフェアな雰囲気を感じ取ります。



英国議会は庶民院（下院）と貴族院（上院）からなり、下院は普通選挙によって選ばれ、上院は世襲貴族と功績により爵位を得た一代貴族などからなります。上院の実権はすくなく形骸化しています。

傍聴を終えた中曽根はテムズ河畔に面したオープン・テラス形式の食堂に向かい昼食をとり、前駐日大使・クレーギーと歓談します。クレーギーはなお壮健で戦後も親日的で遠来の客を歓迎します。

戦後、英国の対日感情には非常に厳しいものがありました。日本軍による英軍捕虜の強制労働問題、植民地喪失のきっかけをつくった敵国という割り切れぬ思いが対日感情をより険しいものにしましたが、そのような中、老クレーギーは日英協会会長に就任しています。

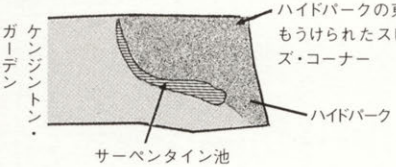
日本とは縁が深かった外交官・ロバート・クレーギー。戦前は吉田茂とともに日英融和に努力。1953年のエリザベス2世戴冠式では、参列のため渡英した明仁親王（現天皇）を接伴します。

続いて中曽根は首相官邸のあるダウニング街に向かいます。ダウニング街十番地が首相官邸、隣接する十一番地が蔵相官邸です。

「いずれも普通の軒並みの家だ。ロンドン市長公舎の壮美に比して面白い国民である」（ロンドン市長公舎については後述）

中曽根はロンドン市長が宏壮な館に住み、一方で首相をこぢんまりとした邸宅に住まわせている英国民のバランス感覚を面白く感じています。

中曽根は十一番地を訪ねクリップス蔵相夫人に面会し、蔵相官邸を見学します。見学を終えるとその足でハイドパークへ向かいます。



サーペンタイン池を挟んでハイドパークとケンジントン・ガーデンが広がります。ハイドパーク(160万m²)、ケンジントン・ガーデン(110万m²)をあわせると上野公園の3倍という広大な緑地がロンドン市民の憩いの場となります。

ハイドパークには市民が自由な主張を演説できる一角、いわゆる〝スピーカーズ・コーナー〟があります。

夕刻、中曽根がコーナーを通りかかると男性十五人、女性二人がめいめい演説をしていました。中曽根はしばらく市民の演説を聴き、自由な演説を保証したこのスピーカーズ・コーナーが戦時中も許可されていたという事実に感銘します。

中曽根は、男性15人、女性2人のスピーカーを目撃しています。その内訳は、「その中三人が共産党、七人がキリスト教、他は政党及び個人的の意見発表」で「弁士に対し野次が相当出るが決して手は出さない」

でかいなぁ
宮殿のようだ

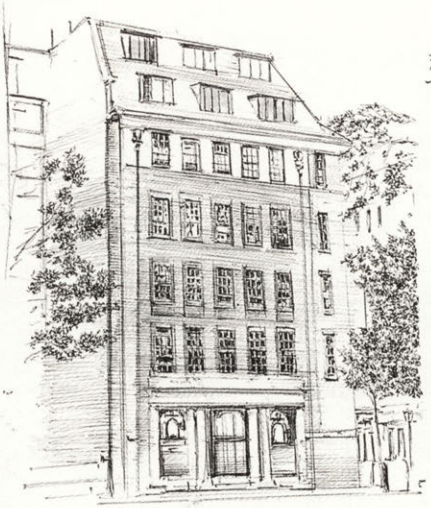
七月十九日、日本人一行はマンション・ハウス（市長公舎）で開かれた歓迎会に出席します。

ロンドン市長（ロード・オブ・メイヤー）は名誉職で市会の長老や国王の侍従から選ばれます。伝統的に国王に次ぐ格式が与えられ、ダウニング街の首相官邸よりはるかに宏壮な館に住います。

マンション・ハウスで中曽根らを出迎えたロード・オブ・メイヤーは小姓といった風情の赤い服の少年を従え、王朝時代そのままに金糸銀糸のガウンをまとっています。

労働党政権成立まで

マンション・ハウスでの歓迎会が終わると中曽根は当時、政権の座にあった労働党本部を訪問します。クレメント・アトリー率いる労働党は昭和二十（一九四五）年より二十六（一九五一）年まで政権を担当します。当時の英国はアトリー労働党政権の末期にあたります。



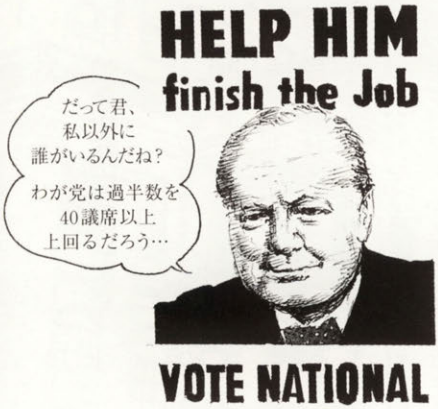
労働党本部の入るトランスポートハウス（運輸会館）1928年以来労働党の根城。

第二次大戦中、首相として英国を指導したのがウインストン・チャーチルでした。チャーチルが首班の戦時内閣は非常事態に対応した挙国一致の連立政権で、保守党・党首チャーチルが首相、第二党労働党アトリー党首が副首相となり両党より閣僚が送られました。

〝戦時宰相〟チャーチルはきわめて活力に満ち、戦争指導に各地を飛び回り、その留守中は地味な印象のアトリー副首相が閣議を切り盛りしていました。

昭和二十(一九四五)年五月の対独戦終結を受けて連立は解消され保守・労働両党は戦後の政権をめぐって七月の総選挙で対決します。

当時のチャーチルは英国を勝利に導いた偉大な宰相として栄光の頂点にあり、結果はチャーチル率いる保守党有利と予想されました。



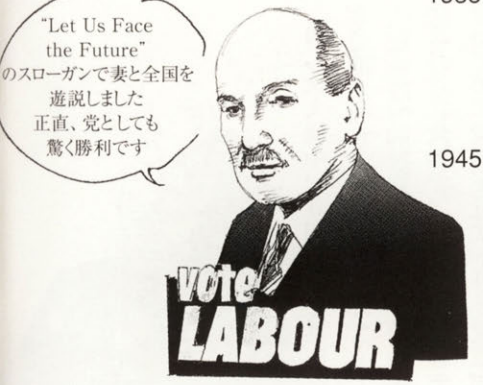
ウインストン・チャーチル
(1874〜1965)イギリスの名門に生まれ陸軍士官学校を経て新聞記者、その後政治家に転身。第1次大戦中に海相・軍需相を務め、第2次大戦では首相となり、強力な指導力を発揮し、英国を勝利に導きます。

しかし選挙はおおかたの予想をくつがえし、労働党が過半数を大きく超える圧勝を収めました。

1935年　保守党387
　　労働党154
　　自由党20
　　(大戦のため45年まで任期延長となる)

1945年　保守党189
　　労働党393
　　自由党12

世界を驚かした45年総選挙の結果は、チャーチルと書簡のやりとりをしたことのあるマッカーサーにも衝撃を与えています。「私はこの英国の振舞いにおどろき、あきれた。チャーチルの指導があってこそ、英国はあの存亡の危機から救われたのだ。彼の偉大な英知と経験がこれからの平和にますます必要になろうというとき、英国民の大多数にどうして彼を追い払うような票を投じることができたのか」「民主主義には違いないが、すさまじい民主主義というほかはない」(「マッカーサー回想記」下　より)



クレメント・アトリー
(1883〜1967)オックスフォード大学在学中に社会主義運動に参加、卒業後、労働党に入党。1935〜55年労働党党首。45〜51年首相。社会保障制度の確立に力を注ぎ、重要産業の国営化を推進します。対外的にはインドの独立を認め、朝鮮戦争勃発後は、戦争拡大、米国の原爆使用に反対し、マッカーサー解任の一因となります。のちに伯爵。

福祉国家に向けて

一九四五（昭和二十）年の総選挙で勝敗を分けた大きな原因は両党の福祉政策に対する取り組みの差でした。

大戦中、チャーチル戦時内閣は将来のあるべき福祉政策の基本計画として〝ビヴァリッジ報告〟をまとめます。報告は貧困者に恩恵的に援助が給付されるかつての救貧法とは根本的に異なる画期的なものでした。

ウイリアム・H・ビヴァリッジ
（1879〜1963）英国統治下のインドで、英国人治安判事の家庭に生まれます。1886年英本国に帰国。オックスフォード大を卒業後、失業問題に取り組み、1941年チャーチル内閣で労働次官。42年、内閣の委任を受け“ビヴァリッジ報告書”をまとめ福祉国家の基礎大系を準備します。のちに男爵。

ビヴァリッジは貧困の多くが個人の資質によるものではなく、社会構造に起因すると考えます。したがって、そもそも、政府にはすべての国民の最低生活を保障する義務があると考えました。ビヴァリッジは報告で政府に、すべての国民を〝揺りかごから墓場まで〟ライフサイクルを通して、適切に援助し、最低生活を保障する社会保障制度の整備を求めます。

戦時下で困難な生活を送る英国民は報告を大きな期待をもって支持しました。

労働党は報告の実施を主張、福祉政策に積極的な姿勢を示し、保守党は推進派、慎重派に分裂します。保守党の福祉政策に対する曖昧（あいまい）な姿勢が有権者をマニフェストに福祉政策を掲げる労働党支持に向かわせます。こうして英国民の福祉国家への期待がチャーチルの個人的名声をしのぎ、労働党の圧勝をもたらしました。

1945年選挙時の労働党選挙綱領の表題は“Let Us Face the Future”（未来に直面しよう）、50年総選挙では“Labour belives in Britain”（労働党は英国を信ずる）と、力強いスローガンで改革を訴え連勝。50年にはサッチャー（のち首相）が“ナンセンスを終わらせろ！”という勇ましいスローガンで出馬しましたが、労働党候補に敗れています。（初当選は59年）

〝静かなる革命〟

「労働党は古い制度を繕うために選ばれたのではなく、新しいものを作るために選ばれたのである」（「アトリー自伝」下巻より）

アトリーは自らの使命をそう語ります。

選挙後あわただしく成立したアトリー政権は公約にのっとってビヴァリッジ報告を具体化します。国民保険法によって社会保障制度が整備され、国民保健サービスによって医療は国営化され無料となりました。

厳しい経済情勢のもとで福祉政策を実施するために税負担は戦時中と同様の高水準となります。アトリー政権は高所得者に極端な累進課税を課し、低所得者の負担を軽減して政府による大規模な所得移転を行います。

また鉄道・鉄鋼・石炭産業・電気・ガス・商業航空など公共性の高い産業を国営化します。これは公共サービスの安定した供給と雇用の確保をねらったものです。

労働党政権はそれまでの自由放任の資本主義とは一線を画し、政府自ら積極的に社会改革に乗り出します。この〝静かなる革命〟と呼ばれる時代を経て英国社会は大きく変貌します。

日本においても昭和二十二（一九四七）年、片山社会党委員長を首班とする革新政権が成立しました。

創設当時の国営医療サービスは徹底された内容で医療は無料であり旅行者にもカードが配られ、滞在中の疾病には無料で治療が行なわれました。

社会主義者である片山を首班とした内閣は清新な印象を与え国民ばかりでなく、マッカーサーからも祝福を受けます。しかしほどなく社会党内の路線論争が深まり、石炭産業の国有化をめぐって右派・左派が対立し、片山内閣は八ヵ月で瓦解しました。

片山内閣は社会主義を標榜する日本社会党、中曽根の所属した保守系の民主党、三木武夫の国民協同党の3党連立政権でした。片山内閣は3党間の対立ではなく、社会党内部の路線対立が原因となって崩壊します。片山は英国労働党に強いシンパシーを抱いていましたが、社会党を労働党のように育成することはできませんでした。

対照的に片山が模範としたアトリー政権はすでに五年にわたり着々と政策を実行しています。

労働党本部で関係者と面談を終えた中曽根は「**欧州の社会主義勢力は極めて現実的、国民的であり日本の左派のように観念論をふりまわさない。この点日本社会党は未成育である**」と日英の差を書き留めています。

また英国の労働者が「**アトリー政権の政策が労働者に犠牲を要求しても**」「**敢えて忍んでいる**」ことに強い印象を受けます。

労働党は1900年に労働代表委員会（LTC）として創建され、独立労働党、ウエッブ夫妻、バーナード・ショーを中心にした社会主義研究のフェビアン協会などが合同して形成された党で、プロレタリアート独裁を目指すマルキシズム政党ではなく、漸進的な社会改良を唱えます。

幕間のチャーチル

中曽根は七月二十日、農業政策の現場を見るためロンドン近郊の協同農場を見学し、農家で一晩を過ごします。

ロンドンから東北約50マイル(80km)にある農園を訪問し、排水設備を観察しています。

翌日、ロンドンに戻った中曽根はロンドン東部の公会堂で行われたMRA大会に出席します。同日の夜はロイヤルアルバート・ホールでチャーチル前首相らが参加し、大集会が行なわれていました。(アルバート・ホールはハイドパークの向かいに立ち、中曽根としては「さきおとと通りかかったあの丸っこい建物にチャーチルが来てるのか」と思うわけです)

チャーチルは元仏首相[*1]レイノー、ベルギー首相[*2]スパークら豪華な顔触れとともに欧州連合論について論じます。チャーチルの人気は大きなものがあり、アルバート・ホールはたいへんな盛会で同じ晩にロンドン市内にいた中曽根もその人気ぶりに驚きます。(「欧州連合」はチャーチルが提唱したシューマン・プランとは違う系統の欧州統合論)

ロイヤルアルバート・ホール
ビクトリア女王の夫アルバート公を記念して4年がかりで1871年に完成。ローマのコロッセオ(競技場)をモチーフとした円形ホールで、8000人を収容できます。

*1 レイノーは1940年、フランス敗戦時の首相

*2 スパークは外相、首相を歴任したベルギーを代表する政治家で、のちにEC委員長。

政権を失っても、チャーチルが英国第一の国際的政治家であることに変わりはありません。チャーチルは自ら〝自由諸国民の顧問〟を以て任じます。また政治活動のかたわら執筆活動にも取り組み、ベストセラーとなった「大戦回顧録」の執筆も五巻目にさしかかりいよいよ多才ぶりを示しています。

1950年2月ポルトガルで絵筆をとるチャーチル画伯。

新聞記者の経験もあるチャーチルは文筆にもすぐれ、「第2次大戦回顧録」でノーベル文学賞を受賞します。また趣味の油絵も有名で休暇にはお気に入りの上っ張りを着て絵筆を振るいます。

翌一九五一（昭和二十六）年の総選挙は保守党が勝利し、チャーチルは再び首相となります。保守党の勝利は朝鮮戦争後の緊張する国際情勢にチャーチルの手腕が期待されたこと、労働党のもとである程度の経済回復がはたされ、耐乏路線が嫌気されたためといわれます。

保守党政権は労働党政権によって国営化された企業を再び民営化し、政策を転換しますが、社会保障制度についてはほぼ踏襲します。

従来、軍事面に重点を置きすぎると批判されたチャーチルが軍事費を抑制し、社会保障の拡充に努める姿は意外とされましたが、戦時連立時代のビヴァリッジ報告に由来する福祉政策は党派を超えて受け継がれていきます。

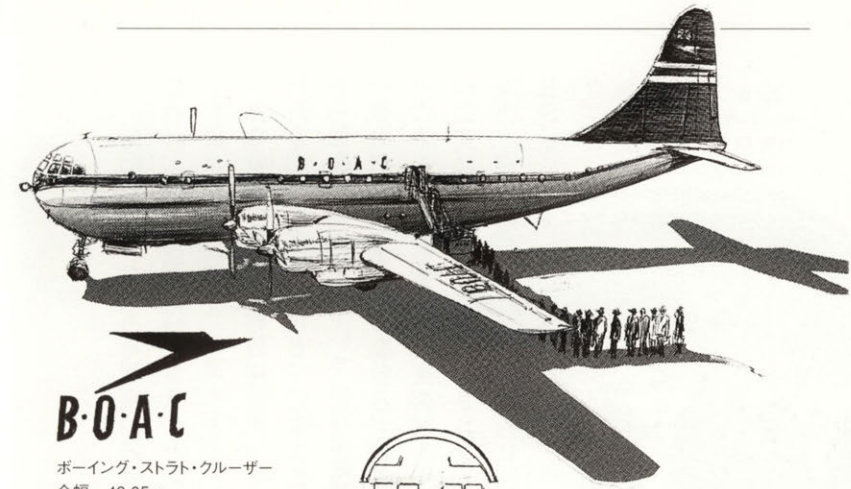
1952年、アトリー党首のガーター勲章授与式に立ち会うチャーチル首相。対決する保守・労働党ですが、ともに国王陛下のもとにあり、王室の繁栄を祈念します。

大西洋横断

七月二十二日、日本人一行はロンドン国際空港に向かい、BOAC（英国海外航空）のチャーター機、機種は米国製ボーイング・ストラト・クルーザーに搭乗します。

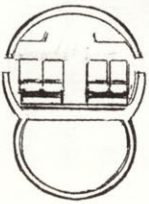
チャーター機は午後六時十五分、北米大陸に向けて飛び立ち、まず北上して北極圏の孤島アイスランドを目指します。

1947年に就航した米国製ボーイング・ストラト・クルーザー（成層圏・巡航機）はB29の設計を流用し、胴体を洋梨型の大容積のものに換装したもので、内部は2階建て、1階部分にバーを設けたタイプもあります。（中曽根が乗ったのは、81人乗りギッチリ詰め込み型）



B·O·A·C

ボーイング・ストラト・クルーザー
全幅　43.05m
全長　33.63m
全高　11.68m
最高速度　604km/h
航続距離　7.400km
BOACでは50座席（マジェスティック・ファースト）と81座席（コロネット・ツーリスト）があり、中曽根が搭乗したのは後のタイプ。



BOACのカラーリングは上半分がホワイト、下半分はジュラルミンの銀地肌、胴体中央に濃紺のストライプがはしります。

豪華でゆったりしたつくりのストラト・クルーザーに乗り込んだ中曽根は「**日本も民間旅客輸送機を持ちたいと思う**」とつくづく羨望を感じます。

航空機の研究・運用が禁止された日本では国産機の開発は到底望みえないことでしたが、BOACのもっとも重要な北大西洋横断路線に就航する二機種のうちストラト・クルーザーは米国製、アーゴーノードも米国のダグラスDC-4の改良型であり、優秀な航空技術を持つ英国にとっては遺憾ながら戦後の空においても、アメリカの存在感は圧倒的なものがあります。

午後十時四十分、機はアイスランド・ケルファビックに到着します。寒冷な気候のため大地には草木もまばらで、白夜の薄明かりのなか四囲には荒野が広がります。給油の間一行は機を降り、寒さに驚きながら控所で待機します。

飛行場で中曽根は「**石油タンク、倉庫などの工事が大きく行われ**」米軍基地が建設中であることに気づきます。極圏の孤島もソ連を封じ込める重要な拠点となりつつありました。

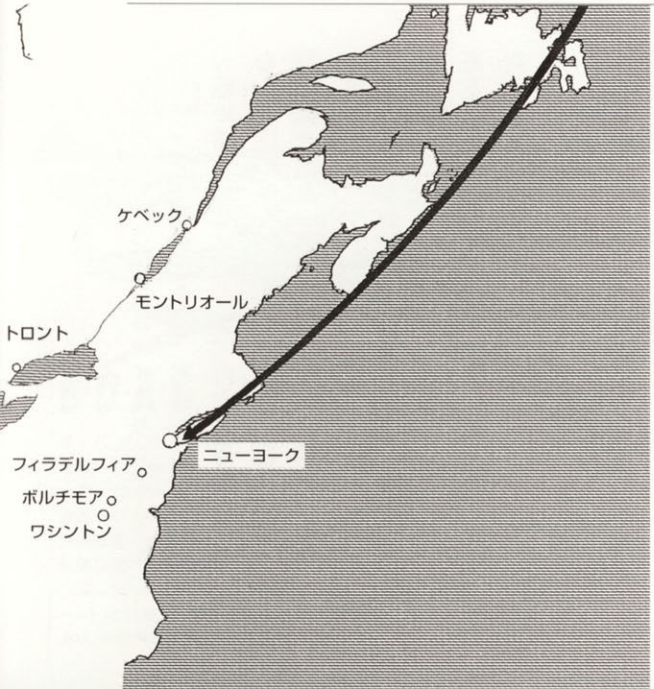
人口わずか13万人のアイスランドには軍隊がなく、防衛を代行するためにアメリカ軍が駐留します。

ケルファビックで中曽根と言葉を交わした基地設営員は、「オキナワ」からアイスランドに移動してきたと話します。ローマでの第一歩からケルファビックまでヨーロッパには終始米国の存在感が際立ちます。

休憩一時間、機はアイスランドを飛び立ち、大西洋横断にとりかかります。

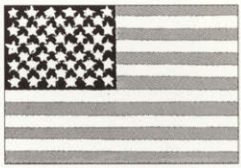
ストラト・クルーザーには吊り床式のベッドがあり、追加料金で使用できます。

夜明けが近づくころ機はカナダ沿岸にさしかかり、ロンドンを出発して約十五時間、アメリカ東部時間午前六時頃、機はニューヨーク州ロングアイランド沖合に到達します。



ニューヨークにて

7月23日〜7月27日



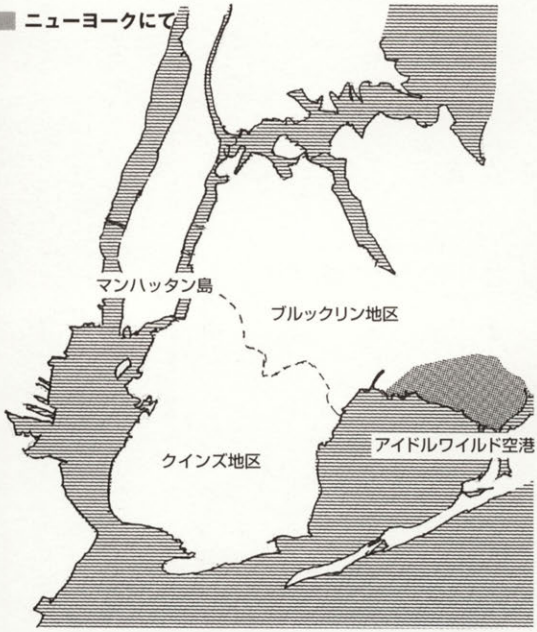
一九五〇年・ニューヨーク

当時、ニューヨークの空の玄関は完成間もないアイドルワイルド国際空港でした。アイドルワイルドはロングアイランド島のジャマイカ湾を埋め立て造成された破格の大空港で、面積は羽田の約二十倍、三キロ級滑走路三本をはじめ十二本の滑走路が配置されています。各種の施設・店舗が併設され空港自体がひとつの都市のようでした。

多数の滑走路から一時間に二〇〇機の航空機が離着陸する活力に満ちたさまはアメリカが世界の中心であることを雄弁に物語ります。アメリカの航空界は誇りをこめています。

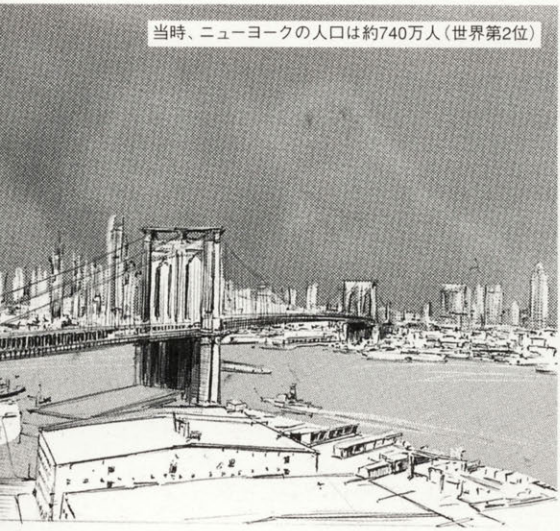
〝すべての道はアイドルワイルドに通ず〟

1949年のアメリカには国内線に913機、国際線に177機の航空機が存在し、同年の国内線は1508万704人、国際線は152万64人の乗客を輸送しています。（数値は「航空情報　第1集」昭和26年より）



午前六時二十分、日本人一行はアイドルワイルドに到着します。入国手続きを終えると旅客はバスでマンハッタンに向かいますが、一行にはMRAが用意した車が待っていました。国務省からも係官が出迎え、当時のMRAの影響力がうかがえます。

ニューヨーク市警の警護を受けながら日本代表約七〇名は車列十六台を連ね、空港を出発、クインズ地区かあるいはブルックリン地区を抜け、イースト・リバーを渡ります。眼前には摩天楼が林立するマンハッタン島が広がります。


当時、ニューヨークの人口は約740万人（世界第2位）

アイドルワイルド空港は1942年に建設がはじまり48年に開業します。1963年、暗殺されたケネディ大統領を記念してジョン・F・ケネディ国際空港と改称されます。

マンハッタンでは十九世紀末より高層ビルの建築が始まり、一九五〇年には二〇〇mを超える高層ビルがすでに二十棟以上存在し、力感あふれる摩天楼が林立していました。

当時のマンハッタンではエンパイヤステイトビル（102階/381m）が最も高く、次いでクライスラービル（77階/320m）があります。この2棟はエッフェル塔（300m）をしのぐ高さを誇ります。（2001年、テロによって失われたワールド・トレード・センタービルは110階/420m）

「ニューヨークの高層建築は驚くべきものである」。中曽根も「物質文明の極度の発達」、その象徴である摩天楼に目を奪われます。当時日本では三〇m以上のビルは建設が許可されず、本格的な高層ビルが登場するのは昭和四〇年代になってからでした。

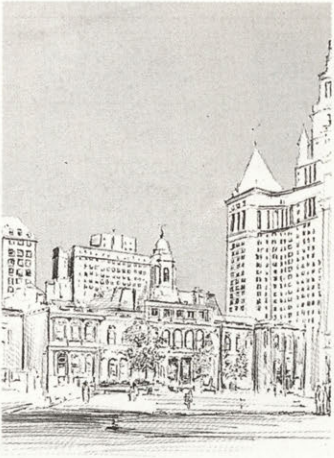
日本人一行を乗せた車列はニューヨーク市警の警護を受けながら「ブロウドウェイを通って、マンハッタンの大通り」を北上し、ニューヨーク近郊の保養地マウント・キスコに向かいます。

マウント・キスコにはMRA支部があり、到着した日本人一行をご飯、刺身、吸物、すき焼きといった日本料理でもてなします。

日本を発って一月半、久しぶりの日本食は一同を大いに喜ばせます。

当時の日本人は年間100〜120kgの米を食べました。（現在は60kgをやや下回るあたり）当時の日本人が長期間、米飯を絶つつらさにはまことに切実なものがありました。

翌日の七月二十四日、一行はニューヨーク市のシティ・ホールを訪れオドワイヤー市長と面会します。席上代表の一人、浜井信三広島市長は小さな木製の十字架をオドワイヤーに贈っています。



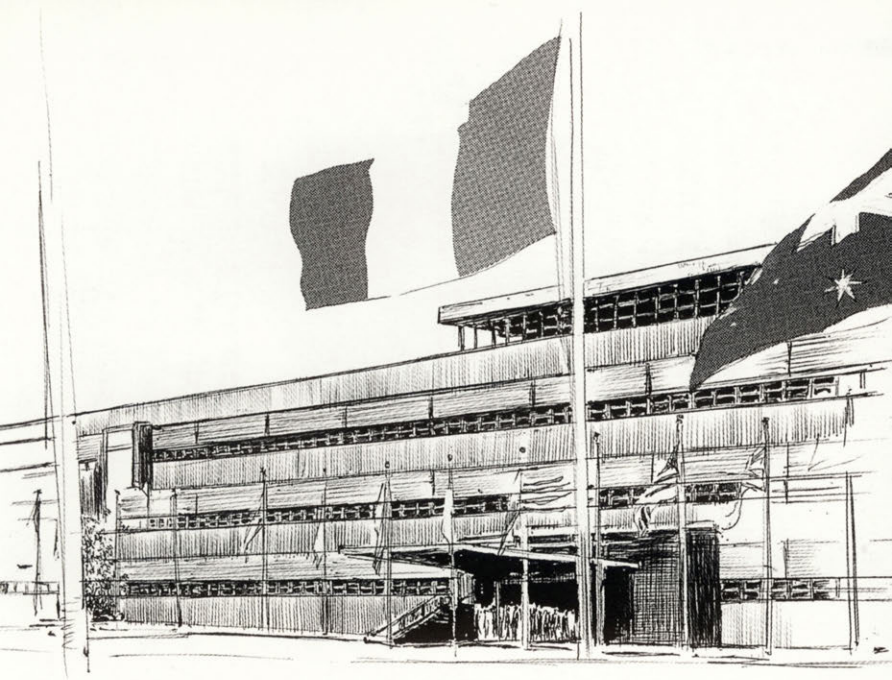
ニューヨーク・シティ・ホール

午後からは、めいめいニューヨークの各所を訪れ、中曽根は鈴木栄二大阪警視総監とともにニューヨーク市警を表敬訪問し、市警総監と面談します。

この日の予定を終えた中曽根はイースト・リバーを渡って、ブルックリンにあるエベッツフィールドに向かい、ドジャースとクリーブランドの試合を観戦します。メジャーの選手の巧みなプレイに中曽根は「**到底日本など及ばない**」と感嘆します。

この日は6-4でドジャースが勝利！

当時のニューヨークにはヤンキース、ジャイアンツ(現本拠地サンフランシスコ)、ブルックリン・ドジャース(現本拠地ロサンゼルス)の3チームがあり、それぞれヤンキースタジアム、ポログランド、エベッツ・フィールドを本拠地としていました。



国際連合本部にて

七月二十五日、一行は国際連合本部を訪問します。当時、国連本部はまだニューヨーク郊外、ロングアイランド島レーク・サクセスの仮庁舎に置かれていました。

〝連合国の人民〟の名において〝われらの一生のうち二度までも言語に絶する悲哀を人類に与えた戦争の惨害から将来の世代を救う〟

（国連憲章前文より）

昭和二十（一九四五）年に米・英・ソが中心となって創設された国連は国際連盟と異なり、米ソが参加し実効性を期待されました。しかし朝鮮戦争の勃発によって早くも試練にさらされています。北朝鮮軍の侵攻から一カ月、マッカーサー指揮下の米・韓国軍は後退を続け、半島から追い落とされそうな形勢でした。

レーク・サクセスの仮本部は、1939年ニューヨーク万国博覧会の施設を転用したもので、緑の芝生に囲まれた3階建ての庁舎に冷房が入っています。この会場の地下深くには6939年に開封される現代文明の資料を詰めたタイムカプセルが埋められています。

＊当時、ソ連は常任理事国である中国代表が北京の中共政権ではなく台湾の国府政権より派遣されることに抗議し、ボイコットを続けていました。

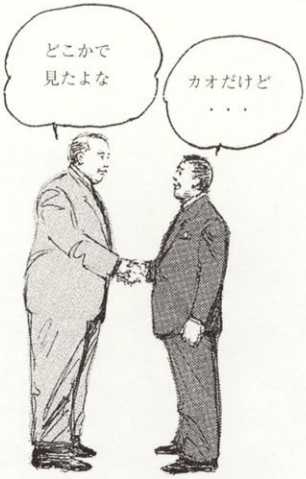
安全保障理事会では、拒否権を持つソ連（ソ連は北朝鮮を支援）が＊欠席していたため、北朝鮮の南進を「侵略行為」と決議し、リー事務総長は北朝鮮軍を阻止する国連軍の編成を各国に呼びかけます。

緊迫した情勢のなかでリーは日本代表と会見します。偶然ながら、日本代表の座長格である北村とリーは背丈こそ違いますが非常に似た風貌でした。

6月の開戦から後退を続けた国連軍は、9月マッカーサー指揮のもと仁川上陸作戦によって形勢を逆転し、ほぼ朝鮮全土を制圧しますが、中共軍の参戦により再び後退、戦況は膠着します。1953年、北緯38度線を停戦ラインとする休戦協定が結ばれ現在に至ります。

似た者同士の二人は握手を交わし、リーは北村にスピーチを許可します。この機会に北村は儀礼的な挨拶にとどまらず、財政家らしく具体的な数値をあげて率直に日本の実情を説明しました。

「日本は人口の上では現在世界の第六位であ



北欧・中立国ノルウェーの外相を務めたリトヴェイ・リーは、米ソどちらにも偏らない人選として初代事務総長に選出されました。

帰国後、北村が宮中にてご進講の際、「私と国連のリー事務総長が並んで写した写真を陛下にご覧にいれたところ陛下（昭和天皇）は、『リー総長と北村は実によく似ている』と仰しゃった」（北村徳太郎　「北村徳太郎随想集」より）

るが、国土の点からいうと世界の第三十位である。この矛盾は、日本人がどんなに耐乏しても、努力しても、それだけでは解決できるものではない。しかもこうした矛盾がしばしば国際紛議の原因になっていることに眼をおおってはならない」（「北村徳太郎随想集」より）

リーは日本人一行を前に日本が一日も早く平和な民主国家として国連へ参加することを期待する旨、語りました。

午後四時、一行は折から開催された安全保障理事会を傍聴し、オースチン米国連大使がマッカーサーからの報告書を読み上げるのを聞きます。

七月に国連軍総司令官に任命されたマッカーサーはいまや国連の名において多国籍軍を指揮することとなり、米国政府のコントロールの及び難い異常な存在になりつつあります。

一行はヘッドホーンのそなえつけられた傍聴席（トーン部分）で安保理事会を傍聴します。

国連ビル

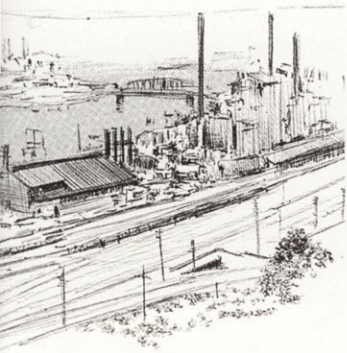
マンハッタンのイースト・リバー河畔に建つ現在の国連本部も建物はほぼ完成していました。設計にはフランスを代表する建築家ル・コルビジェが参加し、三十八階建ての国連ビルは壁面がガラスでおおわれ「最大の採光による明朗な建築」というコルビジェの主張が明快に表現されています。八月末にはレーク・サクセスからの移転作業が始まります。

この晩、レーク・サクセスからニューヨークに戻った一行はロックフェラーセンターにあるラジオ・シティの大劇場を訪れダンスを見ています。国連ビルとの距離は約1.5km。

一九五〇年・アメリカ

中曽根が初めて訪れたアメリカは工業の生産力、所有する富の世界に占める割合において現在をはるかにしのぐものがありました。対照的に日本の経済力は敗戦によって最低線をたどり、日米の格差はきわめて大きく、日本人にとってその懸隔はとうてい埋めがたいものに感じられました。

豊富な石炭と鉄鉱石に恵まれたアメリカは年に約一億トンの鉄鋼を生産します。

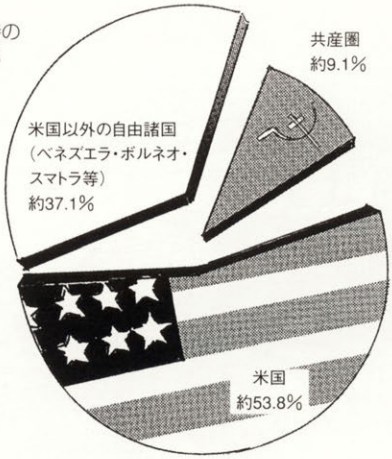


1950年、日本の鉄鋼生産348万トン

生産された鉄鋼の約二割が自動車産業によって消費されます。年間に八〇〇万台の新車が製造され、国内にはすでに約五〇〇〇万台（乗用車にバス・トラック等含む）の自動車が存在していました。

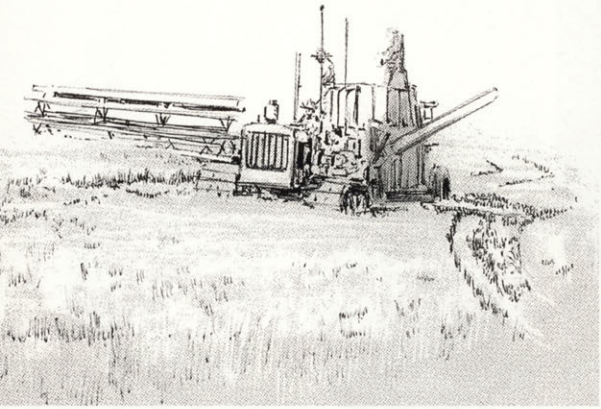
現在の自動車保有台数はアメリカ約2億2300万台、日本約7300万台、イギリス約3200万台。（数値は2001年、トラック、バス含む）

さらにアメリカは石油の生産国としても抜きんでていました。テキサスやカリフォルニアで生産される石油はモータリゼーションを支え、新たな化学製品を生み出します。



2002年、アメリカの原油生産量はサウジアラビア、ロシアに次ぐ世界第3位に後退しています。

加えて農業の生産力も巨大です。北西部では機械化された大規模農法による小麦・トウモロコシの生産が盛んで国内需要を満たした余剰分は世界各地に援助として供与されアメリカは自由世界の食糧庫となりました。



機械化の進んだ小麦、トウモロコシの生産量は世界一で、綿花の栽培（こちらはあまり機械化されていませんが）も世界一でした。

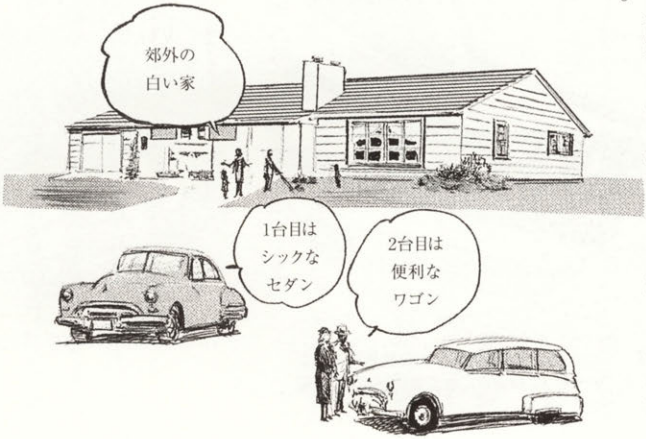
目を転じて国民の生活水準をみると、一人当たりの国民所得は一四〇〇ドルを超え、世界最高でした。

一人当たり国民所得（1949）

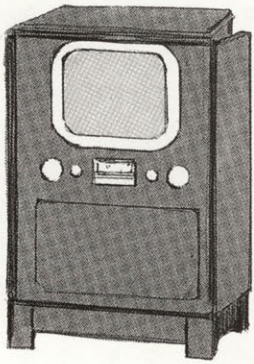
1位	アメリカ	1,453ドル
6位	イギリス	773ドル
13位	フランス	482ドル
22位	ドイツ	320ドル
23位	ソ連	308ドル

29位	イタリア	235ドル
42位	日本	100ドル
55位	インド	57ドル
69位	中国	27ドル

（数値は1949年　国連統計局調べ）



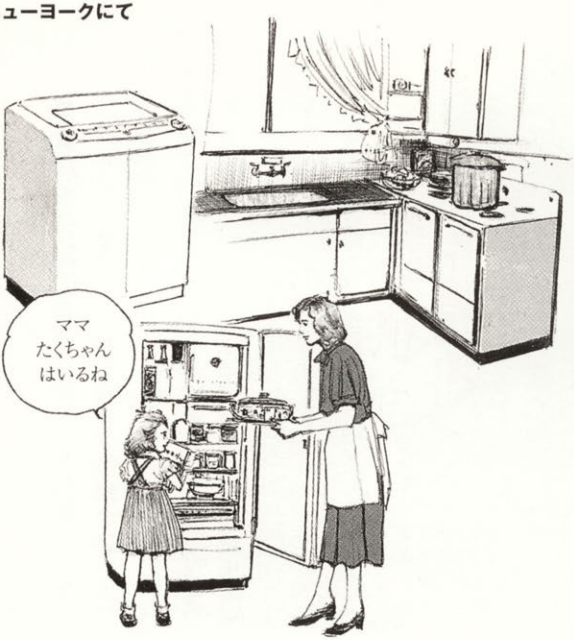
標準的なホワイトカラーの家庭には、各戸に電話が備えられ、居間には明るい照明がとりつけられています。ラジオ、レコードプレーヤー、さらにすでにテレビセットのある家庭もあります。



1950年、アメリカでは約746万台のテレビが生産されます。

現在の１人当たり国民総所得はアメリカ35,060ドル、日本33,550ドル、イギリス25,250ドル、ドイツ22,670ドル、フランス22,010ドル。（数値は2002年世界銀行統計）

台所にはレンジや機能的なグリルがあり、電気冷蔵庫には食材が豊富に蓄えられています。さらに電気洗濯機、掃除機も登場して家事負担は大いに軽減されています。



「米国は消費で支えられている国である。この国では消費するということは一種の道徳なのである。この国には日本流の『もったいない』という言葉がない」（中曽根康弘「日本の主張」より）アメリカ国民の旺盛な消費が企業の利潤を生み、技術革新と大規模生産をうながします。ついで大衆化された安価な製品が登場し、再び消費を刺激して経済は発展していきます。

世界の多くの国が戦後復興を目指し苦闘を続けるなか、アメリカの中産階級は高度な消費生活を享受し、繁栄を謳歌しています。

代表の滞在したサヴォイ・プラザホテル（プラザ・ホテルの向かい）にはテレビが備えられています。

1950年、アメリカでは洗濯機・約440万台、冷蔵庫・約620万台が生産されます。
同じ1950年、日本では洗濯機・2,328台、冷蔵庫・4,996台が生産されています。

マンハッタンにて

七月二十六日、中曽根はマンハッタン島の先端に位置するウォール街の株式取引所を見学します。

ウォール街をあとにした中曽根は代表団とともに〝スキヤキ・レストラン〟「都」に向かいます。本格的な日本料理を味わえる「都」は戦時中さびれましたが、戦後、日本から帰国した進駐軍将兵が家族連れで訪れるようになりにぎわいます。

この日「都」には滞米中の湯川秀樹夫妻も招待されており、中曽根らと会食しています。

湯川は昭和二十三（一九四八）年、プリンストン高級研究所に招かれ研究生活に入り、翌年戦前発表していた中間子理論が認められノーベル物理学賞を受賞します。日本人初の

受賞に日本国内は沸き立ちましたが、湯川夫妻はストックホルムでの授賞式に出席し、再びアメリカに戻ったためまだ日本には帰っていません。

湯川秀樹
（1907～1981）東京出身、京都帝大教授。中間子の存在を予言し49年ノーベル賞受賞。核兵器廃絶を訴え、世界連邦運動にも尽力。

春先に胃潰瘍をわずらった湯川でしたが、ようやく快復し、「**病気が癒えられて元気で愛想がよい**」と中曽根は書き留めています。快復した湯川は八月十日に日本に一時帰国の予定でいわば凱旋帰国の直前という晴れがましい時期でした。

「**寝られず主人は乗物に乗って睡眠を取った**」とスミ夫人が受賞後の繁忙ぶりを披露します。

この席では米ソの核開発競争も話題となります。

そもそも〝マンハッタン計画〟とよばれた原爆開発はオッペンハイマー、フェルミなど湯川の旧知の科学者グループによって推進されたものでした。

エンリコ・フェルミ、ロバート・オッペンハイマー
ともに原爆開発の中心人物

エリンコ・フェルミ

ロバート・オッペンハイマー

1939年、コロンビア大学で湯川はフェルミと面会しています。「現在どんな問題を研究しているかを私が訊ねた時彼は明答を与えなかった」「何となく腑に落ちないという感じが後々まで残っていた」「彼の胸中に原子力を制御しようという大きな企画が去来していたことを神ならぬ私は知る由もなかった」（「科學朝日」昭和23年1月号より）

原爆開発に成功し、唯一の核兵器保有国となったアメリカの軍事的優位には絶大なものがあり、その戦略も核の優位を前提に構築されました。しかし、昭和二十四（一九四九）年九月、ソ連が原爆所有を公表、アメリカの核独占は予想外の短さで終わります。

トルーマン大統領は核の優位を取り戻すべく翌年二月、水爆開発を指令します。

ソ連は4カ所の秘密都市“アトムグラード”を建設、月に4個の原子爆弾を製造貯蔵しているとされました。

湯川は中曽根に原爆開発に成功したソ連が、当然ながら引き続き製造しているだろうと指摘し、アメリカの水爆製造については着手したことは確かだが完成しているかはわからないと述べています。

昭和二十一（一九四六）年八月、*ジョン・ハーシーがニューヨーカー誌に掲載した記事によって広島の惨状が米国にも広く伝えられます。広島市民の証言から構成されたこのレポートはニューヨークで「一日にして三十万部を売りつくし」、市民に核攻撃による被害の具体的イメージを与えます。

ソ連の原爆所有が確認されるとニューヨークはソ連による先制攻撃の第一目標であるという噂が流布され、市民の間には核攻撃への恐怖が高まります。

*ジョン・ハーシー　ピュリッツアー受賞経験のあるジャーナリスト

一方、トルーマン政権は朝鮮戦線での原爆使用を検討し、原爆が現実に使用可能な兵器と考えていることを隠しません。

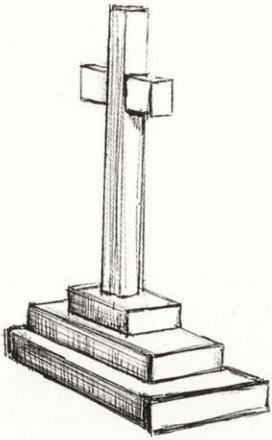
米ソはさらに威力のある核兵器の開発にしのぎを削り〝恐怖のなかの均衡〟の時代が始まります。

ニューヨーク州防衛委員会はトラック8069台、移動クレーン155台、各種土木機械約1000台を動員しセメント24万3000樽を使用して被爆時の被害を最小限の規模に封じ込める計画を立てます。当時のアメリカは持ち前の物量で放射能さえ押さえ込めると信じているかのようです。

州防衛委員会委員長に就任したルシアス・クレイ退役陸軍大将。前ドイツ派遣軍司令官で、1949年、ソ連によるベルリン封鎖に対抗した"ベルリン空輸"の指揮官。

湯川は「都」での会食で、核兵器を保有した人類には高い道徳が求められることを語っています。後年の湯川は物理学者の枠を超えて核廃絶運動に力を注ぎます。

これを聞いた中曽根も海軍時代、広島の原子雲を見た一人でした。



自身も被爆者である浜井信三広島市長がニューヨーク市に贈った十字架は、広島・泰国寺の焼け残った楠の根から切り出したものでした。

素顔のニューヨーク

五日間のニューヨーク滞在中、中曽根は市内を歩き、様子を観察しています。

「ニューヨークの通りは人種の展覧会である」

「我々が歩いても別に珍しがらない。自国人だと思っている」

ニューヨークの街中で中曽根の興味をひいたのは品揃えの豊富で便利なドラッグ・ストアでした。

「日本語では薬屋であるが、酒も煙草も料理も日用品もすべて売り、町のアンチャンたちの時間をつぶす冷房の社交場になっている」

ドラッグ・ストアの奥に進むと「スタンドがあって軽飲食は何でもやる」「町のアンチャンも紳士も*パナマ帽をかぶってそこでビールを呑みアイスクリームを食っている」「平民的社交場」。

*パナマ帽(左)はパナマ草の若葉をさらして編んだ帽子で軽くてごく気楽なもの。中曽根がかぶっているのはフォーマルなソフト帽。

中曽根はニューヨークの到着当日の印象として、「高層建築は驚くべきものである。だがパリ、ロンドン、欧州に較べると、ショウウインドの飾り方も街の構造も芸術性と伝統に欠ける。銀座と新宿の差である」と新興アメリカに野暮ったさを感じていますが、数日後には「欧州からくると下町のような感じがするが、勿体ぶらずに男性的で独特の魅力がある」とも書き留め、気取らないアメリカン・スタイルには好感を示しています。

七月二十七日、日本代表はニューヨークを出発し、ワシントンへ向かいます。

交通手段は不明ですが、ニューヨーク―ワシントンは鉄道ならペンシルベニア鉄道の急行で約四時間。

米国には日本のような国鉄はなく、全国に多数の民間鉄道会社が路線を経営します。ニューヨーク―ワシントン間はペンシルベニア鉄道が有力。

ニューヨーク

フィラデルフィア

ボルチモア

ワシントン

ペンシルベニア鉄道のエンブレム

空路をとればラ・ガーディア空港から約一時間というところです。

ニューヨークからワシントンまで約330km

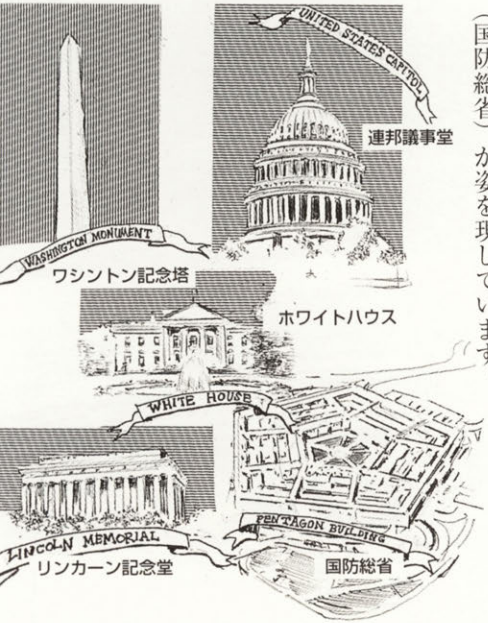
ワシントンにて

7月27日〜8月1日

ワシントンにて

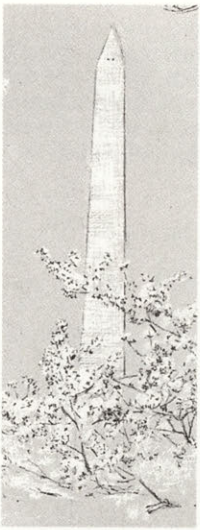
七月二十七日、日本人一行はワシントンに到着しました。

首都ワシントンには三権の中枢ホワイトハウス、連邦議事堂、最高裁判所に加え、各種の官庁が立ち並び、戦後新たに巨大なペンタゴン（国防総省）が姿を現しています。



尾崎行雄のワシントン再訪

〝ポトマックの桜〟、ポトマック河が流れこむタイダル池に沿って植えられたソメイヨシノの並木が、毎年ワシントンの春に鮮やかな彩りをそえます。



この「ポトマックの桜」を贈ったのがMRAの世話役・相馬雪香の父、尾崎行雄でした。

大正元（一九一二）年、東京市長であった尾崎が日米親善のためセオドア・ルーズベルト大統領に送ったソメイヨシノ三〇〇〇本が現在まで残る桜並木に成長します。

1908年に贈られた苗木は虫食いのため焼却され、1912年あらためて贈られた3000本が現在の桜並木となります。なお、当時の東京市長は府会の推薦によって選任されたため、尾崎は一時期、衆議院議員と東京市長を兼任しています。

尾崎は明治二十三（一八九〇）年の第一回総選挙より連続して衆議院に当選、一九五〇年には半世紀を超える議員歴を持ち、雄弁な弁舌ぶりもあいまって〝憲政の神様〟と呼ばれました。

明治時代には薩長藩閥の打破を目指し活躍、大正年間を迎えると政党政治の確立のため憲政の擁護を唱えて、大正デモクラシーの旗手となりました。

尾崎行雄
（1858〜1954）神奈川県出身。慶応義塾に学び、福沢諭吉の推薦により、新潟新聞主筆となる。1882年、立憲改進党創立に参加。1890年、31歳で第1回総選挙に当選以後、1953年まで議席を保持。普通選挙実現のため運動し、政党政治の擁護に尽力する。

早くから海外の政治体制に強い関心を抱いていた尾崎は、明治二十（一八八七）年の初外遊以来、頻繁に欧米を訪れます。また繁子夫人を亡くしたのちに、英国人女性デオドラ[*1]（相馬雪香の母）と再婚し、その国際的視野はさらに広がります。

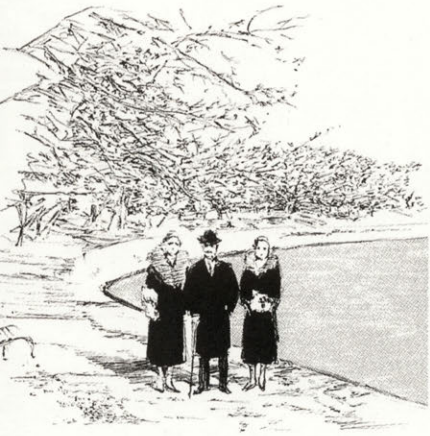
尾崎は第一次大戦後の平和主義、国際協調主義のたかまりに対応して日本が軍縮を実施して、平和勢力の指導的立場に立つべきと主張します。

「世界が今日より大きかった間は、一國は他國を犠牲にして繁栄することができた。然し今や世界はよほど小さくなった。恐らく現世紀の初めに比すれば十分の一になったであろう。これに反して戦争の破壊的武器の能力は数百倍になった。故にいかなる國家も他の國家を敵としていては、生存も繁栄もできない」[*2]

*1 相馬雪香の母、テオドラは明治期の官僚・尾崎三良と英国人女性のあいだの娘で英国籍女性。

*2 1933年ニューヨークにおけるスピーチ（「日本評論」1950年6月号より）

近代戦の不毛を説く尾崎は世界平和を実現する枠組みの一歩として、国際紛争を解決する国際裁判機構の創設を構想していました。しかし滞米中に満州事変が勃発し、日本は戦争への道を突き進みます。軍部の台頭とともに尾崎の自由主義的な言動や国際協調の主張は孤立し、昭和八（一九三三）年、外遊より帰国すると右翼からの脅迫、官憲による監視のなかに身を置くこととなります。



1931年、尾崎は娘・品江、雪香をともない戦前最後の訪米をします。

昭和十七（一九四二）年、戦時下で総選挙が行われると、選挙の応援演説が不敬罪として起訴を受け、拘置、その後、敗戦まで政治活動は封じられた形となりました。

尾崎は1942年衆院選挙の応援演説で翼賛選挙（政府が推薦候補を定め、非推薦候補に激しい選挙干渉を行った官製選挙）を「明治、大正」と発展した議会政治が「三代目」にあたる昭和で形骸化するという意味で「唐様で売り家と書く三代目」と批判します。この「三代目」が明治から数えて三代目にあたる昭和天皇を誹謗するものとして不敬罪で起訴され、一審有罪、大審院（現在の最高裁に相当）で逆転無罪となります。

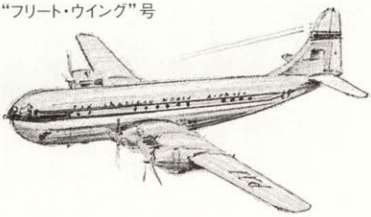
一方、戦時中米軍が投下したビラには恩師・福沢諭吉とともに“自由主義者”尾崎をたたえる内容のものがありました。

戦後、尾崎は軍国主義に反対し、自由主義を貫いた気骨ある議会人として再び脚光を浴びます。

昭和二十五（一九五〇）年、尾崎を前駐日大使グルーらが米国へ招待します。渡航費用も前述の「都」オーナー*塚田氏が負担を申し出て、尾崎は九十一歳という高齢でしたが、訪米を決断します。

この渡米にはマッカーサーも敬意を払い、GHQに招いて直々に激励しています。マッカーサーの激励を受けた尾崎は長男・行輝、三女・相馬雪香らをともなって五月十六日羽田を発ちました。

尾崎の乗ったパンアメリカン・エアウエイ"フリート・ウイング"号



尾崎一行はワシントンで連邦議事堂を訪れ、下院議場を傍聴しています。

レイバン下院議長が二階席の先生（尾崎）を指して「今ここに、63年の長い間、日本の民主主義のために斗った偉大な政治家を迎えたことを下院の誇りを以て紹介します」と言ったとたんに沸き起こった拍手の嵐は今でも忘れられない（伊佐秀雄　評論家　尾崎行雄元秘書の回想　「国際写真情報」1960/4より）

"憲法の神様"91歳

"昭和の歌姫"11歳

この便にはハワイ、西海岸に公演に向かう美空ひばり一行も乗り合わせています。

*塚田数平　新潟県出身、渡米後すき焼きなどの日本料理店経営で成功。

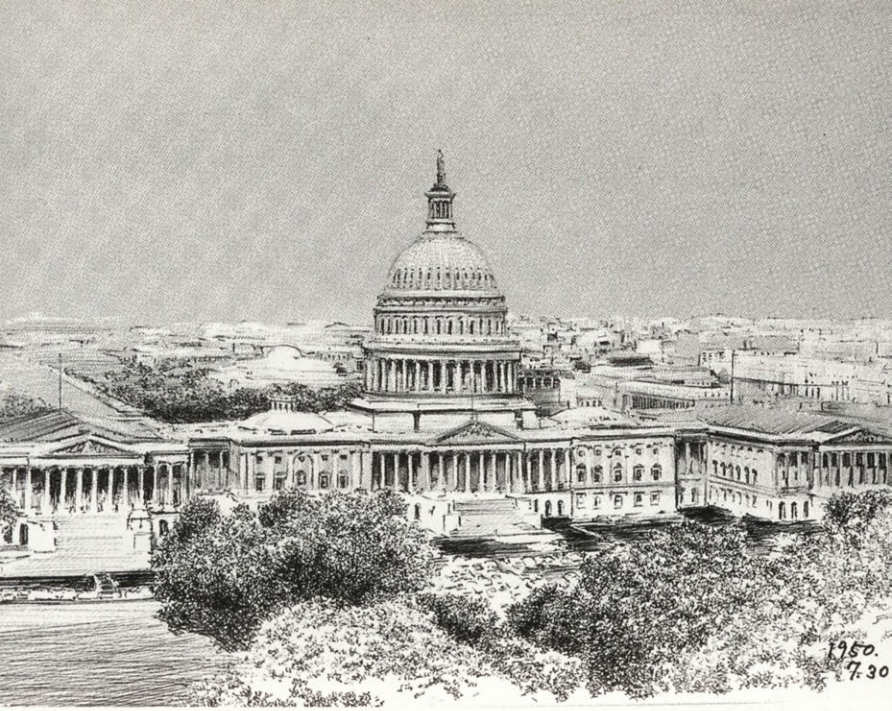
“夢かとも　思えどさめぬもてなしに　我らの幸をわれは怪しむ”
ワシントンの議会を訪れた尾崎の一首。

さらに、十九年ぶりにポトマックの桜並木を散策し、幹太くなった桜に触れています。

尾崎はニューヨークにも立ち寄りグルー元駐日大使らと懇談し帰国しました。娘の相馬雪香はMRAの日本人一行に合流します。

若年ながら日本人一行の世界一周を実現させた相馬ですが、その行動力は父譲りの資質、父が与えた国際色豊かな環境によるもので、一九五〇年に中曽根がワシントンを訪れるのもたどっていけば尾崎行雄に由来するといえます。

1939年よりMRA運動に参加した相馬雪香（1912〜）は1948年、アメリカで開催されたMRA大会に参加、49年にもスイス・コーを訪れます。数々の社会事業に取り組み1979年には「難民を助ける会」を設立します。



北村徳太郎の下院演説

七月三十日、日本人一行は米国下院の招待を受け、連邦議事堂を表敬訪問します。この日、下院は座長格の北村徳太郎に日本語による演説の許可を与えます。英語以外の言語による演説は前例がなく、あたかも友邦の使節団を迎えたような応接は日本人一行を驚かせました。

終戦以来五年、当初の日本懲罰論は後退したしかに対日感情は大きく好転していました。

中曽根もワシントンの政界、財界の対日感情の好転を認めながら、しかし「一般世論は必しもその様に甘く考えたら間違いである。一般人の考えでは、必しも日本が可愛いのではない、より憎いソ連が張り出して来たから、

や、普通程度に戻ったと言うのが真相である」と、政治家らしい冷静な分析も書き留めています。

中曽根ら国会議員は下院議場に招じ入れられ着席し、北村の演説を待ちます。

下院議員、日本人議員のほか傍聴席には折りからワシントン訪問中のオーストラリア議員団の姿もありました。

北村は登壇すると、冒頭、オーストラリア議員団に向けて戦争に対する謝罪の言葉を述べています。次いで国連での演説と同様に数値をあげて日本の現状を訴えます。

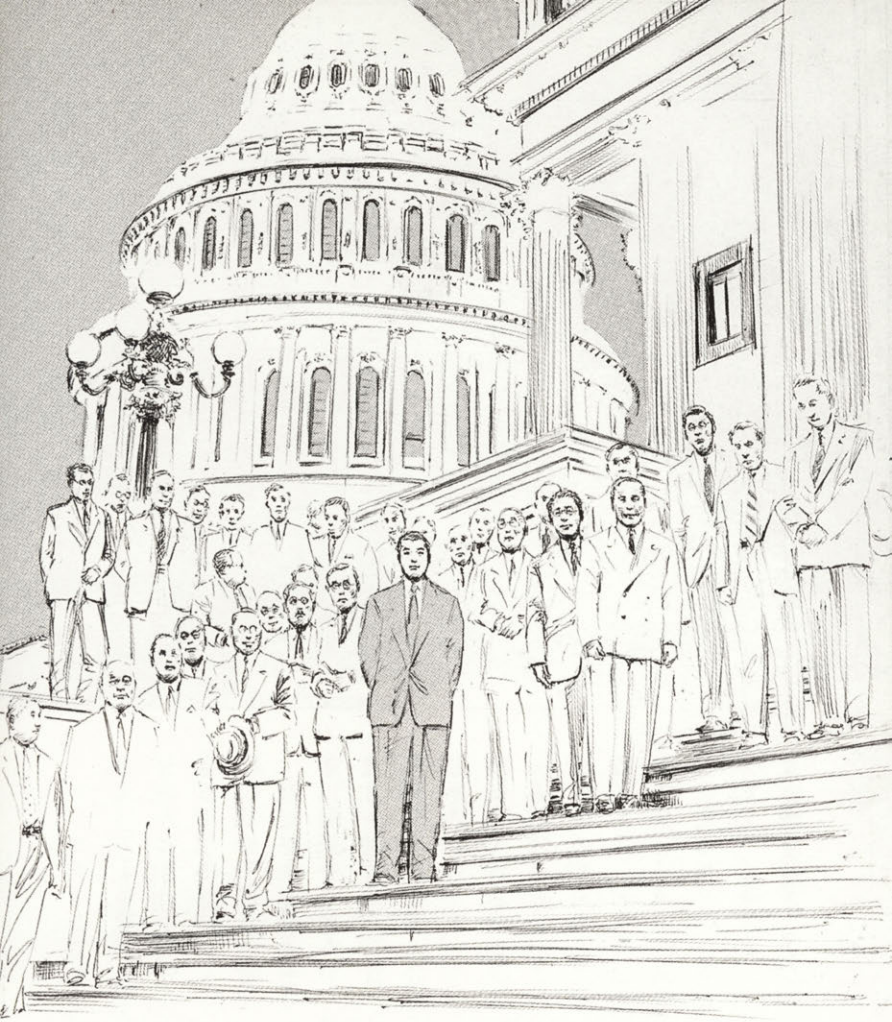
北村徳太郎（1886～1968）佐世保商銀、親和銀行の頭取を務めた財界人で1946年長崎2区より衆院選当選。片山内閣で運輸相、芦田内閣で蔵相。国民民主党これに続く改進党に所属し、中曽根と行動をともにします。1960年政界引退。クリスチャンであり、温厚な文人肌の人柄で知られました。

クリスチャンである北村は最後に、新約聖書ルカ伝にある「放蕩息子（The Prodigal Son）」を引用します。この一節には父親と兄弟が登場します。

父親から財産を分け与えられた兄弟。

兄はその財産を蓄え堅実に暮らしますが、弟は異郷をさすらい、放蕩のかぎりを尽くします。時が過ぎ、すべてを失った弟は困窮し帰郷します。赦しを乞う息子を父は兄の反対にもかかわらず、受け入れます。

この一節は悔い改めた者には赦しが与えられるべきことを教えたものです。北村は欧米ではよく知られたこの一節を引用し困難な条件のもと「日本人は道義的責任を感じ、負うべき責任を感じ、負うべき責任を男らしく負おうとしている」と述べ、新生日本に対する米国の理解を求め、その言葉は満堂の喝采をあびました。



ワシントンで一行は連邦議事堂を背に記念撮影をします。

ボンの首相官邸では後ろのほうに写っていた中曽根でしたが、大西洋を渡ると、最年少の参加者ながら、一行の真ん中に立ち後年をうかがわせるものがあります。

中曽根のワシントン政界との接触

占領当初から共和党支持者のマッカーサーと民主党トルーマン政権との意思疎通は円滑さを欠いていました。なによりマッカーサーは心理的にルーズベルト前大統領の急死によって副大統領から昇格したトルーマンを〝偶然による大統領〟として小者扱いしています。

1950年10月、ウェーキ島で朝鮮問題についてトルーマン大統領と初めての会談を持ったマッカーサーは最高司令官でもある大統領に対し敬礼ではなく、握手をかわします。当時、すでにトルーマンはマッカーサーの独断専行に危機感をつのらせています。

マッカーサーはワシントンの国務省から派遣されてくる顧問を適当にあしらい、身辺をフィリピン以来の側近将校で固め、占領改革の〝輝かしい功績〟のみをワシントンに報告します。

このためワシントンから見た日本占領はあたかもマッカーサーの個人的事業のようであり、〝すばらしく順調〟という以外、その詳細となるとつかみかねるものがありました。

このような事情もあってワシントンの有力者は遠隔の占領地からやってきた中曽根にマッカーサーの政策、来たるべき講和について質問し、懇談しています。有力者の中には上院で外交政策に影響力のあったタフト議員、コナリー議員がいました。中曽根は両議員との会談で講和の接近を感じとり、占領や講和に関する詳細な意見を帰国後に文書としてワシントンに送ることを約束しています。

ウェーキ会談についてマッカーサーは「トルーマン氏は極東についてはほとんど何も知らず、歴史をゆがめた見方と、そのうち何とか共産主義と戦っている連中を救えるだろうというほんやりした希望とをつきまぜた、奇妙な意見をくりひろげた」(「マッカーサー回想記」下より)と述べ、大統領をこきおろしています。

実際に翌年、中曽根はワシントンへ意見書を送りますが、このとき同様のものをマッカーサーにも提出しています。この文書が中曽根が政治生活の中で「最も記憶に残る」（「政治と人生」より）文書と回想する〝マッカーサーへの建白書〟となります。

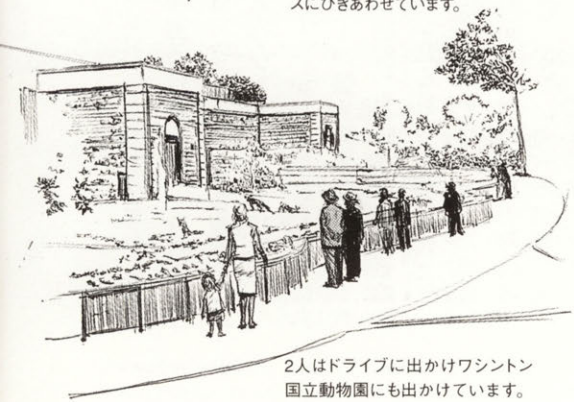
ロバート・タフト
父は第27代タフト大統領（在任1909～13）。共和党のホープとされた有力政治家で1949年には"ベスト・セネター（上院議員）"にも選ばれました。アイゼンハワーが大統領選に出馬するまでは次期大統領最有力候補とみられていました。

トム・コナリー
民主党所属、当時上院外交委員長として外交政策形成に影響力があり、サンフランシスコ講和会議では米国全権の一人となります。

中曽根のワシントンでの宿舎は、国務省極東課のロバート・フィアリーの自宅でした。

フィアリーは戦前、駐日大使グルーの個人秘書も務めた知日派で、中曽根とは同い年であったこともあり二人は意気投合し日本の独立問題について語り合います。

ロバート・フィアリー
国務省極東課の知日派。滞日経験もあり、著書に米国の対日政策を多角的に分析した「日本占領」があります。フィアリーは1951年に対日講和取りまとめ役のダレス特使（のちに国務長官）のスタッフとして来日し、中曽根をダレスにひきあわせています。

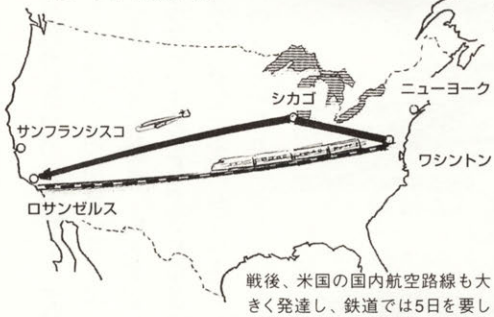


2人はドライブに出かけワシントン国立動物園にも出かけています。

西海岸へ

中曽根は八月一日にワシントンを出て二日に中西部のシカゴに到着、翌三日をシカゴで過ごし、四日にはカリフォルニア・ロサンゼルスに到着します。

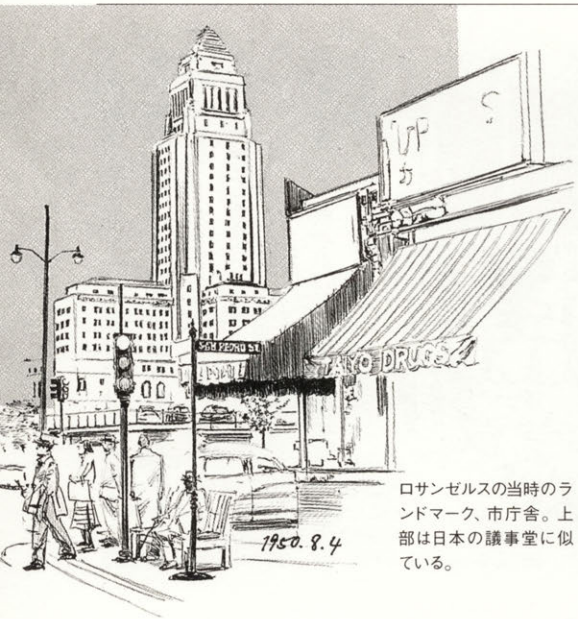
当時のアメリカ横断の花形機“ロッキード・コンステレーション(星座)”機



戦後、米国の国内航空路線も大きく発達し、鉄道では5日を要した大陸横断が約8時間で可能となっています。

ロサンゼルス

太平洋岸のロサンゼルスまで来ると、新興の活気のなかに東洋的な情緒が漂います。東海岸よりはるかに日系人も多くなります。



ロサンゼルスの当時のランドマーク、市庁舎。上部は日本の議事堂に似ている。

八月九日、中曽根は市内の日本料理店で開かれた群馬県人による歓迎会に出席します。

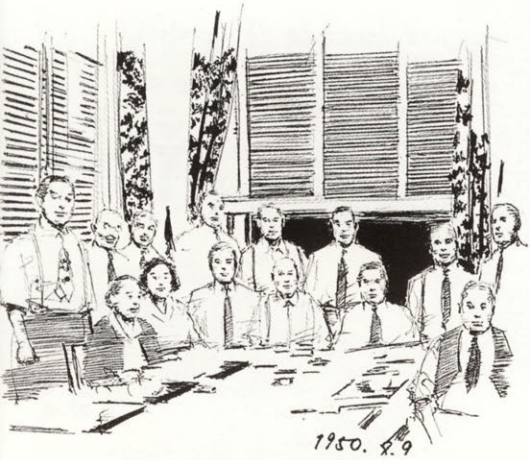
参加した十三人の県人は続々、自家用車を運転して現れます。その颯爽（さっそう）とした姿に中曽根は県人がアメリカ人と伍して生活していることを感じ取り、「**たのもしい限り**」と意を強くします。

「自動車に至ってはなんといっていいかほとんど形容の言葉のない程、数多くの行列をなしてアメリカ全土にあふれている。ロサンゼルスでは市民平均二人に一つのカーを持っているというのだから豪勢さにビックリする」（前年ロサンゼルスを訪れた片山元総理の感想「民主政治の回顧と展望より」）

ロサンゼルスは
モータータウン

開戦後ほどなく太平洋岸の日系人約十一万人は敵性人種として内陸部に設けられたキャンプに収容されました。移送時の混乱で財産を失った者も多くいます。

ロサンゼルスの県人たちも戦時下の苦境を経験し戦後それぞれに生活を立て直し、中曽根を迎えています。



当日、中曽根をもてなした群馬県人がしきりと懐かしんだのは上毛三山（赤城山・榛名山・妙義山）でした。

県人の中には絹織物で有名な桐生の出身者もおり、郷土の生糸産業の将来を懸念します。

アメリカでは戦後ナイロンの進出が著しく、高価な絹製品に取って代わる勢いでした。中曽根はパリで感じた生糸市場の縮小という懸念をここでも感じます。

1938年.石炭を主原料にデュポン社の開発した人工繊維は“ナイロン”と名付けられ、10年後の48年には月産9000万足のストッキングが生産され、“合衆国婦人の足を占領”しています。
(数値は「学習年鑑」1949年版より)

県人たちは生糸に代わる輸出品として「椎茸、アンゴラ兎の毛、竹細工」が「もう少し安ければ非常に有望」と説明します。また「日本品は見本と実物が違うので大いに評判をバン回する必要がある」と指摘しました。

戦前、生糸・綿糸の繊維製品を除くと日本製品は国際市場で二流の代用品として扱われるものが多く、戦後輸出された日本製品も注文先からクレームがつくケースが多くありました。「国際的経済競争は激甚である。一度外に出れば冷たい風が吹いている」「経営者は良質品、質の品を作り、絶対的に信用を回復すること」ロサンゼルスで中曽根は国際競争力の重要性を深く認識しています。

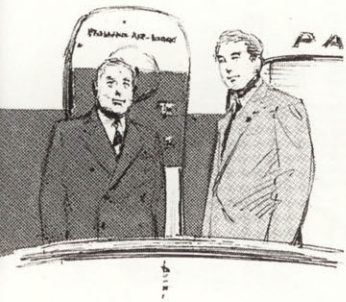
やがて日本製品の品質は向上し、1985年4月9日、中曽根首相は官邸より生中継で貿易黒字解消のため国民1人当たり100ドル(当時約2万5千円)の海外製品購入を呼びかけます。

帰国・太平洋横断

中曽根は八月十日から遅くとも十三日までには、サンフランシスコに移動しています。サンフランシスコはアジアへの玄関口でした。

日本人一行は日をずらし四隊に分かれて帰国していますが、中曽根がサンフランシスコを出発したのは帰国の日時から逆算すると、遅くとも八月十三日夜と推定できます。

中曽根は北村徳太郎ら約二十名とともに再びPAL機に搭乗し、帰国の途につきます。



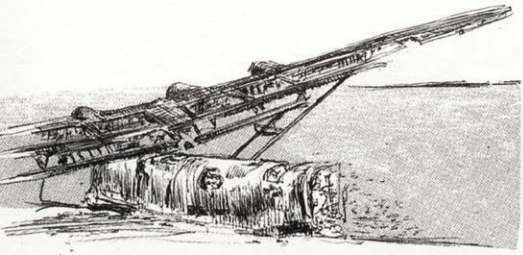
当時の太平洋横断はまだ島伝いの飛行です。サンフランシスコを離陸した飛行機はまず約八時間、洋上を西南に飛んでハワイ・ホノルルに到着します。

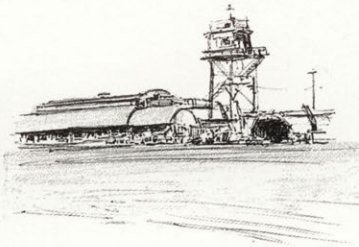
ハワイに着くと旅行者にはもれなく歓迎の意味を込めたレイがかけられます。レイを首にかけないことは非常な無礼とされますが、トルーマン大統領はレイを拒んでハワイ市民の憤激をかったことがあり、一方我が吉田総理はサンフランシスコ講和会議に向かう途上、ホノルルに立ち寄った際、“花のかんばせ”満面の笑みでこれを受けました。

ハワイを飛び立つと、次はウェーキ島に着陸します。

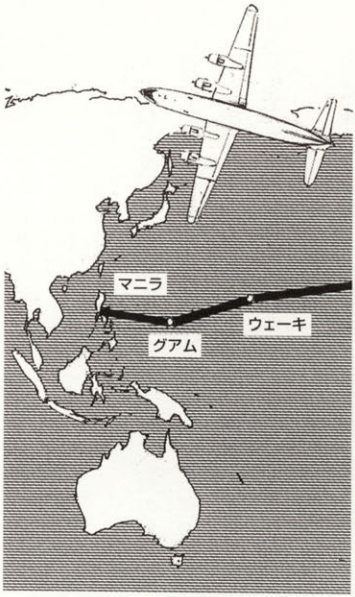
美しいサンゴ礁のウェーキ島は太平洋戦争初頭に日本軍が占領し、戦後米国によって再占領されました。

ウェーキ島は東京から約3500km、ホノルルより約3400kmにある小島。1934年、アメリカ海軍省の直轄地となり、基地が建設されます。太平洋戦争開戦直後、日本軍が占領、戦争後半、米軍の前線の後方にとり残され玉砕こそまぬがれましたが補給が途絶え、守備隊に多くの犠牲者が出ました。50年代になっても浜辺には日本の艦船や飛行機の残骸が残ります。

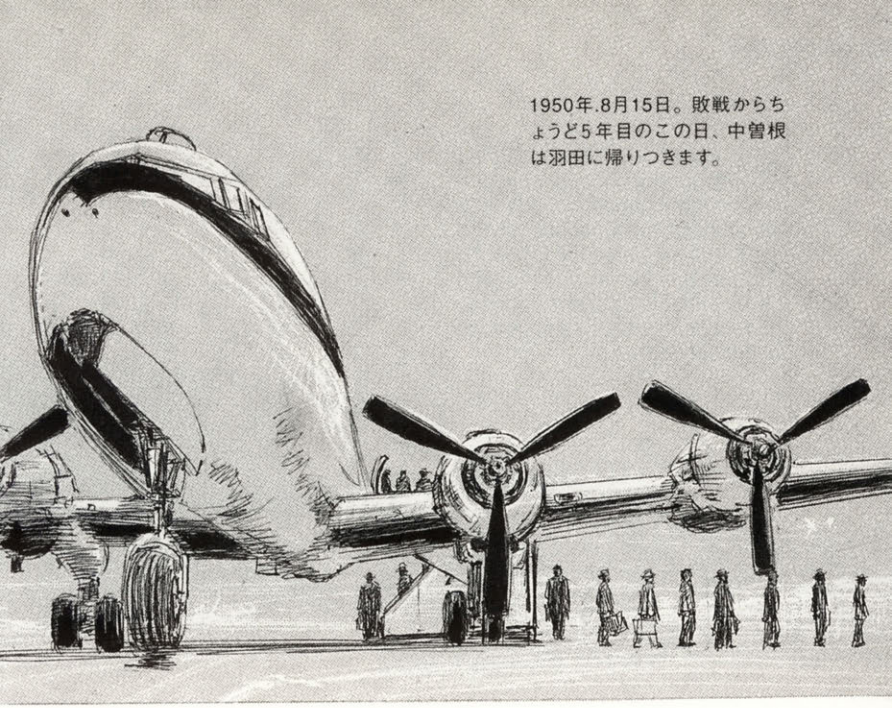




中曽根の乗った搭乗機はチャーター機ではなかったと考えられ、PAL本来の太平洋横断コースを飛行したと思われます。東京へは遠回りになりますが、おそらくグアムを経由してマニラに立ち寄ったと思われます。



このルートで飛行すると、八月十五日の昼にマニラを飛び立った機は沖縄を経由して夜の太平洋をひたすら北上します。



1950年.8月15日。敗戦からちょうど5年目のこの日、中曽根は羽田に帰りつきます。

中曽根を乗せたＰＡＬ機は八月十五日、午後九時三十五分羽田に着陸しました。

出発の地に降り立って―

―平和と繁栄を謳歌するスイス／復興の槌音響くドイツ／欧州統合に進むフランス／耐乏のなか福祉国家をめざす英国／世界を指導する強力な国家となったアメリカ―

中曽根が、躍動する戦後世界を感じ取った〝一九五〇年の世界一周〟は終わります。

1950年から1983年

（「マッカーサーへの建白書」をめぐるスケッチ）

世界一周から帰国して一週間が過ぎた八月二十二日、中曽根はさっそく高崎で帰朝報告会を開きます。

つめかけた聴衆に中曽根は見聞した各国の現状を説明し、特に特色あるスイス経済の構造や豊かな生活、敗戦国ドイツの復興ぶりを強調しました。

フランスに関しては、訪問日がパリ祭前後であったことがわざわいしたのか、生活ぶりが*「軽薄」の傾きがあると辛口で、イギリスについては*「老帝国崩壊寸前の悩みが深く」必死の経済政策（輸出振興）に努力していると、耐乏ぶりを強調します。しかしながら、英国人の国民性については、なかなか味のある民族と誉め、伝統ある英国議会のフェアな雰囲気を高く評価しています。

講演は群馬会館大ホールで約1500名の聴衆を集め開催され、午後7時から午後10時45分までの長丁場となりました。

＊上毛新聞（1950年8月24日付記事より）

アメリカでの印象については対日感情の好転ぶりを強調し、特にリー事務総長が日本の国連加盟を歓迎すると言及したことを喜ぶべきトピックスとして伝えています。

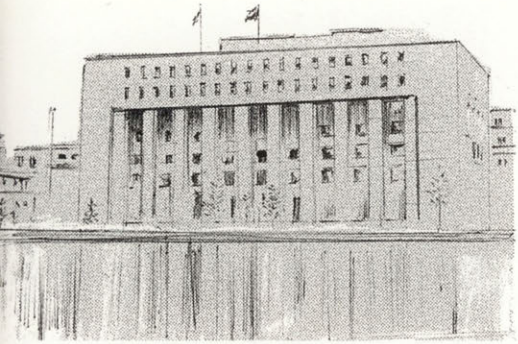
中曽根は欧米各国の印象を伝えるべく、その後「一日平均三回、三カ月の間に約五万人の人々に講演し」（「日本の進路を決めた10年」より）この秋を忙しく過ごします。

講演は群馬県下に限らず、10月には京都・福知山まで出かけて報告会をしています。

九月になると米国ではトルーマン大統領が対日講和準備を公式に声明、ダレス国務省顧問が各国間との予備交渉を開始して、朝鮮戦争の勃発によって遅延を危惧された日本の講和独立は実現に向けてにわかにテンポを速めます。

講和への期待が高まるなか迎えた年の瀬から、翌昭和二十六（一九五一）年の正月にかけて中曽根はワシントンでの約束どおりタフト、コナリー両上院議員あての意見書の執筆にとりかかり、同様のものをマッカーサーにも提出することを思い立ちます。こうして「ワシントンへの意見書」は〝マッカーサーへの建白書〟ともなります。

中曽根は一月、完成した意見書のうち数部を航空郵便でワシントンへ発送し、マッカーサーへの提出分は、一月二十三日、自ら携えて、GHQに持参します。



日比谷・皇居のお濠に面する第一生命ビル。頑丈なつくりのため戦時中、東部軍の司令部が置かれ、戦後GHQ司令部が開設されました。6階端にマッカーサーの執務室がありました。中曽根はJ・ウイリアムズ民政局課長に意見書を手渡します。

ジャスティン・ウイリアムズ
民政局課長

再開されたばかりの航空郵便。料金はかなり高い。

GHQに提出された建白書はマッカーサーに呼びかける前書きがありました。中曽根は建白書提出の動機を印象深い言葉で語っています。

「久しい間、日本人はその思案や感情を笑いの中に紛らわして参りました」

中曽根は占領後のおとなしく、もの静かな日本人の従順さが、無思考ゆえではないことを指摘します。思うところがあっても「相手方の友情に対しては黙々として従うという我が国民衆」の特質が日本占領を円滑にした—中曽根はそう指摘し、自身がそのさまを「秘かにいじらしく静観して来たのであります」と告白しています。

そして、終戦時とは違う段階に入った国際情勢を受け、中曽根は日本の将来について「日本の青年の一人として」「マッカーサー元

帥閣下」に対し、「率直に日本人の心情」について「Frankly Speaking」をすると宣言します。

意見書の本論では、米軍が介入して行う農家への強引な供出督促、日本人の意向は無視されたまま進む警察予備隊の編成、民政局の国会に対する監視と内面指導など占領軍の隠された強権的な側面を指摘し、「如何なる聖将と雖(いえど)も、その個人的影響を以て」「近代国民を五年以上も占領下に支配することは不可能でありましょう」として日本占領が限界にきていると断定します。

さらに「最近欧米を一巡して、私は自国の文化や伝統に愛着を持たぬ国民は、劣等国民であると痛感」すると強い調子で述べ、敗戦とそれに続く占領が日本国内において自信を喪失し、いたずらに自国を卑下する「植民地的卑屈」を蔓延させていると懸念します。

占領の長期化につれ、統治する者のおごりは深まり、統治される者はますます卑屈となる—。

双方の堕落を深める不幸な現状を打破するには、どうすればいいのか?

中曽根は自ら答えます。

「自由意志の返還、占領の終結、それによる、新鮮にして健康、明朗にして誠実な新なる協力関係の設定」

つまり占領の終結、真の意味の日本の独立回復こそが健全な日米関係をもたらすと主張します。

加えて中曽根は占領初期に比べ、にわかに緩和された占領政策をさして「懲罰を仰せつけられた日本人から見れば、未だ完全に改変しない受刑者が、喧嘩の助太刀として必要なので仮出獄させられて、協力者に立たせられ

た」と巧みに風刺し、米国の対日政策が高邁な理念にもとづいたものではなく、案外、国際情勢に左右される場当たり的なものと批判しています。

さらに意見書は朝鮮半島で装備のよくない共産軍相手に苦戦を続ける米軍を指して、〝案外弱い〟とまで言ってのけるなど、中曽根自身「読み返してみて、若干の功名心や青年客気（かっき）の横溢しているところもある」（「政治と人生」より）と回想する鋭角的な内容を含み、それゆえに「占領下の一国民として、独立復帰を悲願としていた一途な心情が滲み出ている」（前掲書より）迫力に満ちたものでした。

そもそも日本占領はポツダム宣言が示す非軍事化と民主化を実現するためでした。その目的が完了した日本をさらに長期にわたって占領し続けることは、当初の占領目的から逸脱しており、米国の軍事戦略を優先した措置といえました。

米国においても、日本占領の長期化にともなって、反米感情の高まりを懸念する意見が強まります。ワシントンでは長期占領を望む陸軍省に対し、国務省が日本の早期独立の検討を開始し、トルーマン大統領も基本的に早期講和に傾きます。

この流れを受けて中曽根はワシントンに、早期独立を要求し、日米間の問題を整理して指摘した意見書を送りました。意見書は興味を持って受領され、タフト、コナリー両上院議員からは意見書を感謝する返事が届きます。

しかし、「マッカーサーへの建白書」の顛末だけは不明でした。

マッカーサーは吉田総理など総理以外の日本人に書簡を送ることはほとんどありませんでしたが興味をひかれた書簡や贈呈品にたいし、まれに担当副官を通じて返信を出すことがありました。

中曽根の意見書提出から二カ月半後、マッカーサーはすべての地位から解任されました。*〝戦場において勝利に代わるものはなし〟マッカーサーは朝鮮半島での全面的な勝利を目指し、参戦した中共軍の撃破をねらいます。しかし朝鮮戦争が東西の全面戦争に発展することを懸念したトルーマンは、ついに昭和二十六（一九五一）年四月十一日、マッカーサーを解任します。マッカーサーは占領終結を見ることなく日本を去ります。

この年の九月、吉田首相は首席全権としてサンフランシスコ講和条約に調印、翌年四月、日本は独立を回復します。さらに昭和三十一（一九五六）年日本の国連加盟が実現し、国際社会への復帰をはたしました。

中曽根は昭和三十四年、岸内閣で科学技術庁長官として初入閣、以後も要職を歴任し、政治家としての階梯を登っていきます。

—高度成長を経て経済大国へ—。昭和も後半にさしかかりマッカーサー、吉田茂といった人々もいつしか去っていきます。〝オキュパイト・ジャパン〟という時代は日本人の意識から足早に遠ざかっていきましたが、そのようなあわただしい時日の経過のなかでも、中曽根は「マッカーサーへの建白書」の顛末が気になったといいます。

*〝戦場において勝利に代わるものはなし〟1951年4月19日、解任直後、帰国したマッカーサーの米議会における演説の一節。ひとたび戦争となれば徹底的に勝利を追求する軍人・マッカーサーの思考がうかがわれます。この演説は〝老兵は死なず、ただ消えゆくのみ〟のフレーズでしめくくられています。マッカーサーは1964年に死去、高齢をおしてその葬儀に参加した吉田茂も1967年に死去し、国葬で送られます。

中曽根が「マッカーサーへの建白書」の顛末を知るのはその提出から三十二年を経た、昭和五十八（一九八三）年、首相官邸を訪問したジャスティン・ウイリアムズの証言によってでした。

朝日新聞　1983年　8月5日

歴史の証人と時忘れて

Q：「会えてうれしい」「三十二年前に会った時、いつかあなたは首相になると思っていた」

――中曽根首相は四日夕、首相官邸で元GHQ職員のジャスティン・ウイリアムズさん（七七）の訪問を受けた。ウイリアムズさんは占領中、首相がマッカーサー最高司令官に早く講和すべきだとの建白書を提出した際、それを受けとった民政局国会課長。建白書は同司令官によって、すぐくずかごに捨てられたが、ウイリアムズ氏は拾って保存したという。当時の建白書を思い起こしながら「直截的にものを言うのは好きだ。正論をいうのはいい」。会談は四十分にわたり、首相は「歴史の証言を聞いたよ」。「戦後政治の転換」を説える首相にとって充実した時間だったようだ。

ウイリアムズは占領時代GHQ民政局の課長を務め、中曽根の建白書を受け取り、マッカーサーに取り次いだ本人でした。多忙な中、ウイリアムズと面会した中曽根は懐旧談をかわします。

ウイリアムズは建白書の内容が率直で「Excellent Opinion」（『政治と人生』より）と感じたと述べ、これをマッカーサーに提出したが、建白書を見せられたマッカーサーは「如何なる聖将と雖も」「近代国民を五年以上も占領下に支配することは不可能」と記述した占領批判に激怒し、破り捨てようとし、しかし「二十八ページにも及ぶ分厚いものであったので、破けないでそのまま屑籠に投げ入れた」（前掲書より）と語っています。建白書は中曽根のとりつけた固い厚紙の表紙のためにはねかえって屑箱から飛び出し、*現在に伝わることとなります。

中曽根の建白書を見たマッカーサーの劇的な振る舞いは、歴史にたいして建白書がその前書きどおり、「Frankly Speaking」であったことをあざやかに証（あかし）だてています。

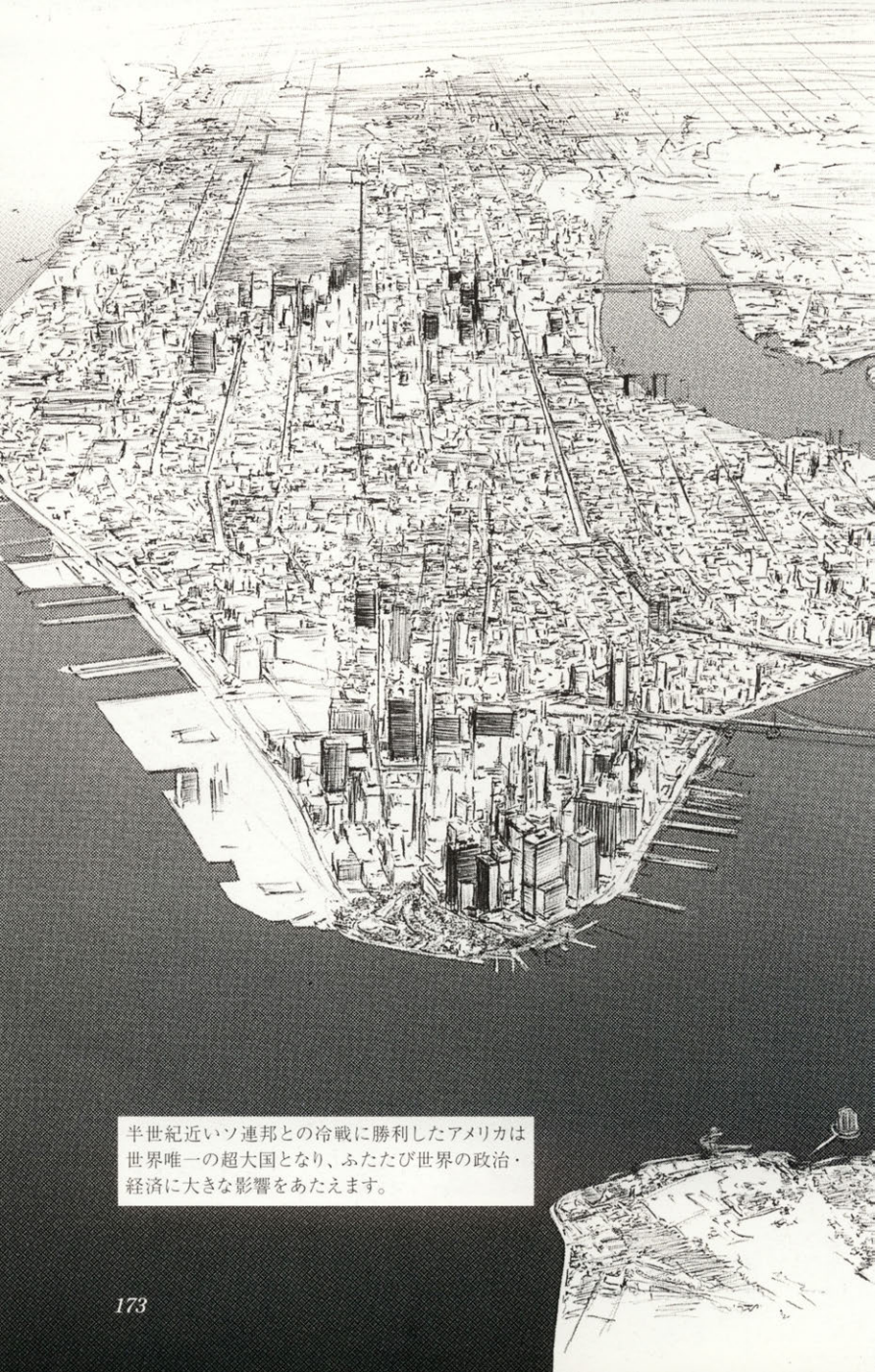
*米国・メリーランド大学図書館に収蔵。

現在、スイスはEU加盟を検討し、長年の永世中立政策にも変化のきざしがあります。高い競争力を誇った時計は一時期日本製品に押されましたが、ブランドの知名度を活かした高級品に特化し盛り返します。

1990年の東西ドイツ統一により、“鉄のカーテン”は過去のものとなり、新生ドイツはヨーロッパの中心国家への歩みをはじめます。91年、首都のベルリン移転が決定し、ボンは静かな学園都市のたたずまいを見せます。

フランスの主導のもとに発足した欧州石炭鉄鋼共同体(ECSC)はEUへと発展し、統一通貨を持つ高度な統合をはたし、さらに東欧、トルコなどが参加を希望し西ヨーロッパを超えて拡大しつつあります。

イギリスではアトリー、チャーチルの引退後も勢力の拮抗する労働党・保守党の2大政党がしばしば政権交代を繰り返し、国政を担います。



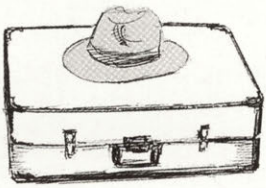
半世紀近いソ連邦との冷戦に勝利したアメリカは世界唯一の超大国となり、ふたたび世界の政治・経済に大きな影響をあたえます。

６０年代から８０年代にかけて日本は大きな経済成長をとげました。

高度な加工技術によって優秀な工業製品を輸出し、自家用自動車はあたりまえのものとなり、列島を高速道路が走ります。都市には高層ビル群が出現し、家庭には各種の電化製品がみられます。かつて日本人一行が羨望をもって眺めた事物の多くが日本的装いをもって実現しました。

――しかし今日、人々の価値観も多様化し、日本の成長をささえたさまざまなシステムも転換を迫られます。

再び模索の時代を迎えた今日、〝１９５０年の世界一周〟は語りかけるところの多い物語といえます。



中曽根康弘 "1950年"を語る

「1950年の世界一周」をご覧になった中曽根氏がこの旅に関する取材の機会を設けてくださり、2004年6月8日、中曽根事務所においてインタビューのはこびとなった。

昭和二十五（一九五〇）年二月、MRA大会に参加する日本人代表団編成のためスタッフのバーゼル・エントウイッセル、ケン・トウィッチェルの二名が来日する。マッカーサー元帥、吉田首相、さらに各界要人と会見した二人はいそぎ日本代表の選定にとりかかる。希望者は多く、選定には曲折があった。中曽根氏は直前に一行に加わる。

出発まで

MRAの東京支部のみなさんはいろいろ、アメリカとも連絡をとって、準備していたらしい。われわれのところへ来たのは、ひと月か、ふた月くらい前かね。

あの当時は占領下で、外国へ行けなかったからね。それでこういうチャンスがあるっていうので、志願したんです。それでまあ、けっこうでしょうということで（メンバーに）入れてくれたわけです。

あの時には日本の有識者は外へ出たくても出られなかったから、[*1]石坂泰三経団連会長、以下東西の有力な人はだいたい入ってきたね。大阪では、若手の財界人がいいっていうんで、[*2]大原（総一郎）君とかね。そういう人たちが入ってきて。

――当時は外貨の入手も難しかったように思いますが？

*1 石坂泰三（1886～1975）　逓信省を経て、第一生命に入社、1938年に社長。戦後は東芝社長に就任、同社再建を果たす。56年、経団連会長。戦後財界の中心的人物。

*2 大原総一郎（1909～68）　倉敷絹織（現クラレ）社長。1947年には民間から物価庁次長に就任。ビニロン工業化に尽力し、進歩的財界人として知られる。

例えば大映の永田[*3]社長、映画を出しとったからね。そんなこともあって、ドルを分けてくれって言ったら分けてくれてね。

中曽根氏にとって初めての欧米訪問。
アジア、中東を飛翔しヨーロッパに至る
「空の旅」は鮮烈な視覚的印象を伴った。

〝褐色のアジア、緑の欧米〟

飛行機に乗ってアジアからずっと周ってきたときに、アジアの方はベトナムとか、タイとかそういうところを通っているわけだ。だいたい褐色の水田に這いつくばって稲を植えている、だから褐色の世界だと。それが中近東に入ると、白の世界に入っていくわけですよ。砂漠とかね。それから建物も白ですからね。で、イタリーに入って行ったら、緑の世界に入ったわけですよ。これは芝生とかね、小麦の世界。

いろんな色が、がちゃがちゃってあわさると褐色になるんですよ。アジアっていうのは、非常に多元的でいろんな文化があって、混沌としている「褐色の世界」。欧米はもうキチンとして緑で、キリスト教文化で統一されている。やっぱりインドなんていうのは非常に貧し

*3 永田雅一（1906～85）　1947年、大映社長就任。多数の映画制作に携わり邦画輸出も手がける。政界との交流も深く、またプロ野球球団のオーナーにも就任するなど多彩な活動をみせた。

い感じ。街なんか見ると、住民が夜、道に寝てたからね、軒下に。物乞いみたいな子供もうんといた。子供たちが「お金ちょうだい」って寄って来るからね。

――敗戦の日本から見ても、ずっと貧しいような。

ええ、そう。砂漠（イラクやサウジアラビア上空のあたり）ではパイプラインを見てね。そして、あぁ、ここがやっぱり世界戦乱の要因になる。日本の生命線がここにある。そういうことを感じたね。石油パイプラインを見てね。

ヨーロッパにて

まず驚いたのは、ジュネーブに入ったら並木に列国の旗がひらめいていたことだね。国連（欧州本部）があったから。だから、国連加入国の旗がずーっと並んでいたのが非常にインプレッシブだった。（そこに）日の丸がないっていうのがこれは悲しく思ったね。

――マウンテン・ハウスに行かれると日の丸があったということですが。

そう、あそこでは、みなさんが非常に暖かい歓迎をしてくれて、サービスから接待にいたるまで、よく気を使ってやってくれたね。

――日本の評判は？

まだ日本というのはミステリアスな国であった。そして彼らは戦ったドイツ人やイタリー人のことは、よく知っているけど、アジアの日本人というのはほとんど知らない。異文明から入ってきた。それだけ大事にしてくれたんだね。

――スイスでは体調を崩す日本人代表もおられたそうで。

くたびれたんだね。そりゃそうだよ～（笑顔）、南の暑いところをずっと周ってきてね。スイスで一番、インプレッシブに憶えているのは六月二十五日。床屋へ行ったらね、お昼ごろ、一緒にいたドイツ人が朝鮮戦争が始まったことを教えてくれた。これは北（朝鮮）にやられちまったら日本は*ダンケルクみたいになるなと。そういうふうに思ったね。

――ドイツでアデナウアーにお会いになっていますが？

アデナウアーは非常に長身で、非常になんていうか身体ががっちりしとってね。そして、当時のドイツを支えているという印象を強くもったね。私が役人から政治家になったというのを聞いていたんだと思う。それで総理大臣になりたいから「チェンジ」したんでしょって。

――それはそのとおりになりましたね。

＊ダンケルク　第2次大戦初期の1940年、優勢なドイツ軍のため、英・仏軍は敗走、ドーバー海峡に面する港町ダンケルクが最後の拠点となった。その後装備を放棄して、英軍の大部分が脱出に成功し「ダンケルクの奇跡」とよばれる。

旅の点描〜中曽根氏外交関連資料集より

各国の印象についての興味はつきなかったが、なにぶん時間的制約があった。しかし、「それからね、ちょっと、あれ持ってきてごらん」と、中曽根氏は大きな資料集を準備し、貸し出してくださった。

表題に「卓越した外交手腕の源泉」とある中曽根氏の外交活動を記録した資料集成の一巻で、昭和二十五年〜三十一年を扱っている。訪問先での写真のコピー、報道、私信、各種草稿がおさめられ、MRAによる欧米視察に関するものだけでも二百数十枚の写真コピーがおさめられた詳細なものであった。

この資料をもとに、若干この旅の点景を列挙する。

スイス・コーでの写真は基本的に各国代表の交歓風景が多く、それぞれの民族衣装の代表達の姿が残されている。そのなかで日本婦人が着物を着ているのが目をひく。

ハンブルクではランチに乗って湾内を視察しているが、破壊され崩れ落ちたブンカー（Uボートの格納庫）が写され、市街の破壊もはなはだしい。

パリではパリ祭当日か、その翌日にエッフェル塔に登っている。（すくなくとも中ほどまで登っており、眼下にシャイヨー宮を眺めている）

ロンドンではバッキンガム宮殿に出向き、例の大きな熊毛の帽子を被った衛兵

の前に立って写真を撮っている。ニューヨークではロックフェラー・センタービルの屋上に登り、摩天楼の立ち並ぶ、典型的なニューヨークの都市景観を見ている。湯川夫妻、北村徳太郎代議士と四人での記念写真もある。ワシントンでは連邦議事堂のほかにもマウント・バーノン(初代大統領ワシントンの旧宅)を訪れている。

しかし、その行程は名所の訪問や各国要人との交歓にとどまらない。

中曽根氏はルールの炭坑では作業着を着てカンテラをさげ、ドイツの炭坑労働者そのままのいでたちで写真におさまっている。

他の日本人代表と別れて訪れた〝鉄のカーテン〟では東側のソ連兵の姿を撮影している。当時は国境にそって幅数キロにわたる無人地帯が設けられる以前で、国境線そのものをたどって歩いている。(つまり、無人地帯越しに国境線を望見したのではなく、眼前にソ連兵の往来する生々しい国境線を見ている)

さらに資料は氏が各国で工場、農場、労働組合など多様な現場と人々を訪れている様子を記録している。

これらの映像は、中曽根氏にとって〝1950年の世界一周〟が単なる「親善」旅行ではなく、広く、深く「戦後世界」を知り、祖国・日本のありようを模索する、探求の旅であったことを物語っている。

ワシントン訪問と「マッカーサーへの建白書」提出まで

――アメリカの印象は？

やっぱり非常に開放的で、非常に自由な世界だと感じたね。ニューヨークの街を歩いておってもね、すれ違う人が私はアメリカ人と思っているという印象があったね。異国人という印象を与えないな。そういう印象を非常に強く持ったね。

――ワシントンでタフトやコナリーなどいろいろな人とお会いになって。

マッカーサーの占領政策はどうですかと聞かれたから、簡単に〝いい〟〝悪い〟という程度の話じゃないからね。だからつげ口みたいに思われるのはいやだから、改めて書いて、手紙で送るからと。それをうまく、また利用したわけだ。

中曽根氏は帰国後の昭和二十六（一九五一）年一月、日本をめぐる諸問題の総括的意見書を書き上げワシントンに送付、ついでGHQに「マッカーサーへの建白書」を提出する。

マッカーサー元帥に持っていって、〝プレゼンテーション・トゥ・ゼネラル・マッカーサー〟とい

*コナリーは民主党の有力議員で、上院の花形ポストである外交委員長。タフトは共和党の大統領候補に目された政治家で、同じく共和党からの出馬を検討したマッカーサーと予備選でライバルとなる可能性もあった。

う建白書という形にしてウイリアムズ（民政局政治課長）にマッカーサー司令官に読ませてくれって。受け付けないんだよ。「占領下の国民がこういうものを持ってきても受け取れません」と。

そこで、これは実は昨日、航空便でアメリカの上院議員*タフトとコナリーに送ったと、説明した。そうしたら、マッカーサーは大統領選挙に出ようとしていたから、〝ナカソネ〟は何をワシントンに書いて遣ったんだと、ウイリアムズはびっくりして目の色変えて読み出したね。

私はそのまま帰ったから、ウイリアムズはマッカーサーのところへ持って行って…。

マッカーサーは日本占領の成功をアピールし、大統領選に出馬することを望んでいた。そのためワシントン政界の情勢を把握する必要があった。このようなマッカーサーと部下にとって、中曽根氏がワシントンの有力者に送った意見書に何が書かれ、占領統治がどのように評価されているのかは、非常に気にかかるところであった。それゆえにウイリアムズは急ぎ、マッカーサーへ建白書を取り次いだのである。

つまり、中曽根氏はワシントンで交わした個人的約束を「それをうまく、また利用し」、〝最高司令官マッカーサーが被占領国の一代議士の建白書を読まざるをえない〟状況をつくりだしている。

中曽根氏は「果断な行動力」と「周到な計画」をもって建白書提出に臨んだのである。

そしたらマッカーサーが読んでいるうちに、怒って破って捨てようとしたんだね。「如何なる聖将と雖(いえど)も、近代的国民を五年以上も占領統治することは不可能である」といったことが書いてあったんだね。

「如何なる聖将と雖(いえど)も、その個人的影響力を以て、人格の自由を欲する近代国民を五年以上も占領下に支配することは不可能でありましょう」――最高司令官マッカーサーへの痛烈な一撃。

意見書全体は単なる「抗議の書」ではなく、高い視点にたって日本の占領が日米双方の不幸であることを説き、日本の独立を求めたもの。豊富な事例から実証的、客観的に占領下の日本国民の本音を分析をしてみせている点も特徴的。

中曽根氏はこのあたりの機微をインタビュー中、「間接話法、They say that」と表現してみせた。建白書の全文は「政治と人生」(中曽根康弘著　講談社刊)に所収されている。

――マッカーサーという人物をどのように見ておられますか。

占領政策については割合に寛大で、日本のことも考えて皇室も残してくれた。だけれども、軍の下の方の連中、占領統治やってる連中、国情を無視して無理なこともかなりやった。そういうことからいって、今言った「如何なる聖将と雖も」という言葉が出てきたわけなん

だね。

マッカーサーは司*令部と、アメリカ大使館公邸を往復するだけで、ほかには出てこなかったね。それを見て、この人は大変な〝スタイリスト〟だと思ったわけで。スタイリストで気取ってて、権威主義者と思ったね。つまり東洋人というものについてはああいうやり方でないと、govern（統治する）できないんだと、そういう認識を持っていたかもしれん。

――貴族的と言いますか、君臨するといいますか。

そうだね。ようするに、占領統治という面からね、日本人に対しては権威を見せておかなければだめだと、そういう面が非常に強く映ったね。

――当初のマッカーサー礼賛の風潮のなかでも強い違和感を？

持っていたね、私は議員になって、そのいろいろ法律やなんかを作る際にいちいちＧＨＱの許可を求めなければ、修正もできなかった。そういう現実を見ていたからね。

*マッカーサーは在任中、朝鮮戦線視察などごくわずかな例外をのぞき宿舎とした赤坂の米国大使館と日比谷のＧＨＱを規則正しく往復し、日本国内を視察することはなかった。

最後に、〝1950年〟と現在、日本の状況について思われることを総括的に語っていただいた。

――1950年と現在をながめて思われることは。

あのころは単純だった。早く占領から脱却しようと、それに一心だったから。今はそれからさらに前進して憲法改正しようというところまで来たから、ある意味においては前進している。しかし、思想的には混迷している。

――当時と大きく変化し、かつては想像しなかったさまざまな問題に直面する日本、社会の現状をどのようにお考えに？

歴史の流れだと思うけどね。一概に非難、あるいは批判すべきではない。そういう歴史というものは非常に複雑性をもって、そして、前進したり、停滞したり、右に曲がったり、左に曲ったりして流れていくのが歴史というものであるんだよ。

しばらくの停滞から、九〇年代の日本から脱却して、ようやく憲法の改正へ、教育基本法の改正というところへ動きだした。だから二十一世紀の日本の前途というものを考えて、みんなが動きだした、という点に喜びを感じていますね。

――若い世代について思われること、メッセージを。

我々の年代はね、戦争に行って戦って、帰ってきて、占領の屈辱に耐えて、そして独立国家体制に前進しようと、いわば必死になってやった。だから、よく欠乏に耐える。世界の水平線を見つめながら、やった。今の連中は生まれながら銀のスプーンをくわえてきて、それはもうテレビはあり、食事は何でもあり、自動車はあり。

しかし、それは時の流れなんでね。それが歴史なんだよ。人間生活なんだよ。

そういう諦念をもっているからね、そんな中から今の若い連中が、自発的になにか志をもって奮発して努力してもらいたいと。自分で発見しなさいと、そういう気がしているね。

（聞き手／構成　志野靖史）

インタビューのおこなわれた六月八日は、中曽根氏がレーガン元大統領国葬参列のため渡米される直前というタイミングであった。

執務室の手前の応接室の壁には野道を行くレーガン大統領と中曽根首相を写した大きな写真が美しく額装され飾られており、印象的であった。

（当日スタッフ　大森春樹／小原さやか【ネコ・パブリッシング】
撮影　今井秀幸【スタジオ・アウパ】）

1950年MRA大会日本代表リスト

国会議員・衆議院議員

中曽根康弘（国民民主党）

北村徳太郎（国民民主党）銀行頭取を経て1946年衆議院議員。47年、片山内閣で運輸相、芦田内閣で蔵相。この視察旅行では国連本部、米国議会下院で演説をしている。

福田篤泰（自由党）外務省出身、吉田首相秘書官。

栗山長次郎（自由党）ハーバード大学卒、毎日新聞を経て衆議院議員。この視察旅行では中曽根とともにベルサイユ宮殿を散策している。

川島金次（社会党）連合通信記者を経て衆議院議員。スイス・コーのマウンテン・ハウスでは中曽根と同室。

参議院議員

早川慎一夫妻（緑風会）日本通運社長。

林虎雄（長野県知事）1947年、社会党より立候補し長野県の初代公選知事に。知事退任後の1962年に参議院議員。この視察旅行ではスイスで県内企業用にオルゴールを購入、アメリカではTVAダムを視察している。

赤間文三（大阪府知事）　**岸田幸雄夫妻**（兵庫県知事）　**服部岩吉**（滋賀県知事）

楠瀬常猪（広島県知事）　**杉山宗次郎夫妻**（長崎県知事）　**亀井清丸**（大阪府会議）

山田平一郎（兵庫県議会長）　**井上寅蔵**（同副議長）　**山田六郎**（兵庫県議）

浜井信三（広島市長）広島県庁出身で被爆経験をもつ。1947年広島市の初代公選市長となり復興に尽力。この視察旅行ではロイター・西ベルリン市長、オドワイヤー・ニューヨーク市長に被爆した楠から切り出した十字架を贈る。

大橋傳（長崎市長）　**原口忠次郎**（神戸市長）　**松橋久左衛門**（長野市長）

川本清一（広島市議会議長）　**望月庄七**（長崎市議会議長）

鈴木栄二夫妻（大阪警視総監）総監時代には強硬に労働攻勢と対決し、話題となった。著書に「総監落第記」。この視察旅行では中曽根とともに、ニューヨーク市警を訪問している。

石坂泰三（東芝社長）日本人代表団の団長を務める。のちに経団連会長。

大原総一郎（倉敷レーヨン社長）東大経済学部で講義を持つなど、学究肌で進歩的思想の財界人として知られた。中曽根事務所の資料には大原がスイスのマウンテン・ハウスで皿洗いをするスナップが残されている。いっしょに皿洗い当番を担当した中曽根が撮影したと推定される。

小林米三夫妻（京阪神急行常務）関西財界の重鎮で阪急創始者・小林一三の三男。

千金良宗三郎（千代田銀行頭取）　**鈴木剛夫妻**（大阪銀行頭取）

弘世現（日本生命社長）　**湯浅祐一**（湯浅蓄電池社長）　**村岡嘉六**（大隈興業会長）

山根春衛（大正海上火災）　**市村清**（三愛百貨店社長）　**竹中宏平**（竹中工務店副社長）　**伊集院虎一**（東京銀行常務）　**榎並正一**（神戸経営者協会理事）

石黒直一（東芝渉外部長）　**小島芳雄**（日本電通重役）　**本田親男**（毎日新聞社長）

高田市太郎（毎日新聞欧米部長）毎日新聞の海外特派員として知られる。1948年、戦後最初の日本人報道記者として欧米を訪問している。

村田幸一郎（滋賀県教育委員会）　**陰山寿**（日本海員組合代表）　**西巻敏男**（日本海員組合国際部長）　**井岡大治**（大阪市職員組合委員長）　**加藤錦**（九州労組代表）

中島勝治（長野金属労組役員）　**下高光春**（全金属労組青年部長）　**和田純一**（滋賀県職組）

相馬恵胤（幸新商会常務）相馬雪香の夫、旧大名の相馬家を継いだ元子爵。

相馬雪香（MRA）元文相・尾崎行雄代議士の三女。戦前からMRA運動に参加。戦後は米国に本社のある「リーダーズ・ダイジェスト」誌の日本版の編集もつとめる。

三井高維夫妻（三井報恩会理事長）　**金川義之**（放送局総務部長）　**高原義男**（総司令部勤務）

西山千（総司令部勤務）総司令部に通訳として勤務、おもにマッカーサーが公邸とした米国大使館に勤務。この視察旅行では北村代議士のワシントンでの連邦議会下院演説を同時通訳している。

桜井五郎（青年代表）　**三井高順**（青年代表）　**木村利根子**（青年代表）

「1950年の世界一周」参考文献

ダグラス・マッカーサー　津島一夫訳『マッカーサー回想記』下　朝日新聞社　一九六四年
中曽根康弘　『青年の理想』　一洋社　一九四七年
中曽根康弘　『政治と人生』　講談社　一九九二年
中曽根康弘　『天地有情』　文藝春秋　一九九六年
中曽根康弘　『日本の主張』　経済往来社　一九五四年
ピーター・ハワード　相馬雪香訳　『世界の再建』　MRAハウス　一九五三年
バーゼル・エントウイッセル　藤田幸久訳　『日本の進路を決めた10年』　ジャパンタイムズ　一九九〇年
林虎雄　『この道十年』　産業経済新聞社　一九五九年
林虎雄　『過ぎて来た道』　甲陽書房　一九八一年
大宅壮一　『世界の裏街道を行く』　文藝春秋新社　一九五五年
福島敏行　『欧米飛行紀行』　日本通運　一九五五年
コンラート・アデナウアー　佐瀬昌盛訳　『アデナウアー回顧録』　河出書房　一九六八年
片山哲　『回顧と展望』　福村出版　一九六七年
片山哲　『民主政治の回顧と展望』　民主評論社　一九五四年
クレメント・アトリー　和田博雄・山口房雄訳　『アトリー自傳』下　新潮社　一九五五年
浜井信三　『原爆市長』　朝日新聞社　一九六七年
北村徳太郎　『北村徳太郎随想集』　現代社　一九五九年
伊佐秀雄　『尾崎行雄』　吉川弘文館　一九六〇年

上毛新聞／朝日新聞／信濃毎日新聞／日本経済新聞／ニューヨーク・タイムズ／
週刊朝日／サンデー毎日／新聞月鑑

大田勝巧・大田千恵子編『卓越した外交手腕の源泉』（中曽根事務所外交関連資料集）　他多数

■ プロフィール

著者：志野靖史（しの・やすし）

早稲田大学第一文学部史学科卒。在学中にデビュー、漫画家、イラストレーター。著作に『内閣総理大臣織田信長』全8巻（白泉社）、『本土決算 よみがえる日本』（祥伝社）、『マンガ 心のレスキュー』共著（北大路書房）がある。

1950年の世界一周

2004年8月25日　初版発行
著者：志野靖史

発行者：笹本健次
発行所：株式会社ネコ・パブリッシング
〒152-8545　東京都目黒区碑文谷4-21-13
03-5723-6013（営業部）
03-5723-6008（編集部）
URL:http://www.neko.co.jp/
印刷・製本：大日本印刷株式会社

本書の無断転載・複製（コピー）を禁じます。
乱丁・落丁は、送料弊社負担でお取替え致します。
Printed in Japan
ISBN 4-7770-5052-1
©Yasushi Shino 2004

9784777050529

1920095014005

ISBN4-7770-5052-1

C0095 ¥1400E

定価(本体1400円+税)

1950年7月22日～23日、日本人代表団を乗せてロンドン－ニューヨークを飛行したBOAC(英国海外航空)所属ボーイング・ストラトクルーザー